女子　服部半蔵室

□友（定カ）　遠江守　早□□云松平遠江守□□其説、

●定行　隱岐守　法名勝山
始室薩摩中納言家久養女、実ハ家久之臣嶋津豊後守朝久女、義弘公之外孫也、生定頼而後卒、故家久公以家臣伊集院源二郎忠真之女是亦義弘公之外孫也、為養女嫁于定行、是酒井備後守室之母堂也、

●定綱　三郎四郎　越中守
定綱十二歳而拜領采地五千石于山川、十四歳任越中守叙従五位下、十八歳而為山川城主領一万五千石、廿歳而為士大将、今之大番頭也、二十三歳奉大坂之役、翌年夏有軍功、二十五歳而賜三万五千石於城州淀、定綱自縄張以築、四十一歳而賜六万石領濃州大垣、寛永十年癸酉四月也、四十二歳而叙従四位下、翌年賜十一万石於勢州桑名、慶安四年十□月廿五日六十而卒、（二カ）

女子　松平土佐守忠義室

女子　中川内膳正久盛室　号光顕院、

定実　信濃守

定房　美作守

女子　阿部對馬守重次室

定政　能登守　初賜一万石領勢州長嶋、後賜二万五千石領三州能登守苅屋、在故放于久松隱岐守之領地豫州松山、剃髪名不伯、

女子　松平備後守恒行室

133

定次　豊後守

女子　酒井雅楽頭忠清室

●定良　摂津守　室松平安藝守女

女子　松平肥前守定經室

●定重　越中守　四品　実父隱岐守定頼
室小松中納言女

（ママ）

（ママ）

（本文書中ノ●及ビ罫線ハ朱書ナリ）

△

満家院厚地村華尾山御由緒書

花尾權現

右、御元祖　忠久公御建立被遊、御神躰中尊者　頼朝公、左脇者永金阿闍梨、（栄金共有之候、大蔵姓之人ニ而候、丹後御局御帰依僧之由候、）右脇丹後御局、三躰之木像を御安置被遊候、且又　将軍家御願成就、殊ニ者為當國守護、　忠久公御願主ニ而、建保六年戊寅九月日永金敬白与銘有之数多之霊鏡ニ佛

躰を鑄候而、御内陣ニ被懸候、御局御自愛之御鏡之よしニ而、同前ニ奉納有之候、御局安貞元年嘉禄三年改元、十二月十二日御卒去故、任御遺言此所ニ而奉火葬、御荼毗所并御石塔御座候而、御霊骨奉納有之候、永金石塔有之候、又比企判官能員御局舎兄石塔之由申傳有之候、二基共遺骨納置申候、厚地村并東俣村者御局御領之由候、華尾御建立之時、永金開基ニ而平等王院御造立有之、御家御相傳之御本尊谷渡愛染御安置被遊、真言宗三拾六坊為被召建由候、右建保六年者御局御卒去十年前ニ而御座候、然者御局御存生之内ニ御建立与相見得申候、安貞元丁亥年御局御逝去より當甲申年迄四百七拾八年ニ罷成候、左候而、　勝久公御代寺院致敗壊候故、忠久公御代之様ニ被遊御寄附由之御寄進状有之候、

133の1

勝久公御判

満家院東俣大平木場之事、如前〻平等王院江令寄附者也、早任先例、可有沙汰之状如件、

亨禄四年三月八日　　勝久

進上平等〈王〉院快瑜法印

133の2

〔本文書ハ「旧記雑録前編二」二一七六号文書ト同一文書ナルベシ〕

勝久公御判

満家院東俣大平木場之事、如前〻〈急〉平等王院〈江〉令寄附早、然者就快瑜法印成歸寺、於永〻後代不可〈有〉聊尓相違、其外厚地村四至方至境、曩祖忠久如寄進能〻被〈令〉令首尾、悉以平等王院快瑜法印可有執務者也、〈仍〉為後日状如件、

亨禄四年三月八日　　勝久

進上平等王院快瑜法印侍司

133の3

〔本文書ハ「旧記雑録前編二」二一七七号文書ト同一文書ナルベシ〕

一之宮棟札

東俣村

一一宮大明神

海西路薩广州満家院一宮大明神并高尾大明神・御霊大権現再造之事、夫當社者、不啻一院之御感應、寔是三州所信崇也、經安掌領此院偏仰彼神、文明壬辰之春、謹抽丹悃新肇一宇、雖經之営之不克擧落成之功、院時屬他氏、尓來渉十年、奉命再領院務、誠頼神霊之加彼〈被〉

力也、故茲歳之春、知前功之可聴(中續)、而命工匠修葺畢功、豈無感格乎、伏希國家安寧人民豊樂、専祈經安文武兼備忠義共全子葉孫枝永歌繁茂之美、壽山福海益傳高廣之昌、

肥前守藤原經安敬白

延徳三年辛亥三月二十七日

右之通、満家院東俣一宮大明神・高尾大明神・御霊大權現之棟札ニ記置申候、依之相考候趣左之通御座候、

一一宮大明神与御崇候者　御元祖忠久公ニ而可被成御座与相考候、其故者、　帝王之儲君を一之宮与申、又東宮、又春宮共奉申候、然者　忠久公ハ　頼朝公之御嫡男ニ而、治承三年御誕生被成、　頼家・実朝両公之御兄ニ而御座候、　頼朝公ハ正治元年ニ被成御逝去、建保六年花尾權現御造立之年迄者廿年ニ罷成候而、　忠久公御願主ニ而、永金阿闍梨　忠久公之御意を以　頼朝公之御尊像御安置被成、華尾權現与御追尊被遊候与相見得申候、　忠久公ハ嘉禄三年六月十八日被成御逝去、同年(安貞元年)十二月十二日丹後御局御卒去ニ而御座候、依之▽(田)御局并△永金阿闍梨之両像御安置、御三躰花尾權現与奉申候、然者御局并永金阿闍梨之両像ハ御存生之内ニ御安置被成候哉、又者御卒去後ニ而も御座候哉、此儀難考御座候、扨又華尾權現御祭之節、權現之社内ニ御膳四膳相備へ、内三膳者花尾權現御三躰ニ相備、一膳者一宮大明神江權現之御内陣より被相備候由ニ御座候、然者　帝王之儲君を一宮与奉申事を以、　忠久公者　頼朝公之御嫡男ニ而被成御座、華尾權現宮之一之宮にて御座候故、一宮大明神与御追尊被成候儀別条無之筈ニ相考申候、右一宮大明神棟札者延徳三年ニ書記申候、當年より二百拾歳餘ニ罷成、御家十一代　忠昌公御治世之初ニ相當、村田肥前守經安満家院再領知仕、一宮大明神修覆仕候節之棟札ニ而御座候、右文章之内、寔是三州之所信崇也与記置申候、此文字ニ付而相考候に、　忠久公者三州之太守公ニ而被成御座候故、不限一院三州之万民尊仰不仕候而不叶御事ニ御座候得者、文章之内ニ自然ニ其旨趣相見得申候、

一右棟札者一宮大明神・高尾大明神・御霊大權現同社内ニ御安置之事御座候、一宮者　忠久公ニ而可被成御座与相考申候得共、高尾・御霊之両神之儀存當訳無御座

候、同社ニ被成御座事ニ候得者、何様御由緒可有之儀存候得共、究而難考御座候、

右者、満家院厚地村古寺廃跡之地此節御建立ニ付、花尾權現之御由緒、其外御考ニ罷成儀共御座候ハヽ可申出旨被仰渡候故、御記録所ニ而相知候訳、又者我〻共相考候趣如此御座候、以上、

（宝永元年）申二月十八日　　御記録所　市來源右衛門（家年）外ニ両人

厚地村花尾權現宮御由緒寶永五年御記録奉行申出之書付　但愛染明王御安置之次第也、

薩州満家院郡山厚地村　華尾權現宮者、建保六年之秋、御元祖　忠久公御草創、御神躰中尊　右大将頼朝公、左右永金阿闍梨・丹後御局、御三躰之木像御安置候而、花尾權現与御崇、寺院三十六坊御建立、本寺を平等王院与号、御本尊者従　頼朝公　忠久公江御附屬之御家御相傳谷渡五指量愛染明王御安置候、弘法大師作、雖然十四代太守勝久公御代寺院悉及廃壊、依之、十五代　太守貴久公御治世天文年間鹿児嶋大乗院御建立被成、花尾之御神廟執務兼帯被仰付、平等王院江御寄進之采地厚地村全大乗院江御寄附候、御相傳之愛染明王尊躰者鹿児嶋護摩所江御安置被成、毎年於　御城開帳御祈禱被仰付候、然処ニ、故太守中将綱貴公花尾山江平等王院・圓融院・多聞院・本地院・普賢院此五院御中興被成、毎院采地弐拾斛宛御寄捨可被成由平等王院江者薩州鹿児嶋郡吉田佐多浦村之内權現領門、圓融院江者同村之内宮之原屋敷、多聞院江者同日置之郡郡山村之内久保田門、本地院江者同村之内小原門、普賢院江者同村之内福留門、被仰出置候、依之　太守少将吉貴公平等王院一宇先此節御建立被成、薩州吉田佐多浦之内權現領門高弐拾石平等王院江御寄附有之、大乗院兼帯ニ被仰付候、且又御本尊之儀者、　三位法印龍伯公十六代主・宰相惟新公十七代主・中納言家久公十八代主・中将光久公十九代主御四代御尊敬之愛染明王一躰弘法大師作、御長蓮臺迄二寸七部、従　光久公佐多豊前久達江拜領被仰付置、此節被差上候ニ付、愛染明王一軀并　頼朝公・丹後御局・永金阿闍梨之尊牌平等王院江御安置被成候事、

右之通、従　右大将頼朝公　忠久公江御附屬之愛染明王ハ、依旧式毎年六月朔日於　御城　御開帳御祈禱御座候ニ付、如本護摩所江御安置被成置、此節平

等王院江御安置之御本尊者、從豊前久達被差上候愛染明王ニ而御座候、此段至後代傳誤儀も可有之候条、詳ニ御記録所江可記置旨、依仰如件、

御記録所
肥後二右衛門盛雄
市來早左衛門親意
田中五右衛門國明

寶永五年戊子三月日

東俣村一宮大明神之御由緒

郡山之内東俣村一宮大明神之御神霊者　御元祖忠久公を奉崇候由申傳有之候、依之　忠久公御事一宮与御崇候儀於無御別条者、被達　貴聞、御再興可被仰付候間、御神霊之御由緒相調可申出旨被仰渡、左之通御座候、

一一宮大明神与御崇候者　御元祖忠久公ニ而可有御座与相考候、其故者、帝王之儲君一宮与申、又者東宮共奉申候、然者　忠久公者　頼朝公之御嫡男ニ而、頼家・實朝両公之御兄ニ而御座候、　忠久公建保六年花尾權現宮御造立被成、　頼朝公・永金阿闍梨・丹後御局、右御三躰之尊像御安置被成、花尾權現与御崇被成候、花尾權現宮御祭禮之節、權現之社内ニ供御四膳相備候、内三膳者華尾權現御三躰ニ相備、一膳者一宮大明神江華尾宮之御内陣より奉備候由御座候、此儀　帝王之儲君を一宮与奉申候事を以相考候ニ、　忠久公者　頼朝公之御嫡男ニ而被成御座、花尾權現之御為ニ者一宮ニ而被成御座候故、一宮大明神与　忠久公を御追尊被成候儀別条無之筈与相考候事、

一東俣一宮大明神棟札（但棟札者此前座ニ記置候故、此座ニ令略之也、）

一右一宮大明神棟札延徳三年ニ書記、　御家十一代忠昌公御治世之始ニ相當、御家老村田肥前經安満家院二度領知仕候節、一宮大明神之宮殿致修覆候棟札ニ而御座候、右文章之内、寔是三州之所信崇也与書記申候、此文字ニ付而相考申候ニ、　忠久公者三州之太守ニ而被成御座候故、三州之萬民尊敬不仕候而不叶御事ニ御座候得者、自然ニ文章之内其趣相見得申候、且又右棟札神名之内高尾大明神・御霊大權現同社内ニ御安置之由ニ御座候得共、此両神之御由緒究而難考御座候、同社ニ被成御座候へハ、如何様無據御由緒ニ而可被成御座

与存候事、

右之通、華尾權現宮御内陣より一宮大明神江供御奉備、且又　帝王之儲君を一宮与奉申候儀、其外棟札之内三州之所信崇也与書記候、此三ケ条を以相考候ニ、一宮大明神者　忠久公ニ而可被成御座儀御別条御座有間敷与詮儀仕候、右調書之通御座候条、此上御吟味次第奉存候、以上、

（宝永五年）
子五月廿二日　　御記録所　肥後二（盛香）右衛門

▽田田中五右衛門△

135の2

右一宮御由緒之訳寺社奉行申出之趣左ニ記之、

郡山之内東俣村江一宮与申社頭有之候、右社　忠久公を為奉崇由候、右子細委曲相調可申出旨被仰渡候、右社頭之儀者當座江も兼日承及候趣有之、相糺申方ニ申談置候処、右之通被仰渡候、右ニ付御記録所書付之趣見届申候、然者右社内此度も見聞（田合）申付候処ニ、皆共ニ束帯之古キ木像数躰御座候内、女躰并僧形之像も有之候、右社頭江往古者太夫并内侍屋敷相付、其外ニも社頭江相付候者多人数為罷居由候、至當分も郡山頭取社人右之社頭格護仕罷居候、右式ニ御座候得者、差立候社頭ニ而御取持為有之与相見得申候、尤當座古帳見合申候処、肥前守經安棟札計ニ而、外ニ由緒書等無御座候、右棟札之旨趣ニ三州之所信崇也与有之候を以相考候得者、常式之社頭之格ニ者難見請候、無據神霊を崇為申与相見得申候、且又　華尾宮年中御祭禮弐拾度之内、拾六度者右社内より段々ニ一宮江神供献來申由候、一宮二月霜月両度之祭禮之節も、右一宮社内より華尾權現宮江神供二膳宛献申由候、右通ニ御座候得者、花尾宮一宮者　忠久公より外無之候得者、旁以御記録所ニ而も相考候通　忠久公を為奉崇社頭与於當座も相考申候、一宮之由緒委曲可申出旨被仰渡候ニ付、如此御座候、以上、

136

（宝永五年）
子七月廿八日　　寺社奉行所

華尾權現之社邊ニ御創建以來之事跡総括之碑文御建立之儀ニ付而、故実相考可申上旨被仰渡候、因茲相

考申候得共、先頃差上申候書付ニ肝要之儀共ハ申上候、其外左之通ニ御座候、

一華尾權現之御内陣ニ神鏡八面御座候、其内四面者佛躰之脇ニ薩州満家院厚地山權現御正躰七躰之内与御座候、祈願之旨趣相記、建保六年大歳戊寅永金敬白、或又大蔵臣栄金、大中臣真久与有之、又者永金与計年号月日下ニ為相記茂御座候、残四面之神鏡者佛躰計有之、其外霊鏡三面御座候、

一身之長サ五寸計、中心も五寸計之釼一握内陣ニ有之候、中心之表ニ毘沙門天王安重作与銘有之、裏ニ波平かきのき國平丸与銘有之候由、右神鏡并釼之圖御記録之内ニ相見へ申候、先年大乗院先住江相尋申候処、釼之儀者今ニ者無之候、右銘書有之候神鏡四面之外ニ、今一面銘書佛躰之脇ニ薩州満家院厚地山權現御正躰七躰之内と相記候神鏡有之候由、大乗院當座江被申出置候、此儀者先頃寺社奉行所よりも右神鏡有之候由問合承置候、何様之訳ニ而御記録之内ニ相もれ候儀者相知レ不申候、此外御用(由)ニ被成候儀共存寄無御座候、先比差上候書付為御覧又〻書付差上申候、以上、

御記録所
肥後二(盛香)右衛門

▽(田)子九月廿八日△

▽(田)田中五右衛門△

137

▽(田)　永金阿闍梨置文写之写

厚地山境目日記圓融院常住薩摩國満家院厚地山大境之事

一秋吉の西のはなよりはしめて、ほしかせたうの尾をかきり、
一はしか山せとの口松尾の原道をかきり、
一ゆの木の谷の道白薄のさこをかきり、
一なすひ田西の尾を猿おとしほきの上道をかきり、
一ゆすの木の原めんをかきり、
一水かうちはりこ谷夕かくら道をかきり、
一土せ(世)く(と)の口(世口い)しちの尾まちはへうへの合内、くぬ木つかより中の木場ふミわたして、しりかくめの坂佛の尾をかきり、
一樂の木場屋敷半分厚地領ふかりきりのとゝろやたけのつした(世ま)より水の尾をかきり、
一あふき山の尾をかきり、花尾嶽の社柱二本大隅、其よハ厚地領、杉のせたうすはつ(世る)松の尾をかきり、
一丸山之堂柱二本ハ厚地領、二本大隅、

一境の原尾をかきり、一王子の馬場をかきり、王子の山田たら
口をかきり、
『壬欸』
仁治三年甲寅十月十四日やうきん定之△

御目見列定　但承付次第記置之、

一列　（宝永二年）西十二月十五日
一御太刀　川上清兵衛
大嶋七郎次郎　一列　西十二月廿八日　一弓進上　川上六左衛門
新納治右衛門　亀山八郎兵衛
酒匂次郎左衛門　川上唯右衛門
本田助右衛門　四元堅助（田物）
堀四郎右衛門　蒲生正次郎
平田平六　折田治部左衛門
海江田仲太夫　白尾金左衛門
向井四郎右衛門
上村平右衛門
一列　同月廿一日　一御太刀　本城七郎左衛門　一列　一弓　郷田源助
川上八郎次郎　伊地知内蔵之允
蒲生八之丞　仁禮藤左衛門
伊地知新五左衛門　諏訪甚右衛門
二階堂城之助　平田藤之允
伊東作右衛門　三原武兵衛
平田藤右衛門　市來早左衛門
川越治部左衛門　長谷場伊角
高橋喜右衛門　岸勘左衛門
讃良權左衛門　田中五右衛門・市來早左衛門調之次第、
五代二右衛門　一列　子閏（田正）六月十九日　一御太刀二種一荷
伊勢善右衛門　種子嶋伊右衛門
相良伊右衛門　▽（サ）一列　一御太刀△　亀山李太夫
一列　一御太刀二種一荷　東郷惣左衛門今日者御断ニ而不被罷出候、
一列　一御太刀　三原二郎四郎
碇山仲左衛門　有馬次右衛門
川上十郎左衛門　肥後萬次
田尾嘉兵衛（田兄）　一列　一御太刀　川上長右衛門
土持佐左衛門（田作）　猿渡新助
仁禮覚之丞　東郷喜右衛門
比志嶋兵次郎　伊勢九市郎今日八御断、
福屋助左衛門　中江八助
三原四郎右衛門　田代甚助

一列
一御太刀二種一荷　本田信次郎　子閏正月廿四日、田中五右衛門・市来早左衛門・肥後二右衛門調之次第、　岩元惣兵衛

一御太刀　佐多休左衛門　一列
一御太刀二種一荷　川上清左衛門　中江九右衛門

新納弥左衛門（田右）　一列
一御太刀二種一荷　川上左京　（卅ナシ）〔一列〕〔一弓〕

伊集院善太夫

長谷場源七　一列
一御太刀　北郷次兵衛　冨山袈裟

伊地知權左衛門　鮫嶋次郎左衛門

五代勝左衛門　川越民部左衛門

平野民部左衛門　伊勢九市郎

是枝忠存坊　税所弥右衛門

西主馬右衛門　鎌田休左衛門

一列
一御太刀二種一荷　秩父十郎兵衛今日俄病氣ニ而御断不罷出候、同日本田先キニ罷出候故御断かと評判あり、

一御太刀　山田覺太夫　一列
一御太刀　伊集院（田喜左）〔加右〕衛門

川上納右衛門　土持助右衛門

本田長左衛門　名越清右衛門

西九郎右衛門　財部傳吉

山口五（田郎）〈兵衛　▽（卅）一列
一弓△　今井新右衛門

高橋（田武右）〔民部左〕衛門　伊勢仁右衛門

今井次右衛門　若狭右衛門二男　吉田彦右衛門

一列
一御太刀二種一荷　土持權兵衛

一列
一御太刀　平山七兵衛

桂八左衛門

高崎惣右衛門

上井五郎左衛門

山田佐九郎

大山平七

別府長次郎

（宝永五年）
子二月廿二日御礼調次第

一列
一御太刀二種一荷　家とくの御礼　大嶋休左衛門　一御太刀二種一荷　初而之御目見　北郷七左衛門

継目之御礼　大田吉兵衛　養子成　相良戸左衛門

一御太刀　分地之　北郷右衛門八　一列
一弓　初而　平山五郎右衛門

養子　弟子丸藤左衛門　継目　家村李之進

初而　本田勘太郎

土持平左衛門

継目　亀山八郎兵衛

一列
一御太刀　右同　最上孫左衛門

(田家督)□長谷場伊角
次目
福屋伊左衛門

一列
一御太刀

(田継目)初而
川上助左衛門

(田初而)右同
相良源蔵

▽(田初而)今井一兵衛△

一列
一中紙進上三拾九人

(田ナシ)一列
〔一中紙進上三拾九人〕

139

○坊津一乗院之文章(田書)者住僧法印性海代ニ悉く虫付ニ相成相捨り候、為相残文章(田書)之内寺社奉行所江被差出置候、其内ニ御供之三家相見得候所有之、寶永五子年卯月十九日、如正本令書写早、

139の1

此口切不相見得也、
渋川殿ニ而候、サル程ニ酒匂代〻於テ當家忠節申候事、本ノマヽ、
酒匂カ家ニ於テ當家ノニヲ(ミカ)守可申者也云〻、
一役事酒匂ハ沓ノ役ニ而候、猿渡者御釼之役、本田幡ノ奉行、幡指ハ左近尉ハ中間也、貞久ノ時筑前ニ向小貳を追罰シ給時キ、貞久幡を小貳之方へ奪取候時、左近尉切付て軈而越中か頸取、幡うハひ返し、高名仕候由ニより、其時改左近尉北原と号す、是ハ総州(上総貞久)御代ニ而候、今(田ノ)□北原此末也、其後久豊ノ代ニ伊東緩怠申候時、(田伊東追)□罰ノ御時、北原とハ字ノヒヽキ悪トテ勝原とヨヒ給、是ハ久豊ノ仰也、其後カチ原ヲ梶原ニ取成ス也、今ハ本名字梶ニ取成、是大僻事也、

私ニ相考候ニ、真幸院北原家ハ近代迄諸所を令領、差立候家筋ニ而候、右之書付ニ相見得候北原ハ、真幸の北原与ハ可為別家候哉、梶原家之儀も、　忠昌公御母堂梶原三郎太郎弘純息女故、弘純一族致繁栄候、梶原備前景豊ハ　立久公　忠昌公御家(田老)相勤候、此梶原とも可為別家候、左近尉ハ後ニ大迫と為名乗儀も有之候由、或ハ北原、梶原、或大迫抔と折〻に為名乗ニ而可有之与相考候、▽(田)真幸院北原ハ伴家ニ而、肝付之庶流ニ而候、梶原家之北原ハ平姓ニ而候間、格別相違之事ニ御座候事△

(本文書ハ(田)ノ体裁ニ倣フ)

140

河野六兵衛通古被書記置候諸家大概之内ニ

一酒匂家之大概之内、　忠久公御供之内本田・酒匂・猿渡者棟梁ニ而為罷下与相見得申候得共、系圖を見不申候故、究而難申趣ニ有之候、

系圖者六兵衛江戸江被致持参タル由ニ而候、

一猿渡氏者平姓ニ而御座候、系圖者此節持参仕候書物之内ニ相加有之候、御意次第可奉備御覧候、文□(田書)等者無之候、猿渡大炊(信種)入道休覚事ハ　貴久公江奉仕、蒲生之地頭をも被仰付置候、夫より代々結構ニ被召仕候、休覚者猿渡勘左衛門六代之祖ニ而御座候、勘左衛門家嫡家与相見得申候、

『天正之頃猿渡越中(信光)与申者有之候、其子掃部(信豊)与申候、越中以來地頭をも被仰付、首尾能被召仕候、喜右衛門・少左衛門ハ掃部子孫ニ而御座候』

不断光院并下伊敷両所　春日大明神御由緒

一不断光院開山清誉上人、世性(田姓)進藤氏、京師之人也、天文之末弘治之始此國江下向、清誉本住花洛ノ不断光院故、不改其号為寺号、花洛之不断光院者近衛殿下之寺也、當院創建之時、近衛龍山(前久)公為見物當國江下向、上人亦　公之為知己故光臨、於當院寺亦被潤色、

一文禄三甲午年※1近衛殿下信尹公當國ニ左遷※2之時、不断光院寺内ニ祖神春日大明神を勸請被成、一七日閉籠御宿願加持、其内禅宗不可参之札を立給、

※1（行間）

『此信尹公初信輔公といふ、近衛家十八世龍山公の男也』

※2（行間）

『或説云、秀吉微賤ヨリ出テ姓氏不詳、故ニ妄ニ平氏ト称ス、或告曰、八十姓ノ中藤原氏最高トス、藤原氏ニ非レハ摂政・関白ニ任ルコト不能、於是秀吉藤原氏ヲ冒サンコト　信輔公ニ請フ、公其微賤ニ出ルコトヲ悪ンテ是ヲ免サス、故ニ秀吉悪ンテ公ヲ薩州坊ノ津ニ左迁ス』

一鎮(田守)□江五斛之所伊志岐ニ御付被成、爰元之役人衆□(田江)御□(田談)合ニ而少寄附被成候由被仰出、伊志岐ニ茂春日大明神御勸請なり、是ハ真言宗也、

一伊鋪ニ知(田智)恵光院与号、七斛御附被成、聖家一人御格護被成、是も京都智恵光院を不改御心持也、

一不断光院ニ茂智恵光院ニも御勸請之春日　御家門様御

141の1

自筆之三十六哥仙御寄進被成、繪も少〻御〔直ニ〕(田書)為被
遊由、
右者不断光院之由緒被書出候内ニ相見得候、
正月十八日

141の2

一春日大明神(下伊敷)
一御殿四尺方　小板葺
一舞殿四敷弐間　茅葺
右　近衛殿下信尹公御建立、
一社人屋敷　壱ケ所
右両通之写、寺社所より出ル、

141の3

(島津勝久)
(花押)
薩摩國鹿児嶋郡於築山、被崇給春日大明神、奉寄進之
地、平等王院快瑜法印可有執務之状如件、
亨禄(享)四年貳月十九日　勝久
進上平等王院侍司
(本文書ハ「旧記雑録前編二」二一七五号文書ト同一文書ナルベシ)

142

頼朝公御法名之由
将源大傳禅定門　初之　御法名之由、
大王院湯楽佛　後之　御法名者如此奉申候由、
右　頼朝公御法名之由、中郷衆中鳥越四郎右衛門下
人吉左衛門後ニ者甚左衛門与致改名候由、市來江致
中宿罷居候由、後(彼)▽(田)甚左衛門申出候、依之従御記録所
被遂僉儀候ニ付△甚左衛門事致欠落候、右之御法名偽
テ申出置候ニ付、僉儀ニ痛為致欠落由候事、
▽(田)　子二月十日令写之也、
私云、一向無筋之儀を作立候哉、又ハ為申傳趣を及承申出候
得共、及僉義候上ハ屹与申出候趣無之、行迫り為致欠落ニ而
茂可有之候哉、此訳者難相究候事△

143の1

▽(田)『〇』宮内源内より猿渡仲左衛門入道法楽跡申出候趣左記之△
宮内源内より御側御用人弟子丸与次右衛門江相附候而
申出候趣ハ、猿渡仲左衛門入道法楽跡無之候、御立被
成□(被下度)(田)候、源内女房ハ靏丸七右衛門娘ニ而候、法楽
□(孫ニ而候)(田)、源内二男血筋之儀御座候間、右之二男を法

楽跡ニ御立被成被下度候、法楽祖父者猿渡圖書与申候、其子兵部少輔、其子仲左衛門入道法楽ニ而御座候、圖書者羽月地頭ニ而彼地へ被召移候、兵部少輔者於高麗戦死仕候由、段〻口上書を以申出趣有之候、系圖并古キ書附等相添差出候、佐多豊前殿被為聞、御記録奉行江相調申出候様ニと被仰渡候、依之御記録奉行調書被差出候趣者、猿渡圖書と申人御記録方ニ相見得不申候、源内差出候系圖ニ者、備後、其子兵部少輔与有之候、古キ覚書ニ者、圖書事羽月地頭猿渡休覚江相附罷移候由▽㊐有之候△、休覚羽月地頭之儀、御記録方ニ相見得不申候故信用難仕候、其比羽月地頭ハ猿渡喜右衛門先祖猿渡越中(信光)ニ而御座候、

一猿渡越中羽月地頭ニ而被罷移候節、二男家ニ而候猿渡備後相付候而罷移候、備後嫡子兵部少輔朝鮮國ニ而遂戦死申候、圖書事備後時代ニ而御(㊐座候、兵)部太輔も系圖ニ相見得▽㊐候得△者、備後一統ニ(㊐而茂可有)御座哉与相考候得共、究而相知不申候、殊更法楽事者靏丸七右衛門家内札ニ取候而罷在、時〻鐘を突候役ヲ相勤申候由、御組帳をも被相除、家内札ニ取為申ニ而可有御座候へハ、何そ由緒も無之、血筋迄之願ニ而者重キ御訴御取揚可被成儀何様ニ可有御座候哉、何分ニ茂御吟味次第ニ奉存候趣ニ有之候、尤文章續キ者少〻違も可有之候得共、一筋ニおひてハ毛頭違無之候事、

143の2

信安 私云、法楽事ハ右之猿渡備後一統ニ而可有之候、宮内源内致所持候系圖喜右衛門信安致一覽候処、虫付不見、後平氏一流ヲ系リ候而猿渡藤四郎(㊐と)系來、夫より彼備後実明、其子兵部少輔実昌与系り付有之候、然者藤四郎と備後実明との間数代切れ候与相見得候、備後弟をも系り付有之候得共、其名不覚候、右之訳ニ候へハ、究而備後可為(㊐一流候)、圖書与申名者備後初之名ニ而も候哉、(㊐又ハ為)傳誤ニ而も可有之候哉、此両條無心元候、御記録奉行肥後二右衛門被申候者、猿渡休覚羽月地頭之儀者御記録方ニ一向不相見得候、越中を同名故休覚と取違為申ニ而可有之と御記録方ニ而者申談候、尤休覚羽月地頭之由申出候儀、御記録所ニ而不致信用候、猿渡圖書儀ニ付而者宮内源内悉ク取違為申出与存候由、肥後二右衛門物語ニ而候、

此儀者後年見合ニも可罷成候、仍如此相記置也、
(田宝)
寛永五年子三月十八日書之、

（コレ以降「諸家由緒調」ニノミアリ）

『○』九代之大守　忠國公御法名御院号一件書付前後相
切候得共珎敷所写置之候
但高岡善載坊自記之内一ケ条書抜
一御大祖以來廟堂要覽深固院之場ニ　大岳公　真照院殿
共奉申候由相見得申候、
右、段々之次第御座候、　忠國公文明二年正月廿日
御逝去之砌、真言宗御帰依ニ而、頼濟法印御引導相
勉、御法名浄蓮院殿東巖大岳大居士と奉称候、
杉本寺院号茂夫より浄蓮院と改号候与相見得申候、
翌文明三年　十代之大守立久公御代、御位牌深固院
江御安置、御法名深固院殿大岳玄譽大禅定門与御改
号為被成与奉存候、左候而、　忠國公御逝去以後廿
餘年相過、明應六年十月廿七日、　十一代之大守忠
昌公御代御志願有之、　忠國公之御尊霊を小城權現
与被崇候節、御寄進状之内ニ者真勝院殿大岳譽公居
士と被書記、安養院執務被仰付候、浄蓮院殿東巖と
御法名真勝院殿と被相改候儀ハ何分ニ茂相知不申候、
其已來大乗院坊中善聚院小城權現社格護ニ相成候、
年間ハ相糺候得共相知不申候、元禄三年　太守光久
公御代、善聚院ニ茂　忠國公御位牌被成御座候故、
真勝院三字之額　光久公御親筆ニ而御寄進有之、右
御位牌殿之前ニ今以被掛置候、御牌面ニ茂真勝院殿
と有之由候、然者真言宗ニ而ハ真勝院殿与従以前至
當分奉称候、曹洞宗ニ而ハ御系圖之通深固院殿与従
前々奉称來候、且又　日新公御法名御系圖ニ茂、梅
岳常潤在家菩薩、號梅岳寺殿、又日新寺殿与有之候、
日新寺ニ而者日新寺殿と被尊称候、伊集院梅岳寺ニ
而者梅岳寺殿与被称來候、曹洞宗一宗ニ而も依寺号
御院号相替為申と相見得申候、右傍例を以ハ、　忠
國公御院号両様ニ有之候而茂何そ御差支ハ御座有間
敷と奉存候、又ハ廟堂要覽ニ茂深固院殿・真照院殿
と奉申由被記置、従前々両様ニ奉称候、且又御忌日
小城權現御祭儀ニ茂正月廿日ニ相定居申候得者、御
位牌所御忌日御同様之筈奉存候、御法名之内玄譽を

譽公と被書記候儀、御法例ニ茂御座候而、御尊敬之方を以公文字御書記被成、玄譽茂御同様与奉存候、

一御系圖ニハ、　忠國公文明二年庚寅正月廿日逝於薩摩別府、享年六十八、法名玄譽、号大岳深固院殿と被記置候、

一加世田真言宗坊津一乗院末寺明星山杉本寺浄蓮院、上古者号總持院、　忠國公御逝去之後改浄蓮院、

一忠國公御逝去前、一乗院住持頼濟法印ニ御逝去之節御引導御頼被召置、文明庚寅正月廿日御逝去被遊候處、御存生之御約束ニ而候ニ付、則日泊之浦茅野御仮屋江被差越、一乗院寺中僧六人召列、頼濟法印加世田杉本寺江御遺躰奉守罷越、荼毗ニ而御霊骨ハ石之箱ニ奉納候、御石塔出來、六角堂ニ御建立御座候、御霊骨之石之箱之書付、　忠國御法名浄蓮院殿東巖大岳大居士、文明二年庚寅正月廿日到御逝去、不違御存命之約ニ謹而奉明入引導阿字門ニ者也、明星山本ノマヽ、本ノマヽ、頼濟法印与書記有之由相見得申候、

一福昌寺會下深固院ニ、文明三年辛卯年　忠國公之御為十代之太守　立久公御代右寺御建立被成候、御法名深固院殿大岳玄譽大禅定門御位牌御安置、御正忌日ハ正月廿日之由、當深固院申出候、

但深固院之儀ハ、福昌寺開山石屋和尚最初吉利深固院開基ニ而候処ニ、及廢寺、福昌寺開基之後深固院与院号被引移候哉、委細之訳ハ相知不申候得共、深固院与号シ、和尚退院之地ニ而為有之由候、其以來福昌寺ニ住持代〻退院之地ニ相成居候、然者文明三年大岳公御位牌所ニ御取建為被遊ニ而御座有間敷哉与寺傳有之由候、左候得者、深固院之儀、院号ハ元來有之、直ニ大岳公御院号ニ為被成与相見得申候、

一御家十一代之太守　忠昌公御家譜之内、明應六年十月廿七日　忠昌公御判物、小城權現社一宇御新造之御寄進状之内、前後之文略ス、

但真勝院殿大岳譽公居士、奉崇小城殿之神之知也、本ノマヽ、燈明田之儀ハ永代退轉不可有之、宮之儀ハ安養院連續之院主可致執務旨相見得申候、

但當分小城權現社ハ大乗院坊中善聚院格護仕居申候、

一小城權現社御祭儀、毎年正月廿日於　御神前衆僧致
集會修正相勉申候段、當善聚院より申出候、
一真勝院殿大岳玄譽居士
右真勝院三字之尊号元禄三庚午年　太守光久公御
筆之額善聚院江被下置、　忠國公御位牌殿之前ニ
今以被掛置候由、善聚院より此節申出候、

『〇』市來小四郎家於御記録所直ニ御尋之趣左記之
一其時分嫡家無別儀段与有之より、嫡家ニ安堵被仰付候
而私迄六代血筋を以相續仕來候事と有之迄之間、於御
記録所肥後二右衛門・田中五右衛門より相合市來小四（家永）
郎江相尋候処ニ、返答申候ハ、嫡家ニ安堵被仰付候儀
何そ御證文ハ無之候、家傳ニ申傳候迄ニ而候由、
元禄十五年午正月廿日
『同末』
一此嫡家一筋無別儀候段同日相尋候処、右之返答之通ニ
而家傳迄之由、小四郎被申候事、
『二』
一此写物ニ而御座候与有之儀同日相尋候処、小四郎家嫡
家ニ而相傳有之故、庶流之面〻江者依懇望嫡家之系圖
を本ニいたし写為遣筈ニ而候故ニ、此等之儀を以為申
之由、小四郎返答有之候事、
一私家ニこそ委細相知申候与申儀同日相尋候処、委細之
儀別ニ口傳茂無之候、此節御記録所江差出申候雌黄地
之料紙ニ書候久家より小四郎家系ニいたり系り候系圖
之切ニ、傳記委書付有之候通ニ御座候由、返答有之候
事、
一忠家以來之儀庶流之者絶而存不申事ニ候と申儀同日相
尋候処、返答候ハ、忠家子之内僧壱人・女子壱人之傳
右雌黄地切系圖ニ相記有之候、此儀庶流之者不存儀ニ
而、是又嫡家之儀相分候家〻よりハ委細ニ我家之様ニ
不存筈ニ御座候故、右之通申出候由、
一〇由緒家傳段〻有之儀与申儀同日相尋候処、返答候者、
由緒家傳段〻与申儀別ニ口傳無之候、此節差出候雌黄
地之切系圖之傳迄之儀ニ候由、
一忠家法名迄慥ニ書付召置申候与有之儀同日相尋候処、
返答有之候者、雌黄地之切系圖忠家之傳ニ法名善梁と
有之候、此儀ニ而候由、
一肝要之家傳等委細ニ有之儀与有之候儀同日相尋候処、
返答候ハ、是茂雌黄地之切系圖傳記之儀ニ而御座候由、

一僧壱人・女子壱人之行衛私より外存候者と有之儀同日相尋候処、返答候ハ、是茂右雌黄地之切系圖傳ニ相見得候より外別傳無之由、

『三』

一『△』委細ニ古系圖ニ相見得申候得共新系圖ニ載不申候与有之儀同日相尋候処、返答候ハ、是茂右雌黄地之切系圖ヲ古系圖与申儀ニ而御座候由、

一古系圖ハ其節忠家兄弟与有之儀同日相尋候処ニ、返答候ハ、是茂右雌黄地之切系圖之儀ニ而御座候由、

『四』

一『□』嫡家一筋として御側江被召仕候与有之儀、午正月廿一日、於御記録所田中五右衛門・肥後二右衛門相共ニ市來小四郎江尋候處ニ、返答候ハ、市來家嫡一筋として被召仕候趣證書等ハ無之候得共、右之通ニ家傳ニ申傳候与被申候事、

『五』

一嫡家故委細存申候、拙者より外ニハ縱何様之書付抔ヲ所持仕候而茂与有之儀相尋候処、小四郎返答被申候ハ、私家ニ傳來仕候雌黄地之一枚系圖嫡家之故所持仕候、別ニ申分無之由小四郎被申候、正月廿一日、

一宗領職之儀ニ候得者与有之儀相尋候処、小四郎被申候ハ、宗領之儀者家傳ニ申傳儀ニ御座候由被申候、午正月廿一日、

一自分ニ茂成程能存候嫡家ヲ差除と有之儀相尋候処、小四郎被申候ハ、先年市來源右衛門(家年)より私系圖之儀懇望ニ付、写候而差遣候ニ付、私嫡家之儀ハ存被罷居候趣如申出ニ而御座候由、小四郎返答被申候、午正月廿一日、

右本行之趣調被仰付候ニ付、於御記録所市來小四郎江相尋候処、右朱書拾六ヶ条之通小四郎より返答候ニ付記置候、尤小四郎より右朱書之趣書写度之由被申候ニ付、於當座朱書書写相渡置候、

元禄十五年午正月廿一日　肥後仁右衛門(盛香)
田中五右衛門(国明)

145の2

由緒家傳段々与申儀乍恐申上候、私元祖惟宗廣言事、忠久公御母堂丹後局ヲ　頼朝公より廣言江被下候ニ付、忠久公於廣言宅ニ奉養育御成長候、因茲　惟宗忠久公と奉申候、就夫最初之御紋ハ廣言幕之紋蓬萊舞鶴ヲ被遊御附候由候、後迄ニ十文字之御紋ニ蓬萊を御加被遊候由候、廣言ハ日向之國司之由候、廣言初之妻ハ畠山重忠姉ニ而

御座候、此腹ニ出生之子忠康と申候而、宇治川ニ而戦死仕候、　忠久公一腹之御舎弟忠季ハ　忠久公より若狭國守護ニ成御申候而、島津称号迄被成御免候、忠季・忠經皆〻承久乱ニ致戦死候故、廣言一族之國分友成を養子ニ仕、市來院本主尼道阿養娘ニ嫁シ、政家ヲ出生仕、外祖之譲を以市來ヲ領知仕、左候而、惟宗氏ニ而罷居申候、政家事阿蘇谷氏与家争之事旧記ニ有之由候、元弘建武之比、市來太郎左衛門氏家と申者軍労仕候事無別儀候、氏家子忠家ハ　氏久公御聟ニ罷成候、忠家孫久家事ハ　久豊公御子分ニ御契約有之候儀御記録所ニ詳ニ有之由候、依之由緒家傳与申儀者右通ニ御座候、

『△』古系圖之儀者忠家娘格護仕、行先相知不申候、

『□』無間事ニ備前事ハ御側江被召仕打死仕候、世忰則被召出、小四郎(家朗)与名ヲ被下、追付郡山地頭職被仰付、高を茂拜領仕候儀、無別儀事ニ御座候、其子玄蕃左衛門(家親)、其子袈裟(家治)松事孤ニ而御座候得共、右一筋として高を茂段〻被下候、備前より四代右通ニ結構ニ被仰付置候事證書御座候、

右ケ条、今月廿日・廿一日両日市來小四郎當座江罷出、小四郎口上書之内相尋候処ニ、其節ハ不存當返答大形ニ申候ニ付、由緒家傳右之通ニ御座候由ニ而、今日當座江右書付持参被致候ニ付、臨写致、本書ハ小四郎方江相返申候、已上、

『元禄十五年壬』
午正月廿五日

肥後仁右衛門(盛香)
田中五右衛門(国明)

146

※丑正月二日

嶋津美作より(久治・垂水家)被申候、従前〻太刀進上申候時分嶋津兵庫殿(朗・加治木家)と前後之儀申様ニ御座候、當年者兵庫殿為代又八(忠久薫)郎殿御太刀進上被成候由ニ候間、申分無御座候、此旨被聞召置可被下之由披露候、出雲殿・帯刀殿・勘解由殿・市正承、今日之儀者大刀進上之由候間、其通可有之候、重而之儀者難承置候条、明日茂致相談返事可申旨申渡候事、

取次本田六左衛門

※(行間)

147

『　二月十三日

右嶋津兵庫殿家者、嶋津美作与御太刀進上之時分前後之沙汰有之候得共、兵庫殿之儀者御家御身近脇之御惣領ニ候、又八郎殿家督ニ罷成候而も、御太刀進上之儀美作家より下ル仰有之間敷候、兵庫殿代も可為同前候、當正月、兵庫殿為代又八郎殿太刀進上候、然時ハ美作方より申分無之候、又八郎殿代ニ成候而者申分可有之由被申候ニ付、何れ茂以相談右之通ニ申渡候間、左様ニ御心得可被成旨、（島津久竹）出雲殿・（島津忠廣）市正殿より被仰渡候事、

取次本田六左衛門

『嶋津大膳殿（久豫 日置家）家之儀ニ付被仰候覚書』

口上書之覚

一旧冬手前太刀次第之儀御断申上候処ニ、御書物を以御返事細〻承届候、就夫手前よりも以書付申候、對御評定所口能かましく指當たる様ニ可被思召入儀茂可有之哉と念遣千萬ニ存候得共、手前之有筋を為可申解如斯御座候、

一御家ハ元祖之所ニ而次第之差別候与見得候処ニ、御連枝様之事ニ付色〻之（『本ノマヽ』）御差別有之候与此方江者承候か、又見申候得者、此中之御賦ニ茂又作殿（北郷久定）も家之次第之ことく樺山之次ニ御賦と見得申候、ケ様成所垂水之様子を我等ニ承候處、引合存候得ハ、又作殿も　中納言様御孫、只今之　太守様之御男子ニハ二番目之御子、（北郷久直）部殿も諸大夫、（島津忠紀・垂水家）玄蕃殿より殊ニ御舎弟と申、ケ様成所ニ御差合共候ハヽ、中〻椛山之次抔之様ニ茂不被存候、（喜入忠長・光久三男）攝津守殿之儀も前代ニ不相替喜入之家之次第ニ御賦と見得候、ケ様之所我等ニ承筋ニ相違之様ニ御座候而疑申候、若輩者之故ニ候哉、難落着存候、

一惟新様御事守護代とハ無心元存候、守護職被遊候儀者疑無御座候、様子ハ、文禄四年當國檢地之目録を為可被成御給、　惟新様ハ高麗陣ニ被成御座候得共、御守護之故従高麗態与御召候而、於京都右目録被成御給候、其時ハ　竜伯様茂御上京之由候得共、右之式ニ而　惟新様目録御頂戴ニ而候つると承候、

一ケ様成御家之事共、結句到御公儀我等若輩申上儀如何ニ候得共、有筋承候而罷居候侭如此御座候、

一縦さがりたる家ニ而茂例ニ成事候得者、夫を引立被申候時者其例計ニ而茂御押候儀難成事も候与見得候ニ、手前儀ハ又乍勿論各別ニ候得者、例之所ニ御賦可被成

候、右之通何ケ度茂可申与存候、左様之段可被聞召達候、

萬治二年正月十三日

『右同断之儀也』
写

149

一※1 玄蕃殿　太守様御一腹之御舎弟ニ御座候故、御身近く有之由候、　貴久様御舎弟之御筋目ヲ御相續被成候時者、其家ニ有來たる次第ハ前代ニ可相替儀難心得存候、式部殿・玄蕃殿御元服ニ而五位之諸大夫ニ御昇進候時、弾正（島津久慶・日置家）より申分不仕由候、右御両人諸大夫ニ御成候迚、如何様ニ弾正家より可有申分候哉、無心元存候、其家〻之筋目一通之次第ハ前代相替間敷儀ニ存候、

一※2 先年御成　御目見得之時者、相模殿（島津久信・垂水家）隠居ニ而弾正之次ニ御太刀進上候由承候得共、隠居ニ而茂其家之次第さからせられ候筈とハ不存候、殊ニ天下ニ而　御目見之事ニ候尓、一入題目之事ニ而候得ば、我等ハ曾而左様ニハ不存候、

一※3 又四郎殿（島津久敏・垂水家）死去候而より式部殿を相模殿御養子ニ被成候得者、寛永元年ニ候、御成ハ其後同七年ニ而候なとゝ有儀被仰候、夫ハ此方より何そ構申儀ニ而無之候、

一※4 式部殿・玄蕃殿　公方様江　御目見者無官之時さへ御座迄相替候由候、御當家ニ付御太刀進上之次第之儀ハ、右ニ申候様ニ御養子ニ御成被成候ハヽ、其家之一筋ニ可有之与社存候、

一※5 晴蓑生害以後ニ義虎御子三郎（忠隆）次郎を聟養子ニ而候と御座候事相違ニ而候、晴蓑存生之内ニ三郎次郎を聟養子ニ被成、十六歳ニ而出水より祁答院江被越候者天正十二年ニ而候、同十五年、羽柴美濃守殿日州表江被為下候時分、於根白坂之陳同四月三郎次郎十九歳ニ而戦死仕候、息下総（常久）事ハ同年正月十八日ニ生申候、下総六ツニ罷成候天正廿年七月十八日ニ社晴蓑ハ生害ニ而候、其時分細川幽齋又従　竜伯様茂至下総御誓紙共有之事ニ候、右之様子ニ候處、各別之儀を承候、萬事無心元被存候事、

一※6 義弘様守護職被遊候ニ付、我等家ハ脇之惣領之様ニ御取持候段承候、尤其通ニ心得罷在候、　義弘様守護職之儀必定ニ候哉之通承候、必定ニ而候半と存候其故ハ、天下ニあかりし御系圖ニ茂守護星在之候、其草案手前

ニも所持申候而罷居候、

一※7 兵庫殿御下入候而垂水江之争者理不尽之様ニ御座候由承候得共、手前ハ又左様ニハ不存候、各別ニ候其子細者、先年於江戸御成之時分、　公方様江或　御目見之次第、或拜領物等ニ到迄茂萬事相州よりハ先ニ而御座候、左様之書付共于今致格護罷居候、手前ニケ様之先例共候、御成之時分茂此方先ニ而候者乍勿論、其刻御吟味候而相濟、弾正者相州より先ニ而候つらんと社存候、右之様子共ニ候間、今度被仰聞候筋ハ曽以落着不申候条、當正月之御賦ニ而候者太刀進上ハ不罷成候、左様之通可被聞召候、

※8 一正月御太刀進上之次第無高下とハ乍被仰、御身近キ脇之惣領を御相談之上ニ而先御對面ニ御賦候由承候、ケ様成次第先例ニ相替候ニ付而申上儀ニ候、去〻年美作殿次ニ御賦共御座候而太刀進上可申段承候、其時分達而申候茂、先例ニ相替三番ニ御賦ニ而候間、太刀進上曽以難成通、鎌田左京殿・相良主税殿ニ而細〻申入候、其砌承候ハ、此賦少茂正ニ成事ニ而者無之候、後年ハ又何れ茂次第可被引替候条、先如御賦御太刀進上申候

※9 様ニと承候、正ニ成らす御賦ニ而候とハ被仰上ニハ、やからを申様ニ候侭、其年之太刀進上仕候処、當正月之御賦之次第不相替候ニ付、此節申分仕候処、去〻年鎌田蔵人殿ニ而被備　上覧相濟候由、此度社被仰聞候、左様ニ候ハヽ、御儀定すハりたる様子去〻年可被仰聞儀と存候、今更御相違之様ニ候而無心元存候、何ケ度茂例を可申通候間、被聞召達可被下候、

万治二年正月十三日

※1（行間）『押札ニ而

垂水之儀ハ、　貴久様御舎弟之御筋目相續被成候時ハ、前代ニ可相替儀難御心得通尤ニ御座候、式部殿・玄蕃殿五位諸大夫ニ御進之時分、従弾正殿御申分不承候与書申候ハ、諸大夫ニ御進候ニ付御用捨候哉、御太刀御持参又ハ　御目見得有之時分、玄蕃殿御堅固之中先後之事不承候ニ付為申事ニ候、彼御兄弟御元服之刻御同前ニ御手前より御申分可有之と申儀ニ而ハ無御座候、右之条最前達し不申候』

※2（行間）

『押札ニ而
先年御成之時分ハ式部殿垂水家督ニ而　御目見候故、相模殿
一所衆并之　御目見構ハ有間敷哉与出合申候』
※3（行間）
『押札ニ而
又四郎殿死去ハ寛永元年と書出候ハ、右之年之末式部殿養子
ニ御定候其引合ニ而候』
※4（行間）
『押札ニ而
垂水家之家督式部殿　公方様江　御目見無官之時さへ御目見
之次第相替候者、　太守様御身近キ故ニ而如此候哉、難計候』
※5（行間）
『押札ニ而
晴蓑御跡次ハ三郎次郎殿を聟養子と承候ニ付、年代之考ハ不
存候与書付候、其段ハ此方いかニもあやまりニ而候、細川幽
齋又　竜伯様より下総殿江御誓詞御給候哉、承居候』
※6（行間）
『押札ニ而
惟新様守護職為被遊ニ付、御系圖ニ守護星も御座候通得其意
存候、　黄門様御事　義久様御聟養子ニ御成候ハヽ、御家御相
續と申傳候故、守護代と被申人も御座候』
※7（行間）
『押札ニ而
追考ニ、　黄門様御事　義久様御婿養子ニ被成御家御相續被
遊候、此段　家康様慶長七年之御神文ニも相見得、慥成事ニ
候、　惟新様守護代之儀者御系圖ニも相見得候、上井伊勢守
日帳天正十三年四月廿四日ニ慥ニ被書付置候事見届候、為後
年書付召置候、以上、
　　貞享五年辰三月廿六日　　久竹』
※8（行間）
『押札ニ而
八朔之御太刀之次第、御對面所兵庫頭殿・大膳殿、御廣間垂
水殿・豊後殿ニ而候、就夫兵庫頭殿・垂水馬(殿脱カ)之受取渡同時ニ
両方之御庭ニ而相渡候、御三人同前之御取持ニ候ハヽ、馬三
疋同時ニ渡可申哉と出合候』
※9（行間）
『押札ニ而
御身近き脇之御惣領先　御對面ニ相究候而其賦懸　御目候、

御使鎌田蔵人殿ニ而御座候、其書付何れ之衆江被仰渡候、使両人此賦ハ正ニ不成由被申候哉、蔵人殿御覚も可有之候間、何れ彼人下國之刻被仰達可然候、此覚書ニも無之候条、いか様と難申候』

150

御太刀進上座配之願申出候彼是引合之正文、又者題目之儀此壱軸ニ記之、其外委細之書付者別冊ニ留置之也、

150の1

仰出

嶋津權七殿家御下様(義弘女・島津久元室)御跡与有之儀、女御跡ニ而如何ニ候、殊ニ今度江戸江御供ニ而候、左様成唱ニ茂如何ニ候、伊作家跡無之候間、此跡ニ被仰付度被　思召候間、得与致相談、つかへさる儀ニおゐてハ其段可被申上候旨上意候事、

延宝六午十二月廿九日　御使喜入次兵衛

150の2

島津權七殿儀女性跡ニ而候、今度江戸御供被　仰付候処、唱茂如何ニ候、然者伊作家跡無之候間、此跡ニ權七殿被仰付度被　思召上候、何そ支有之間敷哉、相談仕可申上旨先頃被　仰出候、依之河野六兵衛(通古)ニ申付為相考申候處、日新様御事伊作家・相州家双方を御兼御相續為被成儀候得者、伊作家断絶為申ニ而者無御座候、其上題目之御文書・御重物之綱切丸茂彼家より御相傳之御事ニ御座候処、此節伊作家別ニ被召立候得者、右躰之御文書・御重物等茂筋目違申儀ニ罷成、如何奉存候、此等之旨六兵衛委細書付差出申候間、備　上覧申候、權七殿家之儀茂、下野(島津久元)三男又五郎、夫より又六殿、權七殿与系圖之表續來申候得者、専女性之跡与申ニ而茂無御座候間、旁以此節權七殿を伊作家ニ被　仰付儀ハ先被遊御延引可然奉存候間、奉伺候、已上、

未三月三日(延宝七年)　肝付主殿(久兼)

150の3

『三月五日

右達　貴聞　上意候者、伊作家之儀者右之筋ニ候ハ、可為其通候、　中納言様御舎弟ニ久四郎(忠清)殿御跡無之由候間、是ニ權七殿可申付旨　上意候事、

御使　相良主税

喜入次兵衛』

150の4

覚『河野六兵衛書出候写也』

一日新様御三歳之時御父伊作又四郎殿（善久）早世被成候、其以後又四郎殿御従弟　相模（運久）入道一瓢様　日新様御懐梅窓様江御取合被成候処、相州家を伊作家江相加　日新様を両家之棟梁ニ御取立可被成之旨堅キ御約束ニ而、両家を一家ニ御合被成候、殊ニ　日新様御事　一瓢様ニ者御養子迄之儀ニ而、御血筋ハ伊作家ニ而御座候得者、伊作家断絶とハ難申奉存候事、

一一瓢様御事　十代之太守立久様御舎兄友久様御子ニ而、無餘儀御家ニ而ハ被成御座候得共、僅二代之御家ニ而御座候得者、何之證文も無御座候、伊作家之御事ハ数代　将軍家御證文過分ニ御座候、両家を御兼被成候得者御家重ク御座候様ニ奉存候事、

一右伊作家之御文書皆共ニ御文書方ニ御座候、并綱切丸と申御腰物茂伊作家江御相傳之御重物ニ御座候、于今御南戸ニ御座候事、

一日新様右之通ニ相州家・伊作家を御合御相續故、何之筋ニ而茂無余儀御家ニ而御座□（候カ）、御一門中僉儀之上ニ而　貴久様を守護職ニ被奉仰候由ニ而御座候、左候而、貴久様御事者守護御代〻之御名御付被成、御二男忠将者相州家之家名、御三男尚久ハ伊作家之家名を付ケ被申候時者、　日新様ニ而両家を一ツニ御合被成、　貴久様御代より又三家ニ御分ケ被成候事御相談之上ニ而右之通ニ御座候欤と乍憚奉存候事、

一伊作家御取立被成候ハヽ、御系圖ハ如何様ニ御つらせ可被成哉と奉存候事、

（延宝七年）未三月二日

150の5

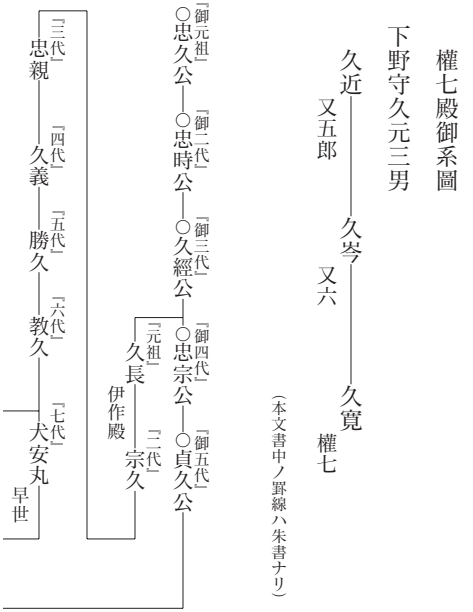
権七殿御系圖

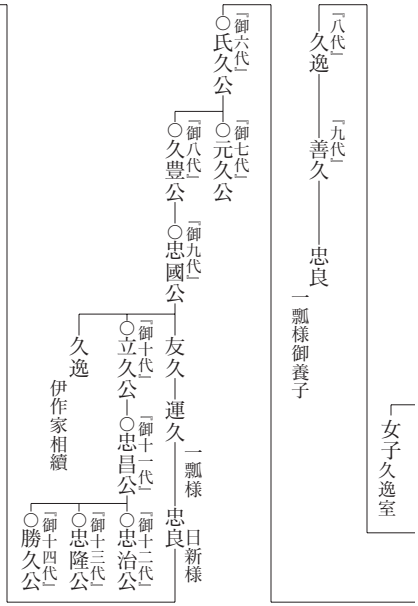
下野守久元三男

久近（又五郎）―久岑（又六）―久寛（権七）

（本文書中ノ罫線ハ朱書ナリ）

150の6





（本文書中ノ○及ビ罫線ハ朱書ナリ）

『右三通河野六兵衛書出写也』

150の7

覚

嶋津權七殿を　中納言様御舎弟久四郎殿より系候様ニと
被仰出候、依之次第之書付懸御目申候、

惟新様御子様之次第

御姫

右、故豊後守殿（朝久）御内室、御屋地与申上候、

靏寿丸殿

右、天正四年日世（早カ）被成候、御年八歳、飯野幻生寺
御菩提所ニ而御座候、

又一（久保）郎様

中納言様（家久）

万千代丸殿

右、天正十六年泉州堺ニ而早世被成候、御年九歳、
飯野之宗仁院御菩提所ニ而御座候、

久四郎殿　御名乗忠清

右、文禄四年早世被成候、御年十四歳、栗野徳元
寺御菩提所ニ而御座候、

御姫様

右、おしたと申上候、

※

三月八日

※（行間）

150の8

『三月十日
右達　貴聞、　又一様より四番目之久四郎殿より嶋津權七
殿家ニ續候筋可被申付候、尤權七殿方江者其段可被申渡候、
已上、

御使　喜入次兵衛
相良主税』

如右件自家之由緒達　貴聞、伊作家別ニ御取立不被成候、依之、自家之儀伊作家相續之分ニ候間、來ル八朔之御太刀進上致延引、重而得与様子可申上与致了簡、諏訪采女殿江申談、右　仰出之御使喜入次兵衛殿江茂采女殿前より我等内存之通内談候而、思慮も候ハヽ可承旨申入候付、次兵衛殿江被相達候得者、右之了簡尤ニ被存候、此節其分ニ而通候ハヽ、後ニケ様成時節無之残念ニ可存候間、此節八朔之御太刀先延引之筋ニ仕、町田勘解由殿・肝付主殿殿江相頼可然候、御當家之儀又左衛門殿(新納久了)御存知為被成事ニ候得者、又左衛門殿下着之時分致内談申上筋能候半与被申之由、采女殿より手紙ニ而申來候、弥彼衆茂同意之由候間、其通ニ相極候、左候而、八朔御太刀進上御断之儀、岸良勘左衛門を以桂杢之助殿江申達候事、

150の9

御用帳写『押札ニ七月十八日』

嶋津圖書殿(久竹・宮之城家)より岸良勘左衛門を以被為申候、今度御立前嶋津伊賀殿(久寛)家被仰出筋目共有之候、左様成ニ付私家茂少シ考申儀共有之候、當時　御両殿様御留守之儀ニ候間不申上候、來ル八朔祝物之儀者延引可然候条、御免可被成候、委細之儀者重而可申達由被為申候、取次前より勘左衛門江相尋候者、此儀如何様成御申分共不相知候、大抵何様成共承度候、御老中御尋之時分御取合可申候由申候、勘左衛門被申候ハ、委細之儀私茂承不申候、乍然伊賀殿御名字之儀ニ付仰出有之候時分、河野六兵衛(通古)より被書出候ハ、　貴久様御代ニ忠将ハ一瓢様御假名、尚久ハ伊作家御假名御付為被成由相見得候、其書付　中将様懸　御目候、左様成ニ付少考申儀共候、此段者重而得与御相談可有之との圖書殿御内存之由、勘左衛門被申候事、

取次桂杢之助

延寶七年十一月廿二日、川上十郎(久文)左衛門を招候而致内談候ハ、如右當八朔之御太刀御断申仕合候間、來正月

御太刀進上座配御賦ニ品を被替度由申出度との段〻申候、左候而、右之筋新納又左衞門殿江其方を以致内談、何れ茂家老衆江可申出与存候由申達置候、同年十二月廿七日、口上書相調、河野六兵衞方江永山休兵衞を以為致内談候処、尤之儀ニ候、八朔ニ致申分候節旨趣然与不承達、楚忽之存寄共申候き、此節段〻承尤ニ存候、内〻此方家者三男家ニ而者氣之有ル家と存候故、島津中務久輝役儀被仰付候節、我等と連判次第之儀御尋候節も、中務殿より我等ハ奥ニ判致可然与申上、于今其筋ニ候、此節御申出之儀ニ付御尋も候ハヽ其段可申上由、六兵衞被申之由、休兵衞より承候、同廿八日、川上十郎左衞門ニ而新納又左衞門殿江、今度私之儀ニ付口上書相調差出筈ニ而候、來月御當番ニ而候、常〻御心安候条、口上書為御内見遣申候間、御覽被成、思召寄候ハヽ御直シ可給候、何卒願之筋ニ相達候様ニ御取持頼存之由申入候、依之為返詞、口上書之通尤候、何そ存寄も無御座、此儀無御口能可相達事ニ候、此節者無餘日候、重而座配賦之時分願達候様ニと申儀為入念儀ニ候、扨此方家伊作家相續之儀ハ古老之衆申傳候、

150の10

野村大学咄ニ茂慥ニ被聞候、平田清右〔純正〕衞門咄を茂被傳聞候条、前ニ嶋津中務久茂と又左衞門殿江御記録方被仰付候刻、此方之家伊作家相續之儀申傳候間、名字を茂被替可然旨先圖書殿江申候得共、何そ慥成儀無之由ニ而無御座候、此節之儀者伊賀殿を伊作家跡ニと被仰付候、其時段〻由緒入御耳、伊作別ニ御立不被成候得者、此方家伊作家相續之御心持ニ而名を茂御付候儀無別儀候、如何ニ茂可相調之由別而悃ニ為被仰之旨、十郎左衞門被申候、右口上書之留左ニ記之、

口上留

私家之儀、伊作家相續之御心持ニ而彼家之名付來申候由申傳候得共、文書等も無御座候、程久敷儀ニ候得者、申出儀茂如何ニ存致延引罷居候、然處當春伊作家御取立可被成旨被仰出候砌、私家元祖尚久伊作家之名御付被成候由緒を茂被達　貴聞、伊作家別ニ御立不被成候得者、私家ハ品茂相替申候間、其御見合ニ而年頭御太刀進上之座配被仰付被下度存候、此節者無餘日候之間、重而座配御賦之時分願之通ニ被仰付候様ニ御申頼存候、

以上、

（延宝七年）未十二月廿七日　　嶋津圖書（久竹）

右口上書喜入次兵衛殿を以致披露候処、嶋津中務殿・嶋津帯刀殿・肝付主殿殿被聞召、何れ茂江可申上候、左候而、得与御相談可有之由為被仰通喜入次兵衛殿より承候事、

同廿九日

如右旧臘致披露候、就夫翌年正月二日新納又左衛門殿より直ニ承候ハ、年内此方家之儀ニ付申出儀共川上十郎左衛門ニ而相達候、其段喜入次兵衛被致披露候口上書ニ家之品と有之候儀、我等者能為存事ニ而輕調候、何れ茂者御不案内ニ而重ク被思召、伊作家跡と申出候様ニ被為思候ニ付、如何様共又左衛門殿挨拶不被仰候間、此方家伊作家相續之御心持ニ而彼家之名を茂付來候、其御見合を以急度座配被仰付可給旨申出可然と被仰候間、先比十郎左衛門ニ而右之儀申入候處、御悃之儀共忝存候、被仰通御尤ニ存候、勿論伊作家之跡ニ急度被仰付候儀、慥ニ系圖ニ茂見得候ハヽ、此節申分ニ及不申候、伊作家相續之御心持一筋ニ座配被仰付度之願申事ニ候間、内存之通以書付次兵衛殿江遣、此旨を以御取合頼申候半と申候得者一段能候ハん、此節申出儀頂上之時節ニ候条、委細書付次兵衛殿江可遣之由被仰候、依之同月五日内見之覚書相調、川上十郎左衛門ニ而次兵衛殿江遣候、其留左ニ記之、

150の11

一私家伊作家相續之御心持ニ而伊作家之假名御付ケ候ニ付而存合候、古兵庫殿忠朗ハ　中将様御差次之御舎弟ニ而候得共、　惟新様御隠居御跡之御心持ニ而又八郎兵庫与假名御給、御二男家之内第一ニ御取持御座候、當兵庫殿（久薫）茂右由緒故　御前ニ而茂殿之字ヲ付ケ、余之二男家ニハ為相替御取持ニ而御座候、然者三男家ニ而者私家伊作家相續之御心持之御見合を以急度御太刀進上之座配被仰付候様有之度候事、

一尚久より私迄数代ニ罷成候処、座配之御断至只今申上候儀如何ニ可被思召候得共、尚久代ニハ御連枝ニ而其時節并之家無御座候、紹益（忠長）儀在所より日限不定致参上

御祝儀申上候、家老役被仰付候而茂同役中争有之家無御座候ニ付、右両代ハ御太刀進上之次第御断可申上儀無之候、河内儀ハ(忠倍)下総殿(常久・日置家)と家高下之沙汰為有之由候、下野代(久元)ニ者最前弾正殿(久慶)と八朔之御太刀隔年ニ上手仕候得共、役儀被仰付候而以後、私家前代伊作家相續之御心持ニ被仰付候證文無御座候、下野役儀と申、老太ニ而弾正殿年若ク候ヲ相手ニ仕儀如何ニ存謙退故、後ニ者弾正殿を上手ニ取持申仕合ニ御座候、父圖書(久通)一代ハ何そ席無之、其分ニ而罷過候得共、去年春、私家之由緒達　御耳候ニ付、去年八朔より御断申上候、然者数代為押移儀申上ニ而者無御座候事、

一日新様御牌ニ　義久様御判形被遊被下候ヲ、紹益鹿児江居住仕候節極楽寺致建立安置仕、于今宮之城曇秀寺ニ建置候、右之通ニ御判形被遊被下候も、伊作家相續之御心持ニ而御座候与存候、尚久ハ　日新様より早ク死去仕候ニ付、紹益代ニ右之通御座候事、

右之心得を以御断申上候間、三男家之内ニ而者分ケ相替候筋被仰付候様ニと願申事候条、最前口上書之通宜御取持頼存候、以上、

(延宝八年)申正月五日　　島津圖書(久竹)

喜入次兵衛殿

右口上書之通嶋津中務殿・嶋津帯刀殿・新納又左衛門殿・町田勘解由殿・肝付主殿殿江申上候処、得与可被成御相談通御返事候由、喜入次兵衛殿被申候事、

同七日

如右及披露候得共、可有御相談由ニ而于今不相濟候、依之貞享二年乙丑之秋野田勘兵衛を招候而申談候者、先年御太刀進上座配之儀ニ付願申出候得共、未埒明候、何れ急ニ者事濟間敷候、後年座配之御賦相替候節、如願出置候被仰付候様ニと度毎ニ申出候ハヽ、いつそのほとに可相達哉との段〻申候、就夫被申候者、此願儀河野六兵衛ニ得与申達、彼人ニ而新納又左衛門殿江委曲内意能申候ハヽ御相談ニ立乗可申与被申ニ付、永山休兵衛頓而可被罷下候、彼人事、未ノ年差出候口上書之趣為内談六兵衛ニ遣候時、其使を茂被致候間、下り以後六兵衛を招相談可仕候条、其節勘兵衛も可被参之

由申達置候間、其通ニ可仕と存候得共、六兵衛事、我等願ニ付只今年頭之御太刀進上致延引居候と去々年甲州江被申候筋も有之候、然者前廉申談候旨趣被致失念候哉、如斯相違ニ而候間、直談ニ而者六兵衛挨拶ニ付、此方より何角与申仕合ニ而者如何ニ候条、勘兵衛より右願之儀六兵衛ニ被致咄候而、口裏を茂被聞候様ニと兼而頼置候、依之同年霜月十七日之晩私宅江入來ニ而被申候者、六兵衛を勘兵衛所江招寄、右咄申候處、尤之儀ニ而候得共、我等當役ニ而此願如存ニ候、其様子ハ、御太刀進上座配之儀野州以來此方家より賦置候処、ケ様ニ願申出、其通被仰付候ハヽ、只今之三家繰廻シ、一家分座欠於無之者難被成候間、何れ茂家老中御あまし可被成候間、先此節ハ延引可然与存候、重而勘兵衛事御記録所江参候ハヽ系圖を為見相談可仕候、其内此方江之返事ハ延引可仕与六兵衛より被申候由、勘兵衛被申候、就夫我等より則答申候ハ、左様ニ社可有之候得共、願之通ニ被仰付候ハヽ、如先例丹波殿(久竹日置家)と隔年ニ可被仰付様ニ存候、口上書ニ茂丹波殿家と同前ニ可被仰付と存候故、彼家三男家ニ而(ママ)俣者御取持之家と段々書出申候、差付何角与申出候得者、家之争之様ニ候而、(間欠)右之通ニ書出候、彼家と隔年ニ被仰付候ハヽ、只今丹波殿座与兵庫殿向と隔年ニ被仰付候得者、座之明候事茂無之由申候間、如何ニ茂尤之由ニ而、只今社我等内存之通承候得与被申候、就夫延宝七年年頭御太刀進上座配之儀申出候覚と有之候与、酉正月廿八日長谷場伊角江遣候迄之委細之書付を一冊ニ致置候間、是ヲ勘兵衛ニ可遣候条、委敷見被申、六兵衛ニ致内談、重而様子可被申聞旨相達置候付、同十二月廿五日入來ニ而、御書付之表六兵衛ニ為見委曲申達候、因茲六兵衛より存寄候覚書并御記録所日帳之写被差上之由ニ而持参候、其正文ニ有之、右六兵衛ニ為見候一冊ハ別冊ニ仕、表紙相掛召置候也、

150の12

覚

一圖書殿御座配之儀ニ付御断申被成候御書付致拝見候、先年伊賀殿御家被相究候刻拙者申上候趣ニ付専被仰上候儀与奉存候故、其時之日帳之写為御見合致進上之候事、

150の13

一日新様相州家・伊作家両家御合被成、　貴久様御代御舎弟御両人ニ両家之家名ハつけ御申被成候得共、相州家・伊作家と究而被仰渡候とハ相見得不申候、御座配茂御二男御三男之次第ニ而御座候半与奉存候事、

一玄蕃殿御家より　友久様御一流与御申被成候得共、其御取持ニ而者無御座候儀、御存之前ニ而候事、

一只今之御座配、故圖書殿被成置候得共、如何様御賢慮之上ニ而右之通ニ御究被成候半与奉存候事、

一多年御三家ニ而輪番ニ御勉被成候儀ニ而御座候処、別座ニ御入被成候ハヽ、御両家より御断被仰上候而六ケ敷御座候半欤と奉存候事、

右之通御座候得者、圖書殿少々御不足ニ被思召候共被遊御堪忍、御断御止被成候事ニ而者有御座間敷哉与乍憚奉存候、委細ハ口達ニ申候、於御同意ハ可然様御申可被成候、以上、

（貞享二年）丑十二月廿三日　　河野六兵衛（通古）

野田勘兵衛殿

延宝七年三月朔日日帳之写

諏訪采女殿より御用之由候間罷出候、采女殿被仰上候者、主殿殿より被仰渡候、此中被聞召候伊作殿御家之儀、御相役中可被聞召之候間、罷出相待可申由ニ而、何そ書物抔入儀候ハヽ取合持参候而可奉待之由ニ候間、御系圖を一紙ニ写、平田清右衛門死去以前大田小平次江被渡置候書物壱通相添罷出奉待候処、采女殿を以御評定所江可罷出之旨承候間、則罷出候、采女殿六兵衛罷出候由被為申候、則被召出候而御座ニ罷出候、内記殿・市正殿・帯刀殿・主殿殿・蔵人殿御列座ニ而御座候、新八殿者半過申上候時分着座被成候、主殿殿内記殿江被仰候者、此中被仰出候權七殿伊作家相續之儀ニ付六兵衛存寄之趣御座候間、可被聞召之由被仰候而、委細可申上之由拙者江茂被仰聞候間、拙者申上候ハ、伊作殿御家之儀、平田清右衛門死去以前ニ遺言之様ニ書物仕候而、大田小平次ニ渡置候、小平次死後ニ親類中より御記録蔵江相納候間、私受取置申候、ケ様之儀を被遊御聞傳被仰出候哉と乍憚奉存候、清右衛門申置候と拙者了簡違申候、清右衛門功者之儀ニ候処、私見立違申候儀申上候茂如何ニ御座候得共、重キ御家之儀ニ御座候得ハ、各様御相談被遊候御考ニ茂

可罷成候間、委細可申上候、先清右衛門申置候通可被聞召候之由申候而、清右衛門書物讀申候、

清右衛門覚書之写

三ケ条目

一伊作氏ハ第四世之太守　下野守忠宗公之令弟、其上昵近ニ而、他之御一門ニ相替申候、十世之孫　日新公御幼稚之時相模守忠幸之御猶子ニ御定之後、彼御家之後嗣無之候、賢哲之御太守数世今分ニ而被召置候、定而其故可有之候、然共委曲御存知之方茂無之欤と見得申候、不審奉存候条、乍推参奉得御意候事、

右之通ニ清右衛門ハ伊作家断絶と見申候、拙者奉存候者、伊作家・相州家両家を　日新様御兼被成候而當太守様迄御相續被遊來候得者、伊作家断絶とハ難申奉存候、其子細ハ御系圖ニ引合不被聞召候而者御合点参兼候筈ニ而御座候由申、一枚御系圖之写差出候、何れ茂近く御寄被成被聞召候間、御系圖ニ引合申上候者、先伊作家之御元祖下野守久長と申者、三代之太守　久經公御二男、四代　忠宗公御舎弟ニ而御座候、　久經公御愛子ニ而御座候付、御重物を茂伊作殿江相傳被成候物多御座候、清右衛門書置ニ相見得候様ニ御代〻御昵近ニ而、鎌倉執權・京都将軍之御證文過分ニ御座候而、他之御一門ニ勝れ為申御家ニ而御座候、七代犬安丸殿早世ニ而、既ニ及断絶候処、九代之太守　忠國公御三男、十代　立久公之御差次之御舎弟河内守久逸江犬安殿御妹ニ御取合、伊作家八代御相續被成候、河内守殿御子又四郎善久と申者、則　日新様御実父ニ而御座候、　日新様御三歳之時、又四郎殿廿七歳ニ而御早世ニ而御座候、其後様子御座候而、　日新様御懐梅窓様相模入道一瓢様江御取合被成候刻、相州家を伊作家江相加、両家を一ツニ合　日新様を御養嗣ニ可被成と堅キ御約束ニ而御座候由、旧記ニ相見得候、清右衛門編集之御記録所ニ茂其旨慥ニ記置候、左候得者、伊作家別ニ御跡可被仰付儀ニ而無御座様ニ奉存候、殊ニ日新様御事一瓢様ニハ御養嗣迄ニ而被成御座候時分、相州家ハ續不申候得共、伊作家ハ血脉御續被成候、然共一瓢様御親父友久様ハ　立久様御舎兄ニ而御座候得者、御家高ク見分好御座候故、御系圖ニハ一瓢様より

日新様江つり申候、乍然一瓢様御家ハ僅二代之御家ニ而、何之御證文も無御座候、伊作家之儀ハ先ニ申上候様ニ過分之御證文御座候、　貴久様守護職ニ御居り候時、脇ニ茂無余儀御一門多御座候得共、相州家・伊作家両家を御兼帯ニ而御座候故、諸家ニすくれ御高家ニ而御座候と御一門中之御僉儀ニ而御座候由傳承候、左候而、　貴久様者守護御代ゝ之御名御付被成候、御舎弟忠将之御筋ハ相州家之御家名右馬頭・相模守抔とつけ御申被成候、御舎弟尚久之御筋ハ伊作家之御家名又五郎・下野守・河内守抔とつけ御申被成候事、御相續之上ニ而御座候半与奉存候、清右衞門書置申候ニ茂、賢哲之　御太守数世今分ニ而被召置候、定而其故可有之候与疑を立申置候、拙者ハ右申上候趣其故御座候与奉存候、　日新様ニ而御家ヲ御合被成、　貴久様御代より又三家ニ御分之儀、面白被成様ニ而御座候、深キ御賢慮之上ニ而右之通ニ御定被成候哉と乍憚奉感候、且又伊作家之御文書過分ニ御文書方ニ御座候、又綱切丸と申御腰之物茂于今御南戸ニ御座候、ケ様成物を茂伊作家御立被成候ハヽ可被進之哉、假令不被進候而茂、他之御重宝を御蔵江被召置候様ニ後代ニハ可奉存候、題目御系圖をいか様ニ御つり可被成候哉、　日新様御舎弟ニ茂御子ニ茂御つり被成候儀可難被成様ニ奉存候、殊ニ先年松平美作様其外御加儀之衆御系圖御一覽之刻も、伊作家ハ　太守様御兼帯ニ而御座候由申上候、旁以伊作家御取立之儀乍憚拙者了簡ニハ及不申候由申上候、此外御差合之儀共委細申上候、何茂被聞召、拙者了簡尤ニ被思召候、相州家・伊作家御兼帯被成候得者社御家厚ク御座候處、伊作家別ニ御取立被成候ハ御家薄ク罷成候様ニ御座候、此趣可被達　上聞候与一同ニ被仰候、其後主殿殿より被仰候者、右申上候通書付候而差上候ハヽ、其趣可被達　貴聞之由ニ而候、拙者申上候者、　御前ニ被差出候物を私書付差上可申儀遠慮多奉存候由申上候、又被仰候ハ、下書仕差出候ハヽ、御吟味之上ニ而御直シ被成可被入　御耳ニ候間、先書付可差出由ニ而、新八殿被仰候者、口上ニ而委細ハ可被仰上候間、如何ニ茂かろく頭書之様ニ書付可差上之由ニ而候、畏奉存候由申上退出仕候處ニ、喜入次兵衞殿此御取次被成被達　上聞筈御座候間、委細被為聞度

150の14

由ニ而候条、御右筆座ニ而委細咄仕候、

此間ニ前條一　日新様御三歳之時御父伊作又四郎殿早世与書出候未三月二日之六兵衛殿考書有之、略、

以手紙令啓達候、先日御太刀進上座配之儀ニ付先年申出候書付為持申候處ニ、河野六兵衛ニ被相達、御記録所日帳之写・六兵衛存寄之書付御持参、鎌田三左衛門江被達置得其意候、先以早〻被相達過分ニ存候、六兵衛存寄之書付見届候、入念委曲書付被差越忝存由、六兵衛方江一禮御申達可給候、右書付之趣我等了簡とハ筋目相替、別而難致落着候、年内無餘日候、殊病中ニ而候間、致延引重而之事ニ可致候条、其内面上ニ而可及相談候、以上、

（貞享二年）
十二月廿五日　　（島津久竹）圖書

野田勘兵衛殿

150の15

被成下御手紙謹而拜見仕候、河野六兵衛方江相談仕候儀、彼方隙無御座由ニ而御返事被申上候儀延引ニ罷成、

150の16

昨日書付渡被申候間、持参仕候、就夫思召ニ筋目相替為申之由被仰下候、左様可被思召と奉察候、思召之趣者委申達候、右之書付ハ頭書計ニ而、口達ニ存寄被申上儀共御座候、其段者何時成共御氣分次第被召寄候者伺公仕委細可申上候、六兵衛方江御一礼先申達候様ニと被仰下候、奉得其意候、此旨宜御取成候、以上、

（貞享二年）
極月廿五日　　野田勘兵衛

『本ノマヽ』
秘書様
御与力衆中

野田勘兵衛方江佐大夫を以申入候口上

昨日以手紙申入候通、御太刀進上座配之儀相談之趣河野六兵衛方江被相達、彼方より覚書之趣致披見、皆共ニ難致落着候、依之右願止申儀不罷成、尤先年右願之段ハ評定所江申遣置候得共、何故願止可申哉と存候、此節六兵衛覚書定而彼方江被記置候半、六兵衛書付見届候得共、不致落着候間、乍此上了簡之筋茂有之候条、右之趣六兵衛被承置候様ニ被相達可給候、已上、

（貞享二年）
丑十二月廿六日

覚留

御太刀進上座配之儀願出候付、　都而前条ニ有故略、

河野六兵衛存寄之条〻并此方返答書

一圖書殿御座配之儀ニ付、下略、

右返答

先年伊賀殿家被相究候節被申上候時之日帳之写被遣見届候、

一日新様相州家・伊作家両家御合被成、下略、

右返答

右之通相州家・伊作家と極而不被仰渡段如何ニ茂其心得ニ而候、尤究而被仰渡候ハヽ至只今申分無之筈ニ候、私家之由緒達　貴聞、伊作家別ニ御立不被成候得者、私家ハ品茂相替候間、其御見合ニ而年頭御太刀進上之座配被仰付度との願申候、

一玄蕃殿御家より友久御一流と御申被成候得共、下略、

右返答

右之儀者、　龍伯様御代御系圖御再撰之砌、右馬頭（以久）入道宗恕御申候者、我等家事友久御筋目より續キ系圖有之候處、此節友久を正統之筋ニ御續候時ハ、我等家之續如何様ニ可仕哉与御申候得者、忠将より御つり候而茂何れ脇之惣領者不相替之由被仰出、落着之由候、然時者系圖つり様之事ニ而、家之御取持之儀ニ而者無之候条、我等申分とハ各別ニ候、

一只今之御座配、故圖書殿被成置候得者、下略、

右返答

只今之座配亡父賦置候通を致違背ニ而ハ無之候、其故者、川上因州（久国）・平田清右衛門抔伊作家断絶之由被申、殊因州よりハ委細之書状亡父江被遣置候、古老之衆茂伊作家跡之儀ニ付而者為有吟味と見得候、然處伊賀殿家御究之節我等家之由緒達　貴聞、伊作家別ニ御立不被成候ニ付、伊作家相續之御心持之御見合を以急度御太刀進上座配被仰付度と願申候、然時ハ、亡父代ニハ伊作家之跡如只今氣之附キ申筈ニ而ハ無御座候、

一多年御三家ニ而輪番ニ御勉被成儀ニ而、下略、

右之通ニ御座候得者、下略、

（貞享二年）十二月廿三日　　河野六兵衛（通古）

野田勘兵衛殿

右返答

我等家之由緒被聞召達、相應之座江被仰付候ハヽ、両家より申分有之間敷と存候、依之重而座配御賦之時分願之通ニ被仰付候様申出置候間、此段致堪忍御断相止候事絶而不罷成候、以上、

（貞享二年）丑十二月廿七日　　（島津久竹）圖書

河野六兵衛殿

右者、御太刀進上座配之儀申出置候書付等野田勘兵衛を以河野六兵衛ニ為見候付、如此存寄之段之書記被遣候得共、皆共ニ我等了簡とハ別而相替、難致落着候、依之其節六兵衛方江返答書を以相達筈ニ而調置候得共、年内無餘日、其後何角与押移候、然処六兵衛被相果候間、不達得候、就夫右ニ調置候返答書此節差出候条、各可被見届置候、以上、

五月廿一日　　嶋津圖書（久竹）

伊地知助右衛門（重英）殿

田中五右衛門（国明）殿

150の18

御見舞申候得共、御他出之故書付置申候、

一先日之御書付早速御文書方江申達候、其時分虫干仕候由被申候、もはや相濟可申と存、御返事承ニ今日罷出候、被申候ハ、最前御出し被成候御書付書留可有御座存日帳見合候得共、無御座候、此御方江留可有御座候、御写被下度候、左候ハヽ、見合申候而可申上候由被申候、御写候而私所迄御持せ被下候ハヽ、両人江相渡可申候、

一御返答被申上候留ハ日帳ニ茂委御座候由被申候、左様御心得可被成候、以上、

六月三日　　野田勘兵衛

深水与三兵衛様

150の19

如右勘兵衛より与惣（ママ）兵衛迄以手紙被申候間、委曲書付置候壱冊写候而御記録所江差出可給由ニ而勘兵衛江遣候、其留左ニ記之、

延宝七年之冬年頭御太刀進上座配之儀御断申出候覚

一當春伊作家嶋津伊賀殿江可被仰付旨被仰出候処、家老

衆相談ニ而河野六兵衛江被仰渡考被申出候筋、我等家伊作家相續分ニ而、彼家名代〻付來候由緒共入　御耳ニ、伊作家別ニ御立不被成候得者、我等家ハ御取持茂可替様ニ被存候、依之家之儀太抵口上書相調候、左ニ記之、

私家之儀伊作家相續之御心持有之と書出候未十二月廿七日書付前ニ有、故略之、

十二月廿七日

一右口上書河野六兵衛方江永山休兵衛を以遣、口上ニ而我等家之儀ニ付申出儀共候、新納又左衛門殿來月之當番ニ而候、常〻心安候間、内意を可申与存候間、内〻可被見置候、尤御二男家之衆と何角与争申儀ニ而茂無之候、三男家ニ而者一之御取持ニと願申事ニ候、其上兵庫殿御家御取持之段〻迄申達、右御家之例同前ニと存候、乍然我か事ハ能様ニ存物ニ而候、如何可有之哉との趣委敷相達候、六兵衛為返詞、尤之儀ニ候、八朔ニ我等致申分候節旨趣然与不承達、楚忽之存寄共申候き、末略、

此末返詞之趣、前之延宝七年十一月廿二日川上拾郎左衛門を招候と書出候書付之内、同年十二月廿七日口上書相調河野六兵衛方江永山休兵衛を以為致内見候処と有ニ相違なし、故略之、

十二月廿八日

一右口上書、川上十郎左衛門を以新納又左衛門殿江為内意遣候、末略、

右同書付之内、同廿八日川上十郎左衛門ニ而新納又左衛門殿江今度私家之儀ニ付口上書相調差出筈ニ候と有返答之趣ニ相違なし、故略之、

一申正月五日喜入次兵衛殿宛書之御内見覚書略之、前ニ有、

申十二月六日

一去年十二月・當正月、家之儀ニ付喜入次兵衛殿を頼申出候、依之此節我等了簡之筋又者申傳候事共書付候、新納又左衛門殿江御申可給旨次兵衛殿江可被相達由、川上十郎左衛門江手紙相添遣候、右書付者脇之差合ニ成儀茂候半間、次兵衛殿被為見候儀ハ御無用ニ候、内〻御方江我等より致咄候儀共ハ此通ニ候なとゝ宜儀者咄置可給由ニ而遣候、覚書左ニ記之、

覚

一貴久様御子様　太守龍伯様、御次　惟新様、三男左衛

門尉歳久、四男中務太輔家久ニ而候、　竜伯様御男子無御座候故、　惟新様被遊守護代、　又市様を　龍伯様御息女國分様ニ御取合、　龍伯様御聟養子ニ被成、御世續之筈ニ候処、　又市様被遊御逝去、御子無御座、其後　中納言様を　國分様ニ又御聟養子被遊、　龍伯様御跡御譲被成候、其段　家康公慶長七年御書物之表ニ相見得、無別儀候、雖然御離別ニ而、尤御子無御座、左候而、　中将様を國分様御養子被遊、　龍伯様御一筋を御相續候、此段元和八年従　中納言様下野（久元）江被下候御書ニ茂相見得候、右之通ニ候得者、　竜伯様より中将様江御系圖御つり候得者、　國分様世ニ御入被成候、左候得者、御女性世ニ御入被成候例無之ニ付、御系圖之世ハ如御筋目　龍伯様　惟新様　又市様　中納言様　中将様与御つり為被成由候、　惟新様御事御思慮深ク御律儀ニ而御跡急度御立不被成、　中将様御差次之御舎弟古兵庫殿忠朗御幼少之刻　惟新様より又八郎殿と御假名御給候、其後　惟新様御隠居之跡加治木一所を被進、兵庫殿と御改名候、右之御名何れ茂　惟新様御假名御給候、就夫御次男家ニ而ハ第一ニ御取持、當兵庫殿茂其由緒ニ而御前ニ而茂殿之字を付、餘之御次男家ニハ為替御取持ニ而候、右例茂御座候間、此方家伊作家相續之御心持之御見合を以、三男家ニ而者第一之御取持之御心得ニ而御太刀進上之座配急度被仰付被下度と願申候、

一下野代ニハ最前ハ嶋津弾正殿と八朔之御太刀進上隔年ニ上手仕候得共、下野致謙退、後ニ弾正殿を上手ニ取持申候儀、段〻當春之口上書之通ニ候、此儀致了簡候得者、嶋津弾正久慶・嶋津豊前久嘉儀御身近く候間、川上家より上手被仰付候旨上野久貞江従　中納言様仁礼蔵人を以被仰渡、被應其意之由、上野久運御太刀進上次第之儀ニ付申分口上、評定所江有之御太刀進上之賦帳ニ相見得候、ケ様ニ弾正殿儀ハ上より茂御取持被成候得者、其時節下野致謙退、弾正殿を取持不申候而不叶仕合ニ御座候半、弾正殿儀親父下総殿ニ相替御取持候儀　中将様御姉聟ニ被仰付候故かと存候、其様子者、弾正殿祖父三郎次郎殿忠隣者薩州義虎二男ニ而、御懐ハ　龍伯様御姫様ニ而候処ニ、歳久聟養子ニ被為成候、御懐方ニ付御取持候ハヽ三郎次郎殿下総殿ニ相

替儀ハ有之間敷を、却而遠く罷成候、弾正殿を右筋ニ御取持候筈ニ而茂無之候、左候得ハ、下総殿代迄ハ川上家ニ双候欤、下ニ而茂可有之欤と両様ニ被存候、然ハ弾正殿一世之儀者様子有之系圖ヲ被削、歳久一流ハ無別儀候、弾正殿親父下総殿為跡三郎(忠朝)右衛門殿被仰付候得者、弾正殿代之御取持ハ消、下総殿時之御取持之筈ニ候、

一御家御相續之通、　竜伯様より　中将様江御系圖御つり被成、　惟新様御跡急度御立被成候ハヽ、歳久一流ハ無紛御三男家ニ而候得共、御系圖如御筋目御つり、且又　惟新様御事被遊守護代候故守護之朱星有之候間、歳久ハ御二男ニ相見得候、雖然　中将様者　龍伯様御一筋を御相談(続カ)被成、古兵庫殿ハ　惟新様御隠居跡被進、御二男家ニ而者別而御取持ニ而候、然者歳久一流茂御三男家ニ而者御取持之家ニ而候、

一私家代〻童名ニ菊之字を付來候茂、　日新様御童名菊三郎様と申上候右菊之字ニ而候通申傳候、

一紹益(忠長)儀、家老役不被仰付内在所ニ而致越年、年頭之御祝儀先使を以申上、日限不定致参上御祝儀申上候、其刻者使之者　御目見被仰付候、阿多孫兵衛と申者使ニ差上候節、右孫兵衛ハ前ニ桑波田名字ニ而候処、就軍名母方之名字阿多ニ召成置候、就夫此方家ニ従　公義御付被成候者之内阿多名字之者無御座由　御意ニ而、右之者其節者　御目見不被仰付由申傳候、家老役被仰付候而茂同役中并之家無御座、御太刀進上次第之儀ニ付御断申上筈ニ而無御座候、已上、

(延宝八年)申十二月六日

川上十郎左衛門殿

十二月廿五日

一右之通書付川上拾郎左衛門殿江遣候得共、病氣差發次『ヘ』兵衛殿江相達儀難成由ニ付、取返之、永山休兵衛を以次兵衛殿江相達候、右書付ハ差合ニ成儀茂有之候半間、彼方江遣儀ニ而者無之候、一見候而書物ハ可被取返旨、休兵衛ニ相達候、

一喜入次兵衛殿より直ニ承候ハ、我等太刀進上座配之儀、新納又左衛門殿江申達候処、此節ハ最早間茂無之候、其上重キ儀ニ候条、重而得与御相談可被成候、此方より茂致思慮可申出由候得共、此上何そ相替儀無之候、

來年正月、又五郎家之太刀五番座之御向ニ致進上儀ニ候、殊年首之事ニ候間、御太刀進上為仕可申候間、太守様御在國中ニ御究可被下候、於入　御耳事者宜様ニ御取持頼存候、來年江戸御供仕候条、急ニ申入事ニ候、尤右之申分御帳ニ茂留置可給由申候得者、心得申之由候事、

西二月朔日

一永山休兵衛を以長谷場伊角江遣候覚書左ニ記之、

覚

我等家之儀伊作家相續之御心持ニ被仰付候由緒先年被入　御耳置候、依之、御太刀進上座配之儀ニ付願申趣、去年正月新納又左衛門殿當番之刻、喜入次兵衛殿を頼口上書を以委細申出候処、可有御相談由ニ而御返事無之ニ付、旧冬茂右願之筋御相談候而御究可給旨又左衛門殿江次兵衛殿を頼申入候得者、重キ儀候間、重而御相談可被成候、其内私よりも致思慮可申出由承候得共、最前より申出筋ニ相替儀無御座候間、　太守様御在國中ニ何卒御究被入　御耳儀ニ候ハヽ宜御取持被下候様ニと申入置候、此節之御参勤急ニ被仰出、御取込之砌ケ様成儀を被入　御耳儀茂遠慮ニ候間、先被聞召置、來年御帰國之刻御取持被入　御耳被下候様ニ又左衛門殿江御申頼存候由、喜入次兵衛殿江被相達可給候、已上、

（延宝九年）
酉正月廿八日

長谷場伊角殿

一貞享二年乙丑七月廿六日、野田勘兵衛を招申談候者、先年御太刀進上座配之儀ニ付願申出候得共、可有御相談由ニ而未相濟候、何れ急ニ埒明事ニ而も有之間敷候、後年座配之御賦相替候節、先年如願出置候被仰付候様ニと度毎ニ申出候ハヽ、いつその程ニ可相達候、其通ニ可仕哉と申、右之延宝七之冬年頭御太刀進上座配之儀御断申出候時より酉正月廿八日長谷場伊角江遣候覚書迄之一筋委細留置候帳壱冊為見申候、依之被申候ハ、此願之儀河野六兵衛ニ得与申達、彼人ニ而新納又左衛門殿江委細内意能申候ハヽ御相談ニ立乗可申と被申候付、永山休兵衛頓而可被罷下候、彼人事前〻六兵衛と間〻使を茂被致候間、彼人下り已後六兵衛を招相談可

仕候条、其節勘兵衛茂可被参候由申達置候間、其通ニ可仕と存候得共、六兵衛事、我等願ニ付只今年頭之御太刀進上致延引居候と去々年甲州江被申候筋も有之候、然者前廉申談候旨趣被致失念候哉、相違ニ而候間、直談ニ而者六兵衛挨拶ニ付、此方より何角と申仕合ニ而者如何ニ候条、勘兵衛より右願之儀咄被致、六兵衛口裏を茂被聞候様ニと兼而頼置候、依之丑霜月十七日之晩私宅江入来ニ而被申候ハ、六兵衛を勘兵衛所江招寄、右咄申候処、六兵衛より、尤之儀ニ而候得共、我等當役ニ而此願如何ニ候、其様子ハ、御太刀進上座配之儀野州以來此方家より賦置候処、願申出、其通ニ被仰付候ハヽ、只今之三家繰廻シ、一家分之座欠於無之者難被成候而、何れ茂家老中御あまし可被成候間、先此節ハ延引可然与存候、重而勘兵衛事御記録所江被参候ハヽ系圖を見せ直談ニ可仕候、其内此方江之返事ハ延引可然与被申上候由、勘兵衛被申候、就夫我等申候ハ、六兵衛了簡之筋別而難致落着候、六兵衛如被申一家座欠筈ニ而無之分ケ内存之通勘兵衛ニ致咄候處、尤之由被申候付、當秋被見候延宝七年之冬より酉正月廿八日迄之委細書付之留帳壱冊得与見候而六兵衛ニ被致内談、重而様子可被申上由ニ而勘兵衛方江為持遣候事、

丑十二月廿五日

一野田勘兵衛入來候而、此中遣候壱冊河野六兵衛ニ為見委細申達候、依之六兵衛より御記録所日帳之写壱冊并存寄之覚書壱通昨日被相渡候付、持参之由候事、

右之通、河野六兵衛存寄之條々別而難致落着ニ付、返答書相認置候得共、何角与押移候、然処六兵衛被相果候、依之、調置候返答書各可被見届置由ニ而、先日野田勘兵衛を以遣候得者、我等より六兵衛方江遣為見候書付御記録所日帳ニ書留無之候間、此方之留書写遣候ハヽ、見合之上各可有返詞由令承達、帳末ニ勘兵衛ニ而六兵衛ニ相達候始終之儀迄書加、此節差出申候、已上、

（島津久竹）
圖書

（貞享五年）
辰七月五日

（重英）
伊地知助右衛門殿

（国明）
田中五右衛門殿

（貞享カ）
延宝五年辰七月五日、於　御城伊地知助右衛門江先年六

兵衛被見候右之書付各見度との旨承候間、書調、今日勘兵衛を以差出候由、其外色〻致直談、翌日田中五右衛門江茂我等内存之筋委細申達候、其段〻別冊ニ載置候、左候而、彼衆より同年九月四日之日付ニ而返答書勘兵衛充書ニ而遣被申候由ニ而、同月五日ニ勘兵衛持参候、其正文左ニ有之、

150の20

口上之覚

圖書殿御家之儀ニ付御書付壱冊御頼之由ニ而御持参、披見仕委曲承置候、被仰上候而拙者共江御尋之儀御座候ハヽ、相當ニ御挨拶可申上候、只今如何様と究而御返答申上候儀難仕候、被遣候御書付共慥ニ受取置候、此旨宜様可被仰上候、以上、

（貞享五年）辰九月四日　　伊地知助右衛門（重英）

野田勘兵衛殿　　田中五右衛門（国明）

国老并用人記

（表紙）

（番箱）
（削削サル）

（伊進上）
（削削サル）

國老
用人　記　全
『秘書』

（中表紙）

「
島津家國老竝御用人記
」

○旅御家老・御談合役・御詰役・若御年寄
○横目頭・大御目附
○申口役・御使役・御用人

一御城代之儀、前々被仰付置候儀不分明候、　家久公御代俄ニ被遊御出陣事茂候者、島津豊後守久賀ニ　御留守居可被仰付旨為被仰付置由候、其後寛文六年　光久公御代數年右御役明候而、御念遣ニ被思召候由ニ而、北郷佐渡守久加　御留守居役被仰付候、御留守居役者今之御城代之由候事、

一家久公御留守居
豊州家五代豊後守朝久之嫡男
島津豊後守久賀（花押）
初藤次郎　後豊後守

一光久公御留守居寛文六年ヨリ
加賀守三久嫡子
北郷佐渡守久加（花押）

異本ニ
○延宝四年御城代被仰付候、同八年三月三日御家老職、御城代如元、無加判、元禄十年丑二月迄御家老職、御城代如元、享保三年戌七月五日依願隠居、御城代御免、御養料五百石被下候、

佐多内記久達
後備後　豊前　島津備前

太守光久公之五男也、佐多丹波久利後嗣、延宝四ヨリ同八迄御家老職兼役、但御家老職之所ニモ名記之、元禄十年御家老職御免、自　光久公至　吉貴公、『正徳元年九月十五日改島津』

異本ニ
○光久公御代ヨリ首尾能被相勤候ニ付御城代被仰付、御家老勉モ此内之通被仰付候、加判被成候、座席ハ御家老上席ニ被仰付候旨、享保四年十一月九日被仰出候、同十四年八月十七日御役内病死、

島津将監久當
初久寛　伊賀　縫殿　勘解由

○太守光久公十一男、島津又六久岑之後嗣、二十五歳也、自貞享二同三迄御家老職二年、享保四亥五月五日御城代ト成ル、自　光久公御代至　継豊公御代ニ相勉、

島津玄蕃貴儔（花押）
初久典　備中　備前　剃髪静山

○太守吉貴公三男、享保廿一年正月廿二日於磯御家老座勤被仰出候、延享五年辰正月十三日依願御免、宝暦十一巳二月朔日ヨリ又〻出席、同十二七月十九日迄被相勉御免被仰付、御腰物拝領、

○五代勝左衛門家筑前守助友嫡子、諸家大概ニ、

五代右京亮友慶入道
初勝左衛門　友慶

右　義弘公飯野御在城之時御家老役ニ而地頭職被仰付候与相見得申候、友慶於木崎原伊東加賀守ヲ討取ト有、子孫五代少左衛門、

○右同記ニ、

大寺治部少輔安勝入道
宮音

右自　立久公　勝久公迄御家老職ト有之候得共、此記ニ不相見得候ニ付、爰ニ記置候、

○

高崎播磨守能宗入道
初惣右衛門　有閑

右　勝久公御家老ニ而、其後奉仕　貴久公、賜伊作地頭職、高崎家之系譜ニ有之、此記ニ不相知候ニ付、為見合記置候事、

○伊勢六郎左衛門家之祖、

有川治部貞則

右奉仕　忠良公　貴久公、御家老、后奉仕　義弘公、

住居飯野、

○右之治部貞則嫡子ニ而二代、

有川長門守貞清入道如閑

右奉仕　義久公、御家老、谷山地頭ト伊勢家之系譜ニ

有之、

伊地知周防守重武初又九郎

右伊地知縫殿介重周子ニ而、秩父氏十四代之祖、　勝

久公御家老、天文十四年下大隅垂水ヲ賜ト彼家系譜ニ

為見得、同代ニ伊地知周防守重貞御家老ト本文ニ有リ、

不審成トモ記之、

義弘公

一永禄六年自鹿児島飯野江御移、御在城廿八年、御家老

有川雅樂入道任世　上井次郎左衛門

川上参河入道肱枕

右同御使衆　宮原伊賀入道　五代右京

一天正十八年自飯野栗野江御移、五年御在城、御家老

川上四郎兵衛　有川雅樂入道　上井次郎左衛門

新納旅庵入道

御使衆　宮原伊賀　五代右京

一文禄四年自栗野帖佐江御移、御在城十一年、御家老

鹿児島御家老ニテ、帖佐江被召移候、

阿多長壽院　上井次郎左衛門　伊集院肥前入道一雄

新納旅庵

御使衆　新納木工右衛門　五代右京

一慶長十一年自帖佐平松江御移、二年御在城、御家老

新納旅庵　伊勢平左衛門　上井次郎左衛門

御使衆　新納木工右衛門入道一甫

一慶長十三年十一月十三日自平松加治木江御移、十二年

御在城、御家老

伊勢平左衛門　本田源右衛門

御使衆　新納木工右衛門入道一甫

右源右衛門儀、平左衛門死去ニ付御家老職被仰付、中

一ヶ年相勉死去、従夫種子島左近大夫鹿児島ヨリ差引

被相勉、御家老無之、御使衆ニテ被為済候ト云傳候事、

御代〻御家老記

○元祖忠久公

文治二年丙午春被補三州守護職、一説ニ建久七年八月一日同年八月二日下着薩州山門院、

本田氏

酒匂氏

○右之両氏為相勤ト見得候得トモ、假名實名等不詳、追而可考、

諸家大概ニ曰、平姓酒匂氏元祖ハ梶原氏之二男刑部丞朝景、相州酒匂ヲ領シ為家号、朝景事奉仕　頼朝公ニ、東鑑ニ暦然ニ候、朝景子之左衛門景貞ニテ候哉、　忠久公御誕生之時ヨリ為御守役、其後御入國之致供奉、被補御家老候、

長澤左衛門尉

○建仁三年十二月九日守護所ト有リ、執印久馬文書ニ有リ、

○二代忠時公

自嘉禄三年至文永九年守護職四十六年、

左衛門尉藤原重頼（花押）

○守護代、正嘉二年二月朔日臺明寺鐘銘ニ有リ、栗野士調所勘左衛門文書、外ニ文永八年・同九年之文書有リ、

○同鐘銘ニ、正嘉元年十一月十九日大檀那當國守護代左衛門尉藤原重頼、

小松家蔵　寛喜元年十一月十一日守護所中務丞藤原

同家蔵　仁治二年十一月十二日守護所沙弥同判也

嘉禄元年八月廿五日守護所御代官右馬允藤原

文永九年二月十三日守護代左衛門尉（花押）

○正嘉元年十一月十九日鐘銘ニ曰、

隅州臺明寺、是青葉鳳笛之貢御所、白馬龍蹄之清躅也、巖石廻外、澗川横中、遠近仰於霊験、緇素致於帰依、爰古鐘銘云、天慶九年之比、鑄改昔日之小鐘云、此鐘在寺、具如本銘、然今其勢卑少、其音不遍、適送歳霜、拙及穿闕、仍衆徒合力、万人在勸、改彼古鐘、遂此大望、上通有頂、下度无間、于時正嘉元年丁巳冬十一月十九日庚午

作銘曰

梵鐘高掛　韻氣无疆　夕聲傳風　曉響發霜
心池澄水　覺花飛香　邪乖收髻　法鳥刷翔
聞堆尖峯　眠醒家鄉　感佛因緣　勸僧苦行
逸音遠至　諸天降望　三明開悟　六道閉傷

大壇那當国守護代左衛門尉藤原朝臣重頼
勸進者當山住僧阿闍梨亮弁
銘雕者藤原重房
大工高麗行則
同助行
沙彌善心

○惣地頭代、俗名不詳、栗野士調所勘左衛門文書ニ弘長三年十一月十二日惣地頭代ト有リ、

小松家蔵
寛元元年九月二日守護所右衛門尉藤原
臺明寺文書
文永元年十二月廿四日之文書目録ニ前守護代右近丞
刑部左衛門尉

○守護代、垂水伊集院吉左衛門文書ニ建長三年八月十三日守護代刑部左衛門殿散位在判トアリ、
式部三郎忠光

○守護代、水引執印久馬文書ニ年号不知、○隈之城士有馬林右衛門文書ニ正應二年八月二日薩摩国宮里郷地頭大隅式部三郎忠充ト有リ、
左衛門尉清秀

○上町鮫島民部左衛門家蔵ニ宝治元年十月廿五日薩广國守護代左衛門尉清秀ト有リ、又水引権執印家蔵ニモ有リ、
左衛門太夫定重

○家号不詳、臺明寺文書ニ仁治元年(二)九月十一日守護代ト有リ、

三代
○久經公
自文永九年至弘安七年守護職十三年、
左兵衛尉藤原

○守護代ト有リ、垂水調所氏文書ニ建治二年八月日守護代左兵衛尉藤原ト有リ、

酒匂兵衛入道称阿

諸家大概ニ曰、酒匂左衛門四郎忠胤・同次郎左衛門貞資入道貞阿、

五郎兵衛尉經親

○家號不詳、守護代ト有リ、臺明寺文書ニ建治三五月九日之文書有リ、

沙彌淨念

○臺明寺文書ニ文永十年四月十日守護代ト有リ、家號不詳、

僧唯道

○守護代、家號不詳、臺明寺文書ニ弘安十年七月廿五日守護代ト有リ、

臺明寺文書ニ貞永二年二月之文書ノ内、前守護所代中務丞書札云々ト有、

○久經公五弟阿蘇谷大炊介久時　久經公御上洛之御留守中、以久時為三州之守護代之處、久時誇権威、對地頭・御家人依縱我意、被改易守護代、

○四代忠宗公

自弘安七年至正中二年守護職四十二年、

景廣

○家號不詳、時代年號不知、権執印文書ニ守護代ト有、酒匂家欤、

本田左衛門次郎親兼入道道意

○觀應二年九月廿八日筑前國金隈合戦之時戦死、

入道慈願

○家号及假名不詳、

左衛門尉實光

○肝付典膳文書ニ永仁三年二月廿八日守護代左衛門尉實光ト有、

安藤四郎左衛門尉景綱

○旧記ニ守護代ト有、臺明寺文書ニモ有、文保元年八月九日過去帳ニ有、

本性

○家號假名不詳、　道鑑公御代迄、正安四年八月廿六日財部士延時九郎兵衛文書、水引権執印文書之内文保二年守護代本性ト有、

景光

○酒匂氏欤、

酒匂兵衛入道阿忍

○水引権執印氏文書ニ正和四年七月廿四日守護代ト有、財部士延時九郎左衛門文書ニ文保二年卯月十一日之文書有、

『阿忍同人欤』
同平内兵衛入道

○應長元年閏六月廿四日薩州守護代ト有、嘉暦三年右同文書、

沙彌西念

○文應元年十月五日守護代ト有、

藤原範政

○家号假名不詳、垂水遠矢十兵衛文書ニ正安二年六月廿一日守護代藤原範政ト有、

○五代
貞久公

自正中二年至貞治二年守護職三十九年、

○本田靜觀嘉暦四年之文書有、然者　貞久公御代之人欤、正中三年ニ嘉暦ト改元也、

酒匂左衛門久景入道
或ハ次郎左衛門トモ　得貴

○執印氏文書ニ守護代ト有之、

森三郎二郎平行重

○旧記ニ守護代ト有、宮之城柿木原氏文書ニモ有、建武之比大隅國守護代森三郎二郎平行重ト有之、子孫不相知候、建武四年四月十九日也、

重賢

○建武三年二月十三日柿木原氏文書ニ守護代ト有之、

沙彌榮之

○家號不詳、建武四年二月廿二日柿木原氏文書ニ守護代ト有之、

宗頼

○家号不詳、暦應五年二月六日椛山氏文書ニ有之、

資光

○家號不詳、酒匂氏欠、

盛光

○家號不詳、垂水調所氏文書ニ元徳三年八月卅日守護代ト有之、

頼兼

○家號不詳、右同、　氏久公御代迄、

酒匂次郎左衛門貞資入道
貞阿

○氏久公御代迄、

△貞久公以酒匂氏被附進于　師久公、以本田氏被附進氏久公、　師久公之御子孫衰微故酒匂氏モ衰微、元久公御代迄酒匂氏守護代相勤候、然者　總州家ニ被附進ト申ニテモ無之筈候、

○桓武天皇―葛原親王―高見王―高望―忠道（舎兄四人　二男　号鎌倉、）―景名―景道（号梶原権太夫、二男）―景久（号梶原太郎、）―景長

○朝景（号酒匂刑部丞、）―景貞（酒匂左衛門尉　二郎）―資長

忠景（太郎左衛門尉）―盛景（太郎左衛門尉）―宗景（平左衛門尉　右京亮）

資房（次郎左衛門）

寮景

貞景（次郎左衛門尉　式部少輔　貞久公・氏久公御家老、貞資トモ、法名貞阿）

資盛（四郎）

資泰（孫六左衛門）

資行（新九郎　木工助）

資景（左近将監）

景秀（蔵人）

氏景

酒匂安國寺申状ニ云、我等未若輩ニ候しかとも上意ニ而候間、老名ニ一分ニ参り候て判を仕候、本田・伊地知・阿多・平田・肥後・石井・某七人ト有り、

○六代
氏久公

自貞治二年至嘉慶元年守護職二十五年、

平田新左衛門親宗入道
玄親

○平田家者　桓武天皇十三世平宗盛三男宗正之男大炊介信宗之後也、自信宗至親宗数代闕之卜有之、然トモ非此家、實帖佐之郷地頭肥後房良西ノ後、無疑、

○親宗　新左衛門尉　入道玄親　氏久公御家老
- 重宗　元久公御家老　又九郎　右馬助　美濃守　入道三省
  - 氏宗　忠國公御家老　又七郎　右馬介　美濃守
    - 兼宗　立久公御家老　又七郎　右馬介　美濃守　入道洞印
      - 貞宗　右馬介　美濃守
  - 昌宗　義久公御家老　初威宗　右馬助　美濃守　法名乗月
    - 光宗　同上　新七　左馬介　美濃守　入道舜蘆
    - 歳宗　同上　初房宗　新三郎　左近将監　美濃守
      - 増宗　同上　新三郎　太郎左衛門尉
  - 宗次　新四郎　慶長七年八月十七日横死、
  - 行宗　新三郎　慶長十五年十一月十九日死于筑前國海上、
  - 出家　依父罪配琉球國、

治部卿　配流硫黄島、

○永徳二年六月七日　慶安

○右同　幸阿

本田信濃守重親

本田家ハ桓武天皇七代上總介忠恒之二男安房押領使恒親之孫信濃守恒文之男、

○元祖
親幹　号本田、左衛門尉　信濃守
- 親正　太郎
  - 恒親　二郎　左近将監
    - 親恒　元久二年於武州二俣川戦死、鬼石丸　左近将監　二郎　左衛門尉　信濃守
  - 貞親　二郎　左衛門尉　法名静観○水引執印氏文書ニ正和四年七月廿四日本田新左衛門入道浄観ト有、
  - 女子　嫁畠山重忠、
  - 久兼　弥太郎　左近将監　法名兼阿　他腹、不為家督、
    - 忠恒
      - 道親
        - 親宗
          - 宗親　惣譜ニ三郎ト有リ、
  - 親保　二郎　左衛門尉　信濃守

△イニ貞親譜ニ曰、文治二年八月忠久公遂供奉下着薩州山門院、先住山北、於野田草創感應寺、其後為隅州守護代、居住清水城、當代故有テ為藤原姓、

氏久公御家老　イニ除重親、親保、氏親ト系ル、

重親　信濃守　不為家督、○應安六年戦死于庄内、所不知、

氏親　文和四年霜月十一日自　氏久公氏親ェ給請文、　二郎　信濃守

親治　二郎　因幡守

元久公国老

元親　後忠親　二郎五郎　左衛門尉　信濃守　法名安了

久豊公国老　又二郎　信濃守

重恒　賜家督于國親、其後為国親被殺、

親光　号小城、二郎五郎

親家　三郎　早世、

親成　号花棚、与五郎

重恒　又二郎　信濃守　兄元親之養子、

忠國公國老

國親　又二郎　信濃守　太守忠国公悪重恒之不義、賜家督国親、献清水奉仕麗府、又後賜清水云々、臺明寺文書ニ享徳四年癸卯歳三月六日當守護代本田國親ト有、

忠國公国老

兼親　又二郎　因幡守　法名了観

親安　又三郎　四郎左衛門　三河守

又二郎　紀伊守

董親　賜日當山・牛根、天文十七年没落清水城、退去庄内、

初重親　又三郎　左京太夫　従四位下

親兼　大炊太夫　法名玄齋従久　没落清水城、後改先非奉仕　義久公、

義久公御隠居家老　曽於郡地頭

公親　大炊太夫　与左衛門　法名玄叱

初清親　又二郎　大炊太夫　美作守

元親　作左衛門　曽於郡・敷根地頭職

初昌親　鬼太郎　又二郎

宣親　作左衛門　敷根地頭

郷右衛門　太炊太夫

親道　市右衛門　四郎右衛門

長千代　又二郎

度親

○貞資入道貞阿譜前ニ有之、

酒匂貞資入道貞阿

七代

○元久公

自嘉慶元年至應永十八年守護職二十五年、

大寺美作守惟宗元幸

○元幸ハ　久豊公御代迄、永享十年福昌寺奉加帳ニ有之、

上世難信、

○保音　弾正忠　入道幸阿　宝眞庵院殿

武幸　彦二郎　彦左衛門尉

元久公御家老

元幸　房太郎　美作守　法名幸善

義幸　房太郎　彦二郎　法名幸栄

清幸　紀伊守　法名應正

高幸　美作守

資保　紀伊守

兵部少輔

衡幸（彦左衛門　法名幸朝　久豊公国老）—七郎（兵部少輔）—宗次郎（養子　梶原名字）—宗二郎

兼幸（若房丸　彦二郎　法名幸祐）—保親（房太郎丸　彦二郎　美作守）—公幸（彦二郎　弾正左衛門）—千代若丸

房太郎丸

蒲生美濃守藤原清寛　飛弾守

○久豊公御代迄、

○教清（関白通長之二男教通之孫、成僧号教清、住横川、）—舜清（上總介　眞光坊　蒲生正八幡宮勧請来蒲生、）

種清—清直—清成—清續—清茂—宗清—直清—清種

清冬（彦太郎）—清寛（飛弾守　美濃守　元久公国老）—忠清（美濃守　久豊公国老）—久清—宣清（刑部少輔）—充清（越前守）

村田右衛門尉藤原重武

○（ママ）

伊地知縫殿介平季重入道　初又太郎　久阿イニ久安　イニ季豊トモ

至　久豊公、年号不傳、正月十九日ニ八十八才ニテ死、

○秩父十郎右衛門元祖自重光八代民部少輔季弘子、重光ハ二郎重忠之兄也、

柏原豊前守橘好資

○永享十年秋福昌寺奉加帳ニ有リ、然者　忠國公之可為御代、　忠國公應永三十二年ヨリ御治世、

橘姓柏原氏略譜

○時家（右近大夫）—資家（左衛門尉　兵衛尉）—行資（勘解由左衛門　中務丞）—公資

久資（大蔵少輔）—良虎（僧）

好資（元久公国老　豊前守）—知資（六郎）—公資—公喜（豊前守　法名光阿）—公孝（六郎左衛門）—公昌（九郎）

鹿屋周防介伴兼忠入道（忠兼カ）　イニ因幡守トモ　玄兼

肝付兼石之三子

○宗兼（号鹿屋、得父兼石之譲領鹿屋院、為弁濟使、以鹿屋為家號、）

兼永（周防介）―兼雄（周防守）―忠兼（至久豊公、諸家大概ニ曰、嫡孫志布志士鹿屋権左衛門也、庶流之者加治木ニモ有之、）

平田右馬介平重宗入道
玄親

○平田新左衛門親宗子也、永享十年秋福昌寺奉加帳ニ有之、

本田信濃守藤原元親入道
初二郎五郎　左衛門　安了
後忠親

○本田次郎左衛門家四代本田信濃守氏親嫡子因幡守親治之嫡子也、但六代目、惣譜ニ、氏久公執事本田信濃守重親ヨリ四代之家督、自　元久公至　久豊公任執事、

樺山美濃守藤原教宗
又安藝守

四代之太守忠宗公五男
○資久（安藝守）―音久（美濃守）―教宗（安藝守）―孝久（美濃守）―満久（治部少輔）―長久（安藝守）

信久（美濃守）―善久（安藝守）―忠副（治部）―忠助（兵部）―規久（兵部）―忠征

久高―久守―久辰―久尚―久廣―久清

村田肥前守藤原經房

○初而薩摩國下向之人村田恕嚴師阿闍梨四代之孫也、村田五郎左衛門家十四代之祖、父ハ道善ト云、經房ハ宝徳三年正月廿六日卒ス、

阿多加賀守平時成（イニナシ）

○阿多嘉（イニ喜）左衛門家之祖也、時成ハ　元久公御家老、指宿ヲ領候、　元久公應永十七年在御上洛、　義持将軍御成之時、平田右馬介重宗ト両人御内方ニテ致　御目見候、此子孫欤、　日新公之御内ニ阿多加賀守ト云者有リ、　貴久公ヲ　勝久公御養子ニ有御契約御對面之時御太刀ヲ持候ト有之候、天正之比阿多掃部御使役并方々地頭職被仰付候、其子孫阿多掃部・阿多四郎左衛門ニテ候、掃部嫡家ニテ候、阿多嘉左衛門先祖天正之比阿多藤十郎以来於所々戦死候、阿多内蔵之丞先祖モ近年町田氏之庶流為成阿多由候、此他家之阿多氏系圖不分明候、

上井入道善了
肥後　石井　酒匂

八代
○久豊公
自應永十八年至同三十二年守護職十五年、

蒲生美濃守忠清
初三郎太郎

○蒲生家十一代美濃守清寛之子也、

吉田若狭守清正（イニ兼清トモ）

○大隅國正八幡之神官権政所助清之子、

○清道（長太夫）―吉清（吉田御供所検校 長太夫）―守清（太郎）―清弘（太郎）―清高（又二郎）
清秋（彦次郎）―清持（次郎大夫）―氏清（伊豆守）―清元（伊豆守）―清正（若狭守）―兼清
泰清―孝清―惟清―宗清

又元祖行忠―行賢―為重（鎮西八郎為朝之二子）―清道―吉道トモ有リ、

系圖ニ曰、
兼清ハ清正之子ニ系レリ、御家老ハ清正欤、

本田信濃守重恒（イニ經トモ　又二郎）

○本田次郎右衛門家之祖本田元祖信濃守親鞍九代之家督、次郎右衛門家ノ祖本田家六代信濃守元親嫡子、實元親第五之弟也、為家督、此代ニ甥自国親被奪家督并所領、国親ハ則本田新次郎家也、

大寺彦左衛門貴幸入道幸朝又衡幸（或忠幸トモ）

○大寺氏二代彦左衛門武幸三男イニ元幸（美作守）―忠幸（彦左衛門入道幸朝 自忠国公 至立久公）、

諸家大概ニ曰、
自　立久公至　勝久公大寺治部少輔安勝入道宮音ト云者御家老ト有リ、彦左衛門ハ誤欤、

九代
○忠國公
自應永卅二年至文明二年守護職四十七年、

平田美濃守氏宗
初又七郎　右馬介

○増宗家三代也、右馬介重宗子、至　立久公、

町田周防助胤久
五郎左衛門　或周防守

○立久公御代迄、町田監物久張家八代五郎忠良三男也、
十四代之孫串良士町田新八鹿屋ニ住ス、

本田因幡守國親
又二郎　二郎太郎　信濃守

○本田次郎五郎親光子也、貞親入道靜観ヨリ七代之後胤、
清水ニ居城、本田新次郎家七代之祖、此代ニ家嫡次郎
右衛門家之賜宗領職、而代々為宗家督、至　立久公、

村田肥前守經定

村田五郎左衛門系圖ニ
○經安
　└ 經堯
　　└ 三河守 經孝
　　└ 藤右衛門 運經
　　└ 經威
　　└ 經宣　雅楽介　入道壽仙　末吉地頭　養子、實田代備後守清宣之長子、至　忠昌公、

平田美濃守兼宗入道
初又七郎　右馬介　洞印

○美濃守氏宗子也、平田氏系圖ニ曰、兼宗八　立久公　忠昌公両公ノ家老ト有、

石井丹波守義忠
初平次郎

○或記ニ曰、石井中務少輔義忠入道旅世ト有、至　立久
公、

村田經房

○文安五年谷山伊佐知佐権現之目録ニ村田經房・柏原永
好・伊地知久安三人連名有之、

○右同　柏原永好
○右同　伊地知久安

十代
○立久公
自文明二年至同六年守護職五年、

○イニ忠昌公御代迄　平田美濃守兼宗
大寺忠幸
石井義忠

本田三郎五郎宗親
後治部少輔　法名全勝

○本田氏四代貞親他腹之長男二郎左衛門尉久兼五代之孫、

周防守親宗子也、

○久兼―忠恒―兼久（イニ道親）―親宗―宗親―親尚―親貞

村田肥前守經安

○村田氏十四代肥前守經房嫡子也、明應四年七月五日被誅　忠昌公、依背御意也、　忠昌公御代迄御家老、村田家嫡流也、法名春沢、

大寺治部少輔安勝入道宮音

○諸家大概ニ、大寺氏之条下ニ自　立久公至　勝久公御家老ト有、

○忠昌公（十一代）長享二（享）二　○忠治公（十二代）延德三　○忠隆公（十三代）明應九

○勝久公（十四代）文亀二　享禄元年（享）改忠兼称勝久、

自文明六年至大永六年御代々継立守護職也、此四代五十三年、

本田因幡守兼親（イニ宗）入道了観　初又二郎

○本田信濃守國親之子、不為家督欤、イニ元祖親鞍十二代之家督、永正十八年三月吉日坪付ニ有、高岡士河上次郎左衛門文書、

伊地知周防守（イニ介）重貞　又九郎　新左衛門尉　左衛門

○伊地知越右衛門家二代之祖、伊地知左馬介重次養子、實弟也、重次八八代太郎左衛門重持二男也、自　忠治公至　勝久公御家老、加治木地頭、住彼地、依有不臣之色、大永七年五月六日　勝久公命　日新公於加治木賜誅、

伊地知越右衛門祖

鳥取幡（播）磨守政茂（イニ義）

○伊集院士鳥取治右衛門ト云者有、雖然不詳、

桑波田讃岐守景元入道観魚　或観兼

伊集院士中島弥太郎文書ニ有、

○伊集院四郎入道迎清之三男、

○桑波田阿闍梨源智―萬揚房覚辨―宗景（刑部丞）―久宗（掃部丞）―宗恒（六郎）

安養院文書ニ曰、永正十八年三月吉日ト有之、南郷之

城主也、　日新公背故天文二年三月廿九日攻落シ玉フ、

伊地知縫殿介重周
初又太郎

○秩父家之祖自重光十二代太郎左衛門尉重弘嫡子也、自忠治公至　勝久公御三代御家老、大永三年癸未十二月五日於月野戦死、○大永二年壬午八月十七日知行下大隅高城、此時建立金蔵寺、秩父家系圖ニ曰、勝久公治國之時、重周嫡男周防守重武補御家老ト有之、

肝付越前守兼演入道
大永四年ノ比八三郎五郎　以安

○兼演入道以安者肝付家嫡肝付八郎左衛門家ノ四男也、肝付河内守兼忠之四男也、　貴久公御代ニ初兼演ニ賜隅州加治木、

○兼光（三郎五郎　越前守）―兼固（三郎五郎　越前守）―兼演（三郎五郎　越前守）―兼盛（三郎五郎　弾正忠）

池袋越後守宗政

○（ママ）

土持伊豆守政綱入道
「弓伴

○田部姓土持佐左衛門家ノ元祖、政綱ヨリ前代不知、仍建政綱元祖、

梶原備前守景豊

○梶原善左衛門景昌十二代之祖梶原平蔵景時八代之孫帯刀助純弟新右衛門尉純信二男新右衛門尉幸純四男主計孝純之二男備前守忠純三代之孫景豊也、帯刀助純ハ平右衛門景根十四代之孫也、

本田刑部少輔千親
次郎左衛門尉

○種子島家之文書ニ次郎左衛門尉千親ト有、

忠臺イニ基トモ有

川辺土末弘五郎太夫所持系圖ニ曰、
従是上世不知、
○末弘伯耆守忠臺――久盛（甚兵衛　因幡守）――○實新納民部左衛門二男也、伯耆守忠臺為後嗣、世々居住川辺也、

○家號不詳、疑ハ末弘伯耆守欤、永正十八年三月吉日高

岡士河上氏文書坪付ニ有、

平田美濃守職宗
初右馬介　後景宗（昌カ）

○安養院文書ニ平田美濃守職宗ト有之、大永七年　勝久公鹿児島没落之時職宗出奔、滞在末吉者有年、天文末年参謁　貴久公、而後補家老職、至　義久公労政事、帖佐地頭、　義久公御代ニモ又記之、

平田左馬介清春（イニ実名ナシ）

○忠昌公御家老也、樺山玄佐自記ニ曰、右之職宗ハ此人實名欤、

平田右馬介貞宗
美濃守

○平田監物系圖ニ御家老ト有、御代不知、疑ハ左馬介欤、

村田越前守經董
村田經定初ノ実名欤、

○安養院文書ニ村田越前守經董ト有之、○垂水調所氏文書ニ大永七年三月廿二日宗政・政綱・景豊・兼演・職宗連名之坪付有之、

村田肥前守經安

○村田家自家系圖ニ　立久公之御家老ト有之、委ハ前ニ記ス、

村田越前守武秀
初五郎右衛門

○村田五郎左衛門家十六代之祖、　勝久公御家老、村田經安子肥前守經尭之子也、於加治木戦死、

飫肥伊豆守

○源三位頼政之苗裔兵庫太郎子孫也、代々廻ノ城主也、於御當家忠臣之家ト有旧記、

又曰、
伊佐平氏貞時二男貞基十代之孫、

○道宗―盛隆（飫肥豊後守）―盛宗（平次郎　伊豆守）―久宗―盛幸―盛吉―盛房（迄ニ系ル、）

○右系圖出水士伊福惣兵衛所持、伊福氏ハ伊佐平氏貞時父忠頼弟忠道ヨリ鎌倉権太夫景道ト系ル、○文明六年甲午八月十九日山田聖栄自記矢開之書ニ有之、

鳥取孫左衛門尉

○（ママ）

義治

○家号不詳、石井氏欤、村田氏文書ニ兼親・景元・義治連判也、

末弘伯耆守綱秀（イニナシ）

○勝久公勝手之家老、有佞心不忠之志故、天文三年甲午十月廿五日貴戚臣川上大和守昌久誅綱秀于谷山皇徳寺、梟首鹿児島郡元村、

本田次郎左衛門尉親尚（イニ昌）

○本田治部少輔宗親子也、自　忠昌公至　勝久公御家老也、後ニ為實久之家臣、本田家元祖親幹四代貞親他腹之長男二郎左衛門久兼六代之孫也、法名昌永、

本田家四代左衛門督貞親入道静観他腹之長男

○久兼（弥太郎　左近将監　二郎左衛門　法名兼阿）
　忠恒（又二郎　五郎左衛門　勘解由左衛門）
　兼久（初道親　孫太郎　二郎左衛門　左近蔵人）
　親宗（又太郎　左近将監　周防守　法名金光）
　宗親（三郎　治部少輔　法名全勝）
　親尚（御家老、自　忠昌公至　勝久公、勝久公没落之後為薩州実久之臣、又二郎　二郎左衛門　法名昌永）
　親貞（三郎四郎　治部少輔　淡路守　美作守）
　女子　伊地知周防介重武室

●伊作家十代
忠良公

○高岡比志島氏文書

天文十四年乙巳十二月吉日坪付充所　村田經定

比志島美濃守殿　親信連名　忠光

天文八年己亥霜月吉日充所同人忠光・親信　忠朗　忠榮

天文四年乙未八月吉日充所同人忠光ト連名　親信

忠光　光久　忠朗

尚守（イニナシ）

平田安房介宗茂入道
初宗清　新左衛門　清甫

○平田平太左衛門家元祖民部少輔宗保四代式部少輔宗秀子也、加世田等地頭、平田平太左衛門家五代之祖、蒲生神守院（イニ護）文書ニ、永禄十三庚午二月吉日坪付ニ平田

安房介信茂・鮫島遁世双月・三原遠江守重秋ト有之、

鮫島土佐守宗豊入道　双月
安養院文書ニ遁世双月

諸家大概ニ曰、
○鮫島宗豊入道双月　貴久公守護職之時迄暫御家老ト見得タリ、
永禄十一年戊辰林鐘朔日田布施諏訪大明神棟札ニ、當地頭鮫島双月入道藤原増宗ト有之、

○鮫島土佐入道双月―土佐入道咸應―助六（後孫左衛門自国分鹿府ニ移、代々田布施地頭、東之城御預、）
　　雅楽介（實永吉采女弟、此代田布施ニ移居、）―嘉左衛門―刑部左衛門

三原遠江守重秋入道（イニ正庵）　昌安
初次郎四郎重益

○三原家嫡流三原次郎四郎、○重秋之祖父遠江守重秋ハ伊作家之家老也、加判八年ト三原家傳ニ有之、伊作家何代ト云事ヲ不知、父忠澄入道兼隠ハ自伊作家相従為後見至　義久公、父忠澄トハ新納康久之父也、仍テ康久之譜ニ有、

○重秋（入道昌安　法名心月昌安居士　石塔伊作多宝寺椿窓廟西ニ有、大木ノ杉有、）―重家（次郎　岩劔ニ打死、イニ宗　兵部　高麗ニ病死、）―重種（備中）
　　重次
　　重饒（左衛門佐）―遠江重時
　　諸右衛重尚
　　次郎四郎重秀

新納伊勢守康久入道　一珪齊（イニ伊勢守）
初又五郎　右衛門佐

○新納家四代修理介忠治之二男駿河守是久嫡子越前守友義之二男能登守忠澄嫡子也、忠澄ハ五郎右衛門家之元祖、

○貴久公（十五代）
大永六年十一月廿七日受　忠兼公之譲而任守護職之處ニ、同七年依實久之陰謀辞鹿兒府而歸伊作矣、厥后天文十四年三月十八日再任守護職、

伊集院大和守忠朗入道
孤舟

○伊集院家六代弾正忠頼久之四男大和守倍久、

○倍久―忠公（大和守）―忠朗（大和守）―忠倉―忠棟―忠眞（至此代家断絶、）

孤舟野元笑岳寺一宇ヲ建為菩提所、自　日新公御代御家老也、

三原遠江守重秋入道
昌安

○三原兵部少輔重平嫡子、重秋之祖父遠江守重秀ハ伊作家之家老、自　日新公　義久公迄、

村田越前守經定

○村田越前守武秀男、經定曽祖父肥前守經安ハ自　立久公御代　忠昌公御代迄御家老、經定ハ　義久公御代迄、村田九郎左衛門經武七代之祖、

伊集院掃部介忠倉
初右衛門太夫、後大和守

○伊集院忠朗入道孤舟之子、永禄九年伊集院右衛門太夫忠倉卜有、

川上上野介忠克入道
意釣

川上家五代川上上野介兼久之三男

○忠塞（左近将監）―榮久（信濃守）―忠克（上野介）　川上主鈴家之祖、

肝屬弾正忠兼盛
初三郎五郎

○肝屬家庶流越前守兼演入道以安子也、自　勝久公　義久公迄、肝付左門家之祖、

有川長門守貞清

○伊勢六郎左衛門貞増系圖ニ　伯囿様御家老之由、

○義久公（十六代）

自元亀二年至文禄四年守護職二十五年、

川上左近将監久朗
初源三郎（川上縫殿久映七代之祖）

○川上上野介忠克入道意釣子、自天文廿二癸丑年永禄十一戊辰年迄御家老職、十八歳ヨリ、正月廿日於菱刈馬越負矢疵、歸麗府死二月三日、三十三歳也、

伊集院右衛門大夫忠棟入道
初忠金　源太　掃部介　幸侃

○伊集院掃部介忠倉子也、自永禄九丙寅年（イニ天文廿二年トモ）慶長四己亥二月迄、同三月九日　忠恒公於城州伏見之茶亭御手自御誅伐也、

喜入式部大夫季久
初三郎四郎　後摂津守

○喜入家四代摂津守忠俊子也、永禄十二己巳年（イニ九年トモ）比ヨリ、天正六戊子年（十脱カ）七月十一日（四カ）死去、喜入主馬家之祖、

○忠弘—頼久—忠誉—忠俊—季久—久通—忠政—忠高—忠長—久亮—久致—久峯—久茂—久福（當主馬）

平田美濃守昌宗入道（イニ職宗トモ）
初右馬介威宗　乗月

○平田家嫡流美濃守貞宗子、昌宗祖父美濃守兼宗迄四代相續被補御家老職、帖佐地頭也、自永禄十二年天正七年迄、天正七七月十四日死、葬帖佐総禅寺、

平田左馬介光宗入道
初新七　後美濃守　舜蘆

○平田増宗家六代美濃守昌宗聟養子、實平田備中守宗秀二男也、則安房介宗茂弟也、宗秀ハ増宗家之庶子家也、自天正三乙亥年頃賜郡山・西別府、補肥後八代地頭職、慶長十年十二月廿六日卒郡山、年七十七、葬圓秀寺、

上原長門守尚近

○上原小助祖、自天正三年、○蒲生士竹内吉左衛門文書ニ上原長門入道尚常卜有之、自尚近九代之孫上原七郎次代依科家断絶、

上井伊勢守覺兼
初為兼　神左衛門

○諏訪甚六貴兼之曽祖父、上井武蔵守董兼子也、自天正四丙子年比、天正十七年六月十二日於伊集院卒、年四十五歳、

本田下野守親貞入道（又清トモ）
初弥六左衛門　三省

○本田家庶流本田六左衛門親武曽祖父也、本田下野守親尚子也、自天正八庚辰年、

○親尚（古簾子　下野守）——親貞（二男　弥六　下野）——親孝（右衛門　内蔵允）——親正（弥六　伊与）——親武（六左衛門）

村田右衛門尉經平（イニ秀）

○村田右衛門尉經平ハ右衛門尉季久子也、自天正十年壬（イニ八年）午比、於泉州堺横死、領郡山、

○經定（越前守）——秀久（イニ季）（右衛門尉）——經平（越前守 右衛門尉）——村田五郎左衛門經行曽祖也、

島津圖書頭忠長入道紹益（初又五郎 紹璞 紹節 麟臺）

○島津忠長入道紹益ハ　貴久公御舍弟左兵衛尉尚久之子也、自天正十一年（イニ十年）癸未十月廿四日至慶長十五丁（庚）戌年、家久公御代迄、慶長十五年戊十一月九日死去、

平田左近将監蔵宗（初房宗 新三郎 美濃守）

○平田美濃守光宗子也、自天正八年（イニ十八年）庚辰年、慶長三年於朝鮮国病死、法名天翁宗眞、

町田出羽守久倍入道（初伊賀守 存松 玄トモ）

○町田家十六代兵部左衛門久徳子也、自文禄初比慶長五年子迄、

○忠經—忠光—光俊—經俊—道俊—實氏—助久—清久

忠良—成久—俊久—高久—頼之—梅吉—梅久—忠栄

久徳—久倍（出羽守）—忠綱（左京亮 圖書）—久幸—忠尚—久孝—久東

久居—久儔（監物）

町田監物祖

山田越前守有信入道理安（初新介）

○山田蔵人有徳子也、有信凡年四十六之自天正十六戊子年、慶長十四年己酉六月十四日在職死、勤職二十二年、法名利安慶哲居士、　義久公御隠居跡　義弘公御代迄、

種子島左近大夫久時入道一琢（初克時 三郎次郎）

○種子島左近将監時尭子也、自慶長四己亥年比、自　義久公賜御諱字号久時、　義弘公御代迄、

本田六右衛門尉親正（イニ左 正親トモ）（初刑部少輔 イニ因幡守 周防守）　後三河守

○本田家庶流因幡守親治子也、　家久公御代迄、本田市郎左衛門曽祖也、出水地頭、系圖左條ニ記之、

比志島紀伊守國貞
初彦四郎　宮内少輔

○庶流比志島宮内少輔國貞入道咲翁之子也、自慶長元年、高岡地頭、元和六年四月三日卒、比志島主膳国治養祖父也、比志島善八家之祖、　家久公御代迄、

長壽院盛淳

○畠山中務太輔頼國入道橘隠軒子也、自天正之末比、慶長五年子九月十五日供奉　義弘公於関ヶ原戦死、初安養院住持也、阿多淡路義扶高祖父也、

平田太郎左衛門尉増宗
後英宗

○平田家嫡流左近将監歳宗之子也、　家久公御代迄、慶長十五年六月十九日、有逆心之聞、依之押川強兵衛・桐野九郎右衛門ニ命シテ於入來土瀬戸越両士以鉄炮討留之、平田家嫡流至増宗九代爰ニ断絶、

伊集院下野守久治入道
初三郎兵衛　抱節

○伊集院家庶流今給黎長門守久俊之二男伊集院下野守久通入道魯笑之子也、

鎌田出雲守政近
初又七郎　圖書助

○鎌田修理亮政佐十七代圖書頭政勝之子也、自天正十九年卯春慶長十年巳九月朔日迄、同日死于京師、至　家久公、七代之孫鎌田蔵人政統、

樺山権左衛門久高入道
初七郎　後美濃守　玄屑

○樺山家十代兵部太輔忠助入道紹劔之二男也、後十三代ノ續家督、自文禄元年壬辰三月、寛永十一年戊年死、年七十七、至　家久公、

右之外　義久公御隠居以後之御家老左ニ記、且又自天正十三年　義弘公御守護代被成候得共、御家老者右之人數也、別ニ　義弘公御家老有之候得トモ、　義弘公御蔵入計之支配ト相見得候、

喜入大炊介久正入道
紹嘉

○喜入家四代摂津守（イニ介）忠俊之二男圖書助忠通之後嗣、實川上九郎左衛門久光之長男也、　喜入休右衛門祖

山田越前守有信入道
理安

○山田家前ニ記、

平田久兵衛尉宗親
後越前守

○平田左近将監歳宗之二男也、兄増宗依伏誅慶長十七年四月廿六日賜死、年四十二、

○宗親（久兵衛尉）
- 宗次（右馬介）
  - 新八郎父同日ニ賜死、

本田参河守正親（イニ親正）
初刑部少輔　因幡　（イニ左）六右衛門尉

本田家嫡十二代因幡守兼親之二男也、
○親貞（初親成　因幡守　入道一恕）
- 親知（又五郎　刑部少輔　又友親　刑部大輔）
  - 親治（又五郎　因幡守）

正親（六右衛門　三河）
- 親光（助左衛門）
- 友親（甚兵衛）
  - 盛親（甚兵衛）

本田與左衛門尉公親入道
初大炊大夫　玄叱

○本田新次郎家十代本田大炊大夫親兼子也、曽於郡地頭、

○（十七代）義弘公

天正十三年四月廿四日雖任守護職、御治世者　義久公御治世之内ニ込ル、

伊勢雅樂助貞世入道
初有川貞眞　任世
又貞序

○伊勢雅樂介貞世ハ有川治部少輔貞則之二男也、　義弘公飯野御在城之時補御家老、本ハ有川也、伊勢兵庫頭貞良之三男伊勢三郎貞興之養子ニ為貞世二男兵部貞昌、貞世依願也、而冒伊勢氏、有川家之祖ハ平氏清盛之弟池大納言頼盛ヨリ出ツ、供奉　忠久公下向薩州、伊勢貞世系圖左ニ記ス、初有川、

○貞則（有川治部少輔）
- 貞清（長門守）
  - 貞朝（内記）
    - 貞秋（六郎左衛門）
      - 貞増（六郎左衛門）
- 貞世（雅楽　入道任世）
  - 貞成（弥八郎　平左衛門）
    - 貞昌（弥九郎　兵部少輔）

川上参河守忠智入道
初又七　左京亮　肱枕

○川上家五代川上上野守兼久三男左近将監忠塞三男信濃守忠興之嫡子也、天文十三年生、元和二年九月四日死、年七十三、飯野御在城御家老、轉補栗野・馬越・蒲生等地頭職、

川上助六七代之祖

○忠智（三河守）
- 忠堅（左京）
- 忠兄（四郎兵衛）

伊集院肥前守久信入道
初源助　久春　元巣後一雄

○伊集院今給黎元祖長門守久俊之三男長門守忠綱（久カ）六代之孫、伊集院助八郎久次之嫡子也、日州蓬原・飯野等地頭職、移居飯野、

伊集院源右衛門祖

新納旅庵
初助之丞　長住

○新納伊勢守康久入道一珪二男、五郎右衛門久饒入道遊甫之弟也、初時宗之僧ニテ肥後八代荘厳寺住持、還俗シ休閑齋旅庵ト号ス、高原・栗野・市來等之補地頭職、慶長七年十月廿五日在職之内死去、

新納九右衛門祖

本田源右衛門尉親商

○本田源右衛門親商ハ加治木家臣本田源右衛門祖也、親商之父ハ号本田若狭介、加治木御在城御家老、伊勢平左衛門貞成死去故親商任職、雖然中一年勤職シテ死去、故自鹿児島種子島左近久時承知之而御用相勤、御使役新納木工右衛門入道一甫而已ニテ相濟ト云〻、（慶長十年壬辰四月廿日死、法名良山道久長年寺、関ヶ原合戦之後蒲生地頭、）

本田家十二代兼親三男兵部少輔親賢二男蔵人之男也、若狭トモ有リ、

○親賢
- 親豊
  - 親次
    - 親次
      - 親昌
        - 親友（兵右衛門）
- 蔵人
  - 親商（源右衛門）
    - 親存（伊豆）

川上四郎兵衛尉忠兄入道
初久三　弥八郎　青糠
大炊介

○川上参河守忠智入道肱枕之二男也、則左京忠堅弟也、川上久右衛門久智之為ニ兄也、初吉松内小野寺相模坊為養子、雖然依　義弘公上意還俗、川上四郎兵衛家祖、

伊勢平左衛門尉貞成
初弥八郎　貞顕　貞林

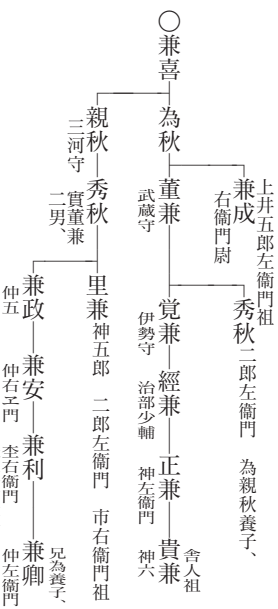
○伊勢雅楽介貞世長男也、則伊勢兵部少輔貞昌之兄也、加治木御在城御家老、伊勢平左衛門・同氏平八左衛門両家之祖、平左衛門ハ貞成養子、平八左衛門貞成之實子也、為二男家、肥前唐津江為御使者差越、於彼地打死、慶長十二年十一月也、年卅九、

比志島掃部介國詮
初彦三郎　内蔵之丞　河内守

○比志島家庶流美濃守國親子也、加治木家臣比志島源右衛門家ノ祖、

上井次郎左衛門尉秀秋
入道傳齋

○上井次郎左衛門尉秀秋ハ諏訪市右衛門家二代之祖也、上井三河守親秋之養子、實ハ家嫡武蔵守董兼二男ニテ、伊勢守覚兼弟也、自天正十年壬午十一月、日州綾地頭、於綾病死、飯野御在城御家老、



上井神五郎里兼
後次郎左衛門尉

○上井次郎左衛門尉秀秋子也、日州小林地頭職、廿五歳之時補御家老、寛永八年六月四日死、諏訪市右衛門祖、

一伊勢六郎右衛門貞増系圖ニ、有川治部少輔貞則ハ　日新公御家老之由ト有之、永禄九年二月忠智・貞則連署、

十八代
○家久公
イニ四
自文禄三年至寛永十五年治世四十五年、イニ慶長十五年ヨリト有之、

伊勢兵部少輔貞昌
初弥九郎

○伊勢雅楽介貞世入道任世二男也、自慶長十二年比寛永（イニ六）十七辰年迄、自寛永元年江戸詰、寛永十八巳四月三日（イニ廿三日）於江戸死、

○前ニ記ス、

伊集院右衛門大夫忠棟
同　島津圖書頭忠長入道
同　比志島紀伊守國貞
同　平田太郎左衛門尉増宗
同　伊集院肥前守久信
同　鎌田出雲守政近
同　樺山美濃守久高

町田圖書頭久幸
初勝兵衛

○町田監物久儔祖、出羽守久信二男也、久信長男忠綱早世故町田家二十代相續家督、自慶長十六年辛亥年、寛永元年子正月十七日於江戸死、イニ十八年四月トモ有、

三原諸右衛門尉重種
後備中守

○三原遠江守重秋子兵部少輔重宗之男也、實三原家庶流二郎左衛門重行之嫡子也、重宗為養子、自慶長十七壬子年元和四年迄、又寛永元年迄、元和六年閏十二月之連暑（署）ニ有之、　家久公加治木ニ被遊御座候ニ付、元和七年加治木エ被召移、知行高二千二百廿七石ト有、然ハ元和四年迄トハ誤欤、

島津下野守久元
初忠在　新八郎　近江守

○島津圖書頭忠長之二男也、久元兄河内守忠倍早世以後為家督、自元和四年、寛永廿年未六月十二日在職内死去、（イニ元和三年十月廿五日連判有、四年八非欤、）

喜入摂津守忠政
初忠續

○喜入摂津介季久四男也、兄式部太輔久通之名跡、自元和四戊午年寛永十癸酉年迄、イニ自寛永元子年同五辰年迄トモ有之、正保二年酉三月十八日死去、

比志島宮内少輔國隆

○比志島紀伊守國貞之子也、（イニ元和九年十月廿三日連判有之、）自寛永元年甲子八月同五戊

辰年迄、高岡地頭、雖然依有不忠之志寛永六年流罪種子島、其後誅于彼地、（イニ寛永五年十月晦日死ト有、）

川上式部太輔久國入道
初源三郎久首　商山
久好（左近将監因幡守）

○川上左近将監久辰之子也、自寛永七庚午年慶安二己丑年迄、（寛文十八年卯四月十八日死去、）

○久朗（左近将監）――久辰（左近将監）――久國（寛永十六年七月改因幡守、）

島津弾正大弼久慶
初又五郎

○島津左衛門久定家之祖、下總守常久之子也、自寛永十一年戊（四カ）五月十四日同十八年巳十一月十九日迄、慶安二年六月五日奉異國方、同四年七月廿三日死、（死後野心露顕、仍テ被除世系、）

○歳久―忠隣―常久―久慶

鎌田出雲守政統
初政弘　政晴　又七郎
治部少輔

○鎌田出雲守政近之子蔵人政冨子也、自寛永十二乙亥年同十八年巳迄、イニ自寛永十四年同十八年トモ有、轉補指宿・蒲生地頭職、

三原左衛門佐重饒（タカ）
初次郎四郎　後重庸

○三原備中守重種之子也、自寛永十二乙亥年同十七辰年迄、

三原諸右衛門祖

山田民部少輔有榮入道（巖）
字千代太郎　弥九郎　昌巖（晏齋トモ）

○山田越前守有信入道理安之子也、有栄五十九歳自寛永十三年丙子三月慶安三庚寅年迄勤職十五年、寛文八年申九月八日死、年九十一、（寛永十二年三月十七日連判有、）

○光久公（十九代）

寛永十五年五月八日御家督、至貞享四年治世五十年、

頴娃左馬頭久政（イニ介）
初長左衛門

○頴娃弥市郎久秀之後嗣、實父鎌田出雲守政近之二男也、

寛永十八辛巳年ヨリ正保三年丙戌迄、於伏見死、嫡流
頴娃家九代養父久秀相續別家故除、弥三郎久音養子、

北郷佐渡守久加（マス）
初又二郎

○北郷家十代左衛門尉時久之三男加賀守三久之男也、自
寛永廿癸未年明暦二丙申年迄、自寛文六年午八月御城代、
自寛永十六卯六月旅御家老、延宝八年庚申八月晦日死、

島津圖書頭久通
初久慶　又七郎
俗ニ髭圖書ト云、

○島津下野守久元子也、自寛永十九年午十一月旅御家老、
イニ十六年
自正保二乙酉年寛文十二壬子年迄、自四十二歳御家老
職也、寛永十九年壬午正月廿六日初供奉御発駕、

○前ニ記ス、　伊勢兵部少輔貞昌
同　島津下野守久元
同　川上因幡守久國
同　島津弾正大弼久慶
同　鎌田出雲守政統
同　三原左衛門佐重庸
同　山田民部少輔有榮

新納右衛門尉久詮
初乙壽丸　豊三郎

○新納五郎右衛門入道遊甫養子、實同氏縫殿介久時之六
男、養祖父伊勢守康久　日新公御家老也、自正保二乙
酉年寛文三卯年迄、イニ幽山新納尾張守トモ有、隠居号遊
山、延宝三年正月五日死、新納右衛門久張五代之祖、

島津筑前守久頼
初頼喜　蔵人

久頼ハ　光久公御妹聟也、
○島津筑前守久頼ハ敷根中務少輔立頼之子也、賜島津称
号及久之字、號島津筑前守久頼、自慶安二己丑年寛文
四甲辰年迄年數十六年也、

○頼次（備前守）―頼重（備前守）―頼愛（備中守）―頼兼（備中守）―頼光（イニ元　藤左衛門）
立頼（中務　三十郎）―久頼（蔵人）
下野守久元弟也、

町田勘解由久則
初源六御役 後伊賀以後　石心

○町田家十六代兵部左衛門尉久徳二男源左衛門尉久政之子也、自慶安二丑年寛文二壬寅年迄在職十四年、町田勘解由祖、（イニ寛文二八月）

伊勢兵部少輔貞昭
初伊勢鶴丸　隼人　又兵衛

○伊勢兵部少輔貞昌之嫡男大隅守貞豊之後嗣也、實　太守家久公御子也、自慶安二己丑年寛文三癸卯迄、同年八月四日死去、

鎌田源左衛門政有
初政光　源五郎

○鎌田木工之介政常七代之孫玄蕃允政朝養子政有也、實鎌田左京政虎之嫡子也、自慶安二年己丑二月寛文七丁未年迄、此以前旅御家老、鎌田典膳祖、

鎌田蔵人正信
初政由　政成　政昭　政直
正勝　又七郎　筑後

○鎌田治部少輔政統之後嗣、實　太守家久公之御子也、

自明暦二年丙申十二月十六日寛文六年丙午迄、六月二日トモ日死、年数十一年、明暦三年十二月改筑後号蔵人、（イニ四）

島津中務久茂
初号北村、忠智　新八郎　越中

○島津下野守久元二男也、自万治元戊戌年寛文八戊申年迄、承應四年二月四日初御供、

○久茂―久武（甲斐）―久文（内記）―久昌（新八）―五代之孫島津内記

町田勘解由忠代
初久昌　忠貞　伊賀　源六
源左衛門

○町田家庶流勘解由久則之子也、自寛文二壬寅年貞享二乙丑年迄、（イニ元禄十三辰年迄、綱貴公御代迄三十三年ト有、）二月迄在職廿四年、

○久政（源左衛門）―久則（伊賀）―忠代（伊賀）―久英（源左衛門）―久孝（源左衛門）

新納又左衛門久了（ノリ）
初久正　久仁　弥七郎（イニ五郎）

○新納右衛門久詮子也、自寛文三癸卯年元禄八乙亥年迄、在職内三月十八日死去、年七十七、（倍聲軒無悔道竜居士）

島津帯刀久元
初久名　久延　久共『兵カ』　主計
清太夫

○島津豊州家六代豊後守久賀之二男也、自寛文六年丙午八月七日御物座方、元禄三年庚午四月十九日迄、延宝二年甲寅八月廿七日為御物奉行、イニ元禄四年未八月三日死ト有、在職廿六年、

諏訪木工右衛門兼利　兼清トモ

○諏訪家庶流諏方仲右衛門兼安之子也、自寛文二年十一月、同三年辞職、同六年イニ七年十月十二日毎月御定之御用日可登城之有　命、其後イニ寛文三年癸卯三月二日御発駕供奉、寛文七年丁未二月十六日再任職、同十一年辛未二月三日辞職、自明暦二年比旅家老、

諏訪仲左衛門祖

島津市正忠廣入道
初市熊　忠弘　萬山
宝壽

○島津市正忠廣八　太守家久公之御子也、島津豊後守久賀母義弘公之長女御屋地忠廣ヲ養為久賀之弟、而後延宝五年丁巳三月十四日去豊州家準御三男家、寛文七丁未年ヨリ延宝七己未年迄在職十三年、元禄十六年未八月三日死、年八十四、

島津助之丞祖

島津甲斐久憑イニ馮
初久賢　久武　久正　新八郎

○島津中務久茂子也、自正保三年貞享二年己丑(乙)八月十六日迄、此以前旅御家老、在職十六年、イニ自寛文十庚辰(戊)年トモ有、貞享二年丑八月十六日於江戸死、綱貴公御代迄、

肝屬主殿久兼
初兼喜　兼方　伴三郎　弾正
入道活堂

○肝屬家庶流肝付伴兵衛尉兼屋之男也、則弾正忠兼盛之曽孫也、自寛文十庚戌八月廿四日宝永四年丁亥正月十三日迄、　光久公　綱貴公　吉貴公御代迄在職四十年、宝永六年己丑二月八日死、

島津圖書久竹
初久胤　又五郎　出雲

○島津圖書頭久通子也、自寛文十二壬子年年三十八、元禄六癸酉十月十六日在職内死去、在職二十二年、寛文十二年記録方為總監、

島津中務久輝
初久英　又七郎

○島津安藝久雄子也、自延宝二甲寅年宝永七庚寅年正月

迄在職三十七年、光久公 吉貴公迄、綱貴公

○家久（貴久公四男 中務太輔）―豊久（忠豊 中務太輔）―忠栄（中務太輔 安藝）―久雄（中務）―久輝

種子島蔵人久時入道 山栖

○種子島左近忠時之子也、自延宝七己未年宝永七年庚寅六月廿八日迄、　御家之一字拜領、　光久公　綱貴公吉貴公御代迄、在職之内死去、勤職三十二年、

北郷惣次郎忠昭

○北郷作左衛門久精子也、自天和元辛酉年、貞享五年戊辰三月朔日在職内死去、（在職八年、）

○三久（北郷加賀守）―久加（佐渡守）―久精（作左衛門）―忠昭（惣次郎）―久嘉（作左衛門）―久度（宗一郎）

島津助之丞忠守入道 初大學

奚云（イニ慶雲）

○島津市正忠廣子也、寛文二年御家老代、御役料高二千石、自天和二壬戌年宝永二年乙酉十月迄（イニ三月十日迄トモ）　光久公　綱貴公　吉貴公御三代勤職廿六年、宝永四年亥十二月廿日死去、

佐多豊前久達 初貞朝 内記 備後 虎三郎 豊前 市右衛門 備前

○佐多丹波久利之後嗣、實　太守光久公之五男也、佐多家元祖四代之　太守忠宗公三男佐多三郎左衛門尉忠光十五代也、久達ハ　光久公　綱貴公　吉貴公御三代御城代、無加判、正徳元年卯九月十五日島津之御名字拜領、同二年辰七月改備前、延宝四年御城代、同八年三月三日御家老職、御城代如元、元禄十年丑二月迄、御家老御免、御城代如元、享保三年戊七月五日依願御城代御免、（隠居御養料五百石、御役料高二千石、島津木工先祖、）

島津将監久當 初久寛 伊賀 縫殿 勘解由

○島津将監久政（當カ）ハ　義弘公四男久四郎忠清之養子又六久岑之後嗣也、實　光久公之十一男也、自貞享二乙丑年、享保四年亥五月五日御城代、御役料二千石、在職廿年、自（光久公継豊公迄、）イニ自貞享三丙寅七月御家老、自享保四年亥（イニ三年丙寅七月）

十一月御城代、加判御免、御家老勤如元、同十四年酉八月十七日御城代勤之内死去トモ有、又貞享三年ヨリ宝永二年酉十一月迄トモ有、

喜入安房久亮
初忠辰求馬　右衛門　又兵衛

○喜入家十代摂津介忠長之後嗣、實　光久公之九男也、自貞享三年丙寅七月宝永二年己酉九月迄、（イニ十月）御役料二千石、　光久公　綱貴公　吉貴公迄年数廿年、享保七年寅十一月十五日病死、

○綱貴公（廿代）

貞享四年七月廿七日奉　台命而御家督也、自貞享四年至宝永元年、

平田新左衛門宗正
初兵十郎　次郎兵衛　式部

○平田新左衛門家四代狩野介宗應子狩野介宗弘子也、自貞享五年戊辰九月五日元禄十二己卯年迄、此以前旅御家老、自　綱貴公御部屋栖之節二之丸御家老也、御役料高二千石、志布志等地頭職、在職十二年、

○前ニ記ス、
同　新納又左衛門久了
同　島津帯刀久元
同　島津圖書久竹
同　肝付主殿久兼
同　島津中務久輝
同　種子島蔵人久時
同　北郷惣次郎忠昭
同　島津将監久當
同　佐多豊前久達
同　島津助之丞忠守

禰寝丹波清雄
初清賢　七郎　八郎右衛門
孫左衛門

○禰寝右近重永之子也、自元禄五年壬申十一月九日同十二己卯年迄、在職内死去、御役料高二千石、御物座惣奉行、（今之御勝手方也、）

○重盛―維盛―高清―清重（沙弥行西）―清忠―清綱―清親
清治―清保―清成―清有―久清―清平―茂清―尊重

重就―清年―重長―重張―福壽丸―重永―清雄（丹波）

清方（内記）―清香（孫左衛門　式部　帯刀　賜小松称号、）―清行（仙十郎　右近）

島津圖書久洪（ヒロ）
初久雅（イニ雄）　久英　下野
（イニ八年）

○島津圖書久竹之子也、自元禄十年丑閏二月十五日、同十四年巳七月十六日（イニ四月トモ）在職内死去、

新納市正久珍（ヨシ）
初四郎左衛門　美作

○新納家嫡十四代近江久辰入道達心之子也、自元禄十年丁丑六月、宝永七年庚子二月十日在職内自害、　吉貴公御代迄、御役料二千石、外千五百俵、在職十四年、元禄十四年巳二月六日於江戸改名市正、新納波門先祖、

島津大蔵久明
初久始　式部

○太守光久公十男也、兄八人継別家、仍準御二男家、始而立家、自元禄十四年辛巳十月十一日享保二年丁酉四月五日迄、在職之内死去、　吉貴公御代迄、御役料二千石、（年数廿一年、）

○久明（大蔵）―久春（左中　大蔵）―久岳（八郎左衛門　大蔵）

川上式部久重
初長千代
隠居名祥山　源三郎　伊織

○川上家庶流川上源右衛門久孝之子也、自元禄十四年辛巳十月十一日（イニ十一月）宝永二年乙酉十二月廿六日（イニ廿八日）、（迄脱カ）吉貴公御代迄、御勝手方、新納市正添役、拜領無之、（正徳元年卯十二月廿一日隠居、称祥山、）

川上家庶流
○忠塞―栄久―忠克―忠頼―久朗―久辰―久国（因幡守）
久将（イニ時）―久孝（源右衛門　不為家督、）―久重（式部）―久映（縫殿）
（将監）

廿一代
○吉貴公

宝永元年甲申十一月十三日御家督、御年三十也、享保六年辛丑六月九日御隠居、御年四十七、御治世十七年、

島津帯刀忠雄入道
初久年　主計　仲休
入道睡雲

○島津帯刀久元之子也、自宝永元年甲申十月廿九日正徳五年乙未九月十一日迄、御役料二千石、宝永六年之春改仲休、正徳五年閏（ママ）十一月十六日入道睡雲、御役御免拜領物無之、正徳六年申四月七日死、

○久賀之二子
久元（帯刀）――忠雄（帯刀）　仲休

○前ニ記ス、

肝屬主殿久兼入道
活堂

同　島津中務久輝

同　島津助之丞忠守

同　種子島蔵人久時

同　島津将監久當

同　喜入安房久亮

同　新納市正久珍

同　島津大蔵久明

同　川上式部久重

肝付主殿兼柄
初伴三郎　左門　帯刀　典膳

○肝屬主殿久兼入道活堂之子也、自宝永六年己丑十一月十四日（イニ三日）、享保三年戊戌三月十七日（イニ廿日）在職ノ内死去、年数十年、御役料高二千石、

島津中務久貫
初久重　久命　内記　中務
主殿　主税　備前　又中務

○嶋津中務久輝智養子、實安藝久雄之二男島津八郎左衛門久矩之子也、自宝永七年庚寅四月十五日、元文四年未七月（イニ六月）朔日江府交代下向之時於摂州大坂病死、（イニ久敬トモ）継豊公御代迄、宝永二年十月九日改内記、同七年四月十二日改中務、（享保十九年七月二日改主税、）

種子島弾正伊時入道
初義時　栖林
三郎二郎　久基

○種子島蔵人久時子也、自宝永七年庚寅六月廿八日元文元年丙辰十月九日迄在職廿七年、御勝手、継豊公御代迄、御役料高無之、依願御役御免之日御脇差拜領、出水地頭、寛保元年酉七月十六日死去、

島津内膳久丘入道（イニ兵トモ）
齢翁

○島津豊州家十代、豊前久武（イニ邦）養子、実帯刀久元二男也、自正徳五年乙未十月十八日享保十一年丙午六月廿六日迄、　継豊公御代迄、依願御役御免、御脇差拝領、御役料千五百石、在職十二年、御側方、　継豊公御旅方、同御隠居方、

比志島隼人範房
初八之丞　藤右衛門　後彦市

○比志島孫太郎義頼養子、初ハ米良藤右衛門ト云、自正徳五年乙未十二月十八日、自享保六丑年御隠居御方エ相勤、宝永五子年於江戸改名隼人、延享四年丁卯十月十日　吉貴公御逝去以後、同年十二月廿日　宗信公於御前椛山主計久初ヲ以家老職御免、御養料百石、年数三十三年、職録（禄）千三百石、宝暦五年乙亥四月十八日死去、

北郷作左衛門久嘉
初頼常　左兵衛　宗二郎

○北郷宗次郎忠昭養子、實相良源五左衛門頼安之二男也、自享保二年丁酉十月朔日、同八年癸卯十二月廿七日在城之内死去、　継豊公御代迄、イニ酉十月朔日ヨリ種子島弾正添同役、

島津木工久武
後久豪　内記

○島津備前久達子也、自享保三年戊戌七月五日、延享二年乙丑十月六日在職ノ内死去、御役料千五百石、兼御側方、年数廿八年、宝永八年改名木工、

伊集院蔵人久矩
初十右衛門　入道自閑

○伊集院家十代之後嗣遠江守久族四代刑部久弘之子也、享保五年庚子九月三日於遠州濱松駅任職、同廿年乙卯八月九日　継豊公御代御側御家老、御役料千石、是ハ自享保十一年午、右廿年乙卯八月九日依訳御役御免、年数十六年、正徳二年辰四月三日改蔵人、其后家格寄合ニ被仰付、

名越右膳恒渡
初浅右衛門

○名越家元來ハ江戸浪人、俗姓不知、　吉貴公御抱也、
享保五年庚子十一月廿一日於江戸被仰付、同十年乙巳
九月十二日於江府在職之内死去、御側御家老、自　継
豊公御代御旅家老、御役料千石、

○廿二代
継豊公
享保六年辛丑六月九日御家督、御年二十一、延享三年
丙寅十一月廿一日御隠居、治世廿六年、御四十六、（年脱カ）

島津大蔵久春
初久誠　久芳　後久純
虎之丞　松之丞　権太郎
近江　左仲

○島津大蔵久明之子也、自享保八年癸卯十二月十一日、
延享三年丙寅二月六日在職之内死去於江戸、御役料千
三百石、年数十二年、　宗信公御代迄、

○前ニ記ス、　島津将監久當
同　島津中務久貫
同　種子島弾正伊時
同　島津内膳久丘
同　比志島隼人範房
同　北郷作左衛門久嘉
同　島津木工久豪
同　伊集院蔵人久矩
同　名越右膳恒渡

義岡右京久守　仲右衛門
初政信　忠守
仲之助　源右衛門　左平太

○義岡家者　太守久豊公之五男義岡ノ元祖伯耆守豊久七
代作助久伴迄、雖為断絶之家、　吉貴公依　命、宝永
六年己丑九月鎌田十左衛門政常入道慶山之嫡子鎌田源
右衛門政信ヲ以為義岡作助久伴之後嗣、相續義岡家、
号義岡右京忠守、自享保九年甲辰正月十一日、同十三
年戊申七月廿四日在職之内死去、御役料千石、座席比
志島隼人範房之次、

平岡内匠之品
初五郎右衛門　八郎太夫
後市左衛門

○平岡家ハ島津中務久茂之二男織部久達二男也、享保十
一年丙午五月十五日賜平岡家号、始而建家内匠卜名拜

領、イニ宝永二年乙酉十月廿八日島津五郎右衛門平岡五郎右衛門ト名字替被仰付、享保十一年丙午五月十一日御家老役、御役料千三百石、同年六月十一日ヨリ御側方、同二十年乙卯八月九日依訳御役御免、拜領物無之、家格為小番、元文元年丙辰二月廿四日死去、

樺山主計久初（モト）
初助太郎　権左衛門

○樺山家廿代椛山相馬忠郷之子也、自享保十一年丙午六月廿六日、寛延三年庚午九月廿一日在職之内死去、勤職廿七年、御役料千石、　宗信公　重年公迄、

堀四郎大夫興昌
初七郎　四郎右衛門
甚左衛門　入道了海

○堀甚左衛門興喜養子、實本田与兵衛親昌二男也、自享保廿年乙卯八月十一日、元文六年辛酉二月十五日依願御役御免、一世御養料百石、御勝手方、種子島弾正添役、延享元年甲子七月三日死去、

頴娃左京久周
初長左衛門　後内膳

○頴娃長左衛門久明養子、實島津中務久貫之弟也、元文元年丙辰十二月九日於江戸任職、御役料千石、延享五年戊辰正月十九日於江戸在職之内死去、法号諦心院殿義参良聖大居士、年数十三年、　宗信公御代迄、

北條織部時成
初種子島十左衛門時守
剃髪名中堂（仲道カ）

○種子島蔵人久時入道山栖二男ニ而、弾正伊時之弟也、元文四年己未十二月十三日（イニ朔日）任職、延享元年甲子五月廿二日賜北条氏則改北条、同四年丁卯七月廿七日依願御役御免、一世御養料百石、　宗信公御代迄、年数九年、御役料千石、御役之内座席頴娃久周次、宝暦八年戊寅（二カ）三月十日死去、

鎌田太郎右衛門政直
初政置　六郎大夫　隠居禅了

○鎌田太郎右衛門政高之子也、元文六年辛酉二月十五日任職、御役料千石、席北条時成次、御勝手方・表方・御側方、延享四年丁卯七月廿二日依願御免、一世百石御養料玉フ、　宗信公御代迄、年数七年、寛延二年己

巳二月六日死去、

島津左衛門久甫
初又次郎（イニ林）　民部　石見

○島津左衛門督歳久七代左衛門久儔入道遊閑之子也、寛保三年癸亥閏四月廿三日任職、座席同役中之上座、寛延二年己巳二月廿四日在職之内死去、　宗信公御代迄、在職七年、

○常久（下総守）――久慶（弾正）――忠隆――久道（一笑（賞カ））――久建（健カ）――久林（左衛門遊閑）――久甫（左衛門）『ママ』

島津主鈴久品
初右平太（イニ智）　右京　後久郷

○島津圖書久竹二男左内久香子也、寛保三年癸亥六月七日於礒任職、御役料千三百石、寛延二年己巳二月廿五日改右京、明和四年丁亥二月十七日在職之内死去、継豊公　宗信公　重年公　重豪公御四代相勤、年数廿五年、

伊勢兵部貞起
初鶴寿　弥九郎

○伊勢兵部貞栄之子也、延享二年乙丑十月十二日卅四歳ニ而任職、　継豊公御名代於　宗信公御前御直ニ被仰付、御役料無之、　重年公御代迄、年数十年、宝暦四年甲戌十月五日在職之内於江府死去、

○宗信公（廿三代）

延享三年丙寅十一月廿一日御年十九歳ニ而御家督、寛延二年己巳七月迄、（治世四年、）

前ニ記ス、　樺山主計久初
同　頴娃左京久周
同　北條織部時成
同　鎌田太郎右衛門政直
同　島津左衛門久甫
同　島津主鈴久品
同　伊勢兵部貞起

郷原轉久雄
初島津次郎右衛門兵雄　久兵
金大夫　御役後剃髪聾翁

○島津助之丞忠守二男、正徳元年辛卯十一月廿日初而郷

原家號被召建、延享四年丁卯七月廿二日任職、御勝手方・琉球方、御役料千石、座席主鈴久品次、延享五年戊辰正月廿一日依願御役御免、拜領物無之、イニ依思召御免トモ有、

鎌田典膳政昌（スケ）　入道桃林
初源左衛門

○鎌田家庶流鎌田要人政躬之子也、延享四年丁卯七月廿二日任職（イニ二日）、御勝手方、御役料千石、座席郷原轉久雄次、宝暦九年己卯七月十九日五百石御加増被下、同十一年辛巳七月廿七日依願御免、一世御養料百石、　重豪公御代迄、年数十五年、延享四年己卯七月廿三日改名典膳、

平田靱負正輔
初次郎兵衛　新左衛門　掃部

○平田家庶流平田新左衛門正房子也、延享五年戊辰正月廿一日任職、御役料千石、御勝手方・琉球方、加判同役同前、席鎌田典膳政昌次、宝暦五年乙亥五月廿五日於濃州御手傳場所死去、　重年公御代迄、年数八年、

平田家庶流
○宗正（新左衛門）――正房（新左衛門）――正輔（靱負）

島津大蔵久丘
初八郎左衛門

○島津大蔵久春之子也、延享五年戊辰二月十五日任職、御役料千石、座席島津左衛門久甫次、同年七月十四日在職内死去、

島津矢柄久富（イニ當）
初久純　弥市郎

○島津矢柄久富者元祖薩州家用久六代薩摩守義虎之四男越前守忠栄五代織部久近之子也、寛延元年戊辰七月廿七日任職、御役料千石、同四年辛未閏六月七日病氣有之依願御免、一世御養料百石、御役後剃髪遊山、御役内座席椛山久初下、伊勢貞起之上、

島津主殿久柄（イニ馮）
初平八　後久憑

○島津中務久貫之三男也、兄二人早世故為家督、寛延二年己巳六月廿二日任職、宝暦八年戊寅十二月廿日在職内死去、年数十年、　重豪公御代迄、

義岡弾正久中
初左平太　相馬

○義岡右京久守之子也、寛延二年己巳九月朔日任職、御役料千石、宝暦十年庚辰九月六日　重豪御代依　思召御役御免、拜領物無之、

○廿四代重年公

寛延二年己巳十一月十日御家督、宝暦五年迄治世七年、

前ニ記ス、　島津主鈴久品
同　伊勢兵部貞起
同　鎌田典膳政昌
同　平田靱負正輔
同　島津矢柄久富
同　島津主殿久憑
同　義岡弾正久中
市來左中政方
初次郎左衛門　次郎九郎

○市來早左衛門家二男市來備後為竹之内織部養子、嫡子備後代ニ養子違變、復本家市來氏、嫡子治十郎嫡子次郎左衛門家堅之嫡子也、寛延三年庚午十一月十二日於江戸任職、同月廿八日御太刀・二種一荷進上、御役料千石、座席平田靱負正輔次、宝暦三年癸酉三月二日ヨリ　継豊公御隠居方、同四年甲戌四月朔日病氣故依願御免、一世御養料百石、同五年乙亥五月十日死去、

新納内蔵久品
初次郎四郎　次郎兵衛

○新納四代修理介忠治二男駿河守是久十一代左京久敦子也、宝暦三年癸酉七月十一日任職、御役料千石、同四年甲戌九月廿五日於江戸在職内死去、

伊集院織部久東
初十左衛門　十蔵

○伊集院家十三代十右衛門久朝二男遠江守久熙三代十蔵久達之子也、宝暦五年乙亥六月八日於江戸　重年公御病中御逝去前任職、御役料千石、同六年丙子十一月七日在職内死去、　重豪公御代迄、

○廿五代重豪公

宝暦五年己亥六月十六日　重年公依御逝去、同年七月

廿七日御年十一歳ニ而御家督也、天明七年丁未正月廿九日御隠居、御年四十三、御治世三十三年、

前ニ記ス、　　島津主鈴久品
同　　鎌田典膳政昌
同　　島津主殿久柄
同　　義岡弾正久中
同　　伊集院織部久東

島津圖書久亮
初知之助

○島津圖書頭忠長入道紹益七代圖書久倫養子、實　吉貴公五男也、宝暦五年乙亥九月九日任職、　重豪公未江戸御滞留之故、於御下屋敷之館　継豊公自口被仰出、宝暦十三年癸未九月廿六日在職之内死去、年廿九、

高橋此面種壽
初種辰　種房　種敏　七郎右衛門
縫殿　隠居名霽雲

○高橋七郎右衛門種房長子、宝暦五年乙亥十一月七日任職、改名此面、御役料千石、明和五年戊子七月廿五日（イニ四日）御心ニ不被為叶思召有之御役御免、拜領物無之、御役内座席鎌田典膳政昌次、在職十三年、天明三年癸卯十一月十日死去、法名霽雲院殿忠巖徹信大居士、葬于太平山興国寺、

樺山左京久智
初七郎　久倫

○椛山主計久初子也、宝暦六年丙子十二月四日任職、御役料千石、座席島津主殿久柄次、宝暦十一年辛巳七月廿七日病氣有之依願御免、病氣快氣次第可被召仕旨被仰出、御時服拜領、在職六年、明和元年甲申十月廿一日病氣得快氣再任職、　重豪公御在府之故、島津備中貴儔為御名代被仰付、座席島津左中久金次、明和七寅年於江戸御側御家老、安永二年癸巳九月十五日病氣之故依願御免、一世御養料百石、在職十年、

菱刈藤馬實詮
初孫兵衛

○菱刈藤馬重之子也、宝暦九年己卯六月廿一日任職、御役料千石、同十一年辛巳九月廿二日於江戸御勝手方・琉球方加役、座席椛山左京久智次、明和六年己丑九月十三日於江戸在職内死去、年数十一年、

島津木工久峯
初太郎次郎

○島津木工久豪之養子、實　太守継豊公御三男也、　宗信公　重年公之令弟也、　延享五年戊辰六月廿五日見習被仰出御家老座江出席、自同日在閣老之列、無加判、宝暦十一年辛巳八月四日有　命居閣老上座、　先是以家格島津久亮之下、

○宝暦四年戊二月十五日若年寄、同九年卯六月廿一日免若年寄在閣老列、同年同月同日於御下屋敷　継豊公御直ニ思召有之若年寄役御免、御家老座毎日出席、御用筋御家老申談、不及加判、明和二年酉九月六日依願御免、

鎌田蔵人正芳
初小藤次　隼人

○鎌田出雲正甫長男、宝暦十年庚辰七月六日任職、御役料千石、同十二年壬午改蔵人、席義岡久中次、島津久品上、同十四年甲申四月廿八日在職内死去、

島津若狭久定
初又六郎　出雲　後山城
左衛門　後久暢

○島津左衛門久甫子也、宝暦十一年辛巳八月四日任職、席島津久亮次、島津久金上、宝暦十二年壬午二月山城卜名拜領、明和二年乙酉二月廿五日依願御役御免、拜領物無之、

島津左中久金
初所次郎　小平太　後伊賀

○島津将監久當嗣子小平太久幸之子也、宝暦十一年辛巳八月四日轉若年寄補當職、役録千石、明和七年庚寅於江戸為御側御家老、席島津久定次、菱刈實詮上、寛政五丑五月十九日依願御役御免、御時服拜領、御養料一世百石、

川田伊織國福
初与右衛門　国詮　隠居清運

○川田助右衛門国陣子也、宝暦十三年癸未十一月十一日轉若年寄補御家老、役録千石、御勝方、菱刈實詮相合可相勤旨被仰出、安永四年乙未七月廿九日御役御断可申出旨有之御免、一世御養料百石、年数十三年、天明元年辛丑七月十日死去、年八十歳、

島津仲久健
初権左衛門　久智

○島津薩摩守義虎三男備前守忠清家跡不立、一子新納家十一代近江守久元之令為養子、曰近江守忠影、其子近江忠辰入道達心、其子市正久珎以二男祖父忠影實之實（ママ）父忠清断絶之跡ヲ令嗣、而曰島津六郎次郎久嗣、早世亦断絶、於爰　吉貴公依　命二階堂八大夫行明入道栄樂以二男久嗣之為後嗣、号島津権左衛門久道、（後仲、隠居名久隣、）吉貴公御隠居方若御年寄相勤也、右仲久道入道久隣之子也、明和二年乙酉七月廿一日轉大御目附補當職、役録千石、席島津久品次、天明七年丁未五月廿七日依願御免、一世御養料百石、

桂織部久中
初藤九郎　次郎兵衛

○桂太郎兵衛久音子也、明和四年丁亥四月三日轉大御目附補御家老、席椛山久智次、　重豪公御在府之故、島津備中貴儔以御名代被仰付、役録千石、明和八年辛卯九月廿一日依病氣願之通御免、亦快氣之節ハ可被召仕旨被仰渡早、

喜入主馬久福
初安次郎　後安房

○喜入主膳久起子也、明和六年己丑十二月朔日於御前御直ニ轉大御目付補御家老、席桂久中次、役録返上、寛政元年己酉八月廿九日御役之内死去、

小松帯刀清香
初吉次郎　孫左衛門　式部
隠居隨鷗

○祢寢内記清方養子、實島津大蔵久春二男也、當代依命改祢寢號小松、明和六年己丑十二月朔日轉若御年寄御直ニ補御家老、席喜入久福次、役録千石返上、安永四年乙未四月十三日又〆千石被下置、天明元年辛丑閏五月十八日依願御免、一世御養料百石、年数十三年、

山岡市正久澄
初権太左衛門　齋宮

○山岡齋宮久方嫡子也、明和八年辛卯八月廿八日轉大御目附補御側御家老、役録千石、席川田国福次、安永二年巳春ヨリ繁栄方、同三年甲午五月於江戸市正卜名拜領、同九年庚子正月廿九日在職内於江戸病死、

島津左衛門久行（竹カ）二男　角助　齋宮　方トモ　齋宮　市正
○歳秀――久柄――久澄

赤松造酒則正
初甚右衛門　隠居名隨風

○赤松甚右衛門則茂養子、實町田八右衛門俊方二男也、安永四年乙未七月廿八日轉大御目附補御家老、役録千石、席二階堂行旦次、御勝手方、初川田国福添役、安永八年己亥八月十五日病氣有之依願御役御免、同月廿五日隠居、号隨風、同九年庚子四月十二日死去、年七十六、

二階堂主計行旦
初行寧　行中　行雄　四郎次郎
蔀　又初長興　行澄　森右衛門

○二階堂出右衛門藤原行道為後嗣、實相良彦左衛門長意之三男也、行旦始二階堂林左衛門行通雖為聟養子、家嫡出右衛門行道明和六年己丑二月七日依死去為後嗣、林左衛門行通家為両家兼帯、安永五年丙申十月十一日轉大御目附補御側御家老、役録千石、席島津久健次、自安永八年己亥八月十五日御勝手方御家老被仰付迄之間一往寄相勤、同九年庚子六月十一日御勝手方勤、天明二年壬寅正月十五日表方勤、宮之原通直申談相勤、同六年丙午五月ヨリ奥掛、同七年為御勝手方、寛政二年庚戌九月十五日在職之内死去、年六十八、法名實知院殿義翁道成大居士、

島津大進久起
初紋次郎　十太右衛門　後近江

○島津圖書久亮家之庶流島津十太右衛門久命之子也、安永九年庚子六月十一日轉若御年寄補御側御家老、重豪公御在府故、御名代島津若狭忠（救カ）以テ被仰付、役録千石、天明五年乙巳奥掛御免、同六年丙午五月十三日役御免、隠居被仰付、

宮之原主膳通直
初傳千代　宇右衛門　甚五大夫

○宮之原甚五兵衛平通興之子也、天明二年壬寅正月十五日大御目附御勝手方勤、其後御勝手方勤、席二階堂行旦次、役録千石、同六年丙午五月十三日表御家老、同七年丁未五月廿七日依願御役御免、一世御養料百石、

川上頼母久品
初弥平太　龍衛

○川上孫左衛門親倫之子也、天明六年丙午五月十三日自御側詰補御家老、御名代島津兵庫久徴ヲ以テ御勝手掛、

職田千石、席喜入久福次、同七年丁未五月廿七日依願
御役御免、一世御養料百石、

市田勘解由貞央
初熊次郎　喜内　後教國

○市田喜内源貞行之子也、先是先祖不分明、元來摂州大坂之人也、天明六年丙午十二月十三日於江戸大御番頭エ自御側役補御家老、職田千石、席宮之原通直次、奥掛并御側詰兼務、寛政元年己酉十一月十一日家格為一所持、御家老職御免、○同四年壬子五月十九日復御家老職、

○廿六代
齊宣公

天明七年丁未正月廿九日御家督、御年十五、

前ニ記ス、　島津伊賀久金
同　島津仲久健
同　喜入安房久福
同　二階堂主計行旦
同　宮之原主膳通直
同　川上頼母久品
同　市田勘解由教國

島津和泉久邦
初矢之助　木工　豊前　後石見

○島津木工久峯之子也、天明七年丁未三月九日自若御年寄補御家老、同年四月号和泉、同八年戊申十月廿五日改名石見、席島津久金上、寛政三年辛亥三月十九日死去御役之内、年三十九、法名泰雲院殿鶴汀籌山大居士、

菱刈大炊實祐
初實興　孫兵衛

○菱刈藤馬實詮子也、天明七年丁未三月九日自若御年寄補御家老、席喜入久福次、役録千石、

関山糺金暉
初金郷　軍兵衛　新左衛門

○関山軍兵衛日下部金麻之子也、天明七年丁未四月十一日自若御年寄補御家老、御勝手方、役録千石、席（ママ）
同八年戊申四月十一日在職内死去、法名大量院殿智岳良雄大居士、

島津登久連
初久亮

○島津登久置子也、天明八年戊申九月三日於江戸自若御年寄補御家老、役禄千石、席（ママ）寛政二年庚戌六月廿三日在職内死去、年七十四、法名（ママ）

島津求馬久昶
孝之丞

○島津求馬久醇智養子、實喜入主膳久甫二男也、寛政元年己酉十一月朔日自若御年寄補御家老、職禄千石、席島津久金次、

名越右膳時央
初恒篤　左源太

○名越右膳恒渡之一男左源太恒素之子也、寛政元年己酉十一月六日轉大御目附役為御家老、職禄千石、席二階堂行旦次、同二年庚戌九月御勝手方、

伊勢幡磨貞矩
初弥九郎　兵部　伊豆

○伊勢兵部貞起之嫡男也、寛政二年庚戌十二月廿八日於江戸轉若御年寄補御家老、席菱刈實祐次、

比志島要人範章
初（ママ）

○比志島隼人範房之嫡男彦七範（帯カ）嫡子也、寛政三年辛亥三月廿一日轉若御年寄補御家老、席島津久昶次、職禄千石、寛政四年壬子閏二月十九日於江戸死去、年五十、

山岡雅樂久容
初齋宮　右京

○山岡市正久澄嫡男也、寛政三年辛亥十二月廿八日轉若御年寄補御家老、席（ママ）

二階堂河内行充

○二階堂主計行旦嫡男也、寛政五癸丑四月十三日於江戸轉大目附補御家老、

川上久馬久致

○川上家十九代之嫡流也、寛政五癸丑七月廿八日轉若御年寄補御家老、

（ハリ紙）
「文化十一年戊十月廿九日、御家老町田監物殿、若年寄

赤松造酒殿、北郷作左衛門殿ハ御用候得共私領御暇、
郡奉行見習毛利八兵衛、十一月朔日北郷作右衛門ニ若
年寄、　　」

（ハリ紙）
「　　山田伯耆（有儀）殿
右、寛政七乙卯八月廿八日大目附より御家老御役被仰
出候、

赤松造酒殿
右、同年同月大目附より若御年寄御役被仰出候、

高橋縫殿殿
右、同日大番頭より若御年寄役、

川田伊織殿
右、同日大番頭より大目付役、

島津登殿
右、同日寺社奉行より大目附役被仰出候、　　」

（歴代当主上ノ○及ビ●ハ朱書ナリ）

『△』旅御家老・御談合役・御詰役・若御年寄

（ココヨリ後、上下段ヲ分ケル朱線アリ）

〔寛永十二年之比より御家老座御詰役、同十三三月より御家老、〕山田民部少輔有栄

〔上同寛永十二年より御家老、〕三原左衛門佐重饒 後重庸

〔右同寛永十二年より御家老、〕鎌田出雲守政統

〔寛永十六年十一月より旅御家老、〕北郷佐渡守久加

〔寛永十九年十一月より旅御家老、〕島津圖書頭久通

〔寛永末年旅家老、後御家老、〕鎌田源左衛門尉政有

〔慶安四年五月より御家老座詰、明暦二十二月十六日御家老、〕鎌田筑後守政信 後蔵人

〔承應二年より旅家老、〕島津中務久茂 初基太村新八郎忠智

〔明暦二年より旅家老、〕諏訪杢右衛門兼利 初兼清

〔寛文九秋之比より御談合役、横目頭兼役、〕山田民部有隆

〔寛文二年より御談合役、御物座詰、同年御家老、〕町田勘解由忠代

〔寛文三九月より御詰役、同六年八月七日より御物座方御家老、〕島津帯刀久元

〔御談合役ニ而御物座詰、寛文三より御家老、〕新納又左衛門久了

〔寛文六七月より御談合役、同十二年九月より御家老、〕島津圖書久竹

〔寛文六七月より御談合役、同十八月廿四日より御家老、〕肝付主殿久兼

〔寛文六七月より御談合役、横目頭兼、〕町田源左衛門久盛 後久英

〔寛文七十二月より御談合役、同十年より旅家老、〕島津甲斐久賢

〔寛文九正月より御詰役、天和二年より御家老、〕島津大学忠守 後助之丞

〔寛文九正月より御詰役、横目頭兼、延宝七より御家老、〕種子嶋蔵人久時

〔同年十月より御談合役、延宝二十一月より旅家老、〕平田新左衛門宗正

〔延宝五二月より御詰役、天和元より御家老、〕北郷宗次郎忠昭

〔御詰役、横目頭兼、年月不詳、〕島津左衛門忠興

延宝五三月より御詰役、横目頭兼、元録十一年十一月御家老座詰御免、

新納近江久辰

天和二八月より御詰役、同十一月より横目頭兼、慶安二年より御家老、（マヽ　マヽ）

伊勢兵部貞顕

貞享三閏三月より御詰役、元録十四十月十一日より御家老、

島津大蔵久明

貞享三閏三月より、横目頭兼、元録八正月より御家老座詰、同十年六月より御家老、

新納四郎左衛門久珎
後市正

貞享五年より御詰役、元録二年より光久公御隠居方、此以前より惣郡奉行ニ而御高拝領、指宿地頭、

伊集院遠江久照

元録十二五月より、同十二年十月十一日より御家老、

川上式部久重

宝永三十二月より若御年寄、同七年四月迄、

島津備前久貫
後内記

宝永七正月より正徳元六月迄若御年寄、

桂織部久祐

正徳元八月より若御年寄、同五年未十二月十八日より御家老、

比志嶋隼人範房

享保五五月十二日より、同十六亥六月五日御役御免、（イニ五）

島津彦大夫忠竹
初四郎左衛門（宇左衛門カ）　後久富

享保八十二月十一日より、同十一年五月十五日御家老、

平岡八郎大夫之品
後内匠

享保十九二月二日より、元文二年五月朔日依願御免、

二階堂舎人行篤

天和二八月より御詰役、同年十一月横目頭兼、

島津助大夫久文
後内記

天和二八月より御詰役、貞享四年より御物座詰、宝永元十月廿九日より御家老、

島津主計久年
後帯刀　忠雄

大蔵久明同日より同、元録十丑二月より御家老、

島津圖書久供
洪トモ

右同日より御詰役、

新納五郎右衛門久仲
後民部

元録元十二月より同五十一月迄御物座御詰役、同年十一月九日より御家老、

祢寝丹波清雄

宝永二十月より若年寄、同七年六月廿八日より御家老、

種子嶋弾正伊時

宝永四九月より若御年寄、同六十一月十四日より御家老、（イニ十二月）

肝付主殿兼柄

正徳元八月より若御年寄、同五年十月十八日より御家老、

島津内膳久丘
（イニ兵）

正徳五十二月十八日より若御年寄、享保三戌七月五日より御家老、

島津木工久豪
初長左衛門　又四郎

享保四十一月六日より、

川上久馬久東

享保十六亥六月二日より、元文四五月十五日依願御免、

島津市大夫久鼇

享保廿一年正月廿三日より、元文元辰十二月九日より御家老、

頴娃内膳久周
初左京

元文二五月朔日より、同四未十二月十三日より御家老、
北条織部時成
初種子嶋十左衛門

延享三四月四日より、同五年二月十五日より御家老、
島津大蔵久丘

延享五正月十一日より、寛延元辰七月廿七日より御家老、
島津弥市郎久富（イニ當）
後矢柄

元文五十月十五日より、寛保三亥閏四月廿三日より御家老、
島津左衛門久甫
初民部

寛延二九月朔日より、宝暦五七月十三日御役内死去、
島津内記久腆（本マ、）
新八久昌之子

宝暦四二月十五日より御家老座詰、同十二八月四日より御家老勤、
島津木工久峯

宝暦八年七月廿一日より、同十三未十一月十一日より御家老、
川田伊織國福

宝暦十二五月八日より、同十三年三月七日死去、
島津求馬久教

明和二九月廿八日より、大御目付より、
河野外記通古
初八郎左衛門

明和八卯二月廿五日より、安永九子七月十三日夜死去、年四十九、
島津采女久芳

安永九子六月十一日大御目付より、
島津木工久邦

元文二四月廿七日より礒御方、延享三刁八月廿三日仲卜名拜領、
島津仲久道
初權左衛門　入道久隣

享保三十二月廿五日より、延享二丑七月廿二日より御家老、（イニ寛保三亥十二月十五日トモ、）
伊勢兵部貞起

延享五七月廿五日より、寛延二丑（巳）六月廿二日より御家老、
島津主殿久柄
後久憑

寛延二九月朔日より、宝暦七年七月十日御役内死去、
島津将監久起
初左近

（延）寛文四未閏六月七日より御下屋敷御方、宝暦二申九月二日御役御免、
河野八郎左衛門通興
隱居名靜心

宝暦六二月廿一日より、明和六丑十二月朔日より御家老、
小松帯刀清香
初祢寢式部

宝暦九六月廿一日より、同十一巳八月四日より御家老、
島津左中久金

宝暦十三七月廿七日より、明和二酉八月十八日依願御免、御養料百俵、
島津靱負久超（イニ迢）
初大蔵

明和六十二月朔日より、安永二巳五月十五日若御年寄、天明元丑十一月三日依願御免、御養料百俵、
新納波門久侶
初四郎

安永二巳五月十五日より御側方御鷹懸カ方、安永八亥十二月朔日御留主中御家老、同九子六月十一日より御家老、
島津大進久起

天明元丑閏五月十五日大御目付、同六年午五月十三日御断、同六月廿八日御免、
末川織衛久救

「安永九子十月十一日大御目付より、天明八年申十月廿五日播广ト名改、
伊勢兵部貞矩 後伊豆 播广

「天明五巳正月十四日寺社奉行御側御用人勤より御役替、
島津登久連

「天明六午三月朔日於江戸大御目付格より御役替、御側方掛、
関山糺金暉（タヽス） 初軍兵衛

「寛政元年己酉十一月朔日より、大番頭より御役替、若御年寄、（衍カ）
比志島要人範章

「寛政三年辛亥三月廿一日大番頭より若御年寄、席喜入久量次、職禄三百石、
山岡雅楽久容

寛永五丑五月十九日寺社奉行より大目附、席赤松造酒次、家格寄合、連名之次第関山軍兵衛次、
山田司明遠

「天明二刁正月十五日大御目付より、
菱刈大炊實興 初孫兵衛 後実祐

「天明六午五月十三日より、大御目付より御役替、
川上久馬久致

「天明七未四月大御番頭より御役替、御鷹方掛、
島津求馬久昶

「寛政三年辛亥三月廿一日大御目附より若御年寄ニ御役替、席川上久致次、寛政四壬子七月七日死去、
喜入安房久量

「寛政三年亥十二月廿八日寺社奉行より補若御年寄、席（ママ）
小林中太兵衛政央

寛政五丑五月十九日大番頭より若御年寄、席頴娃左京次、
嶋津将監 始左中

『△』横目頭并大御目附

「宝永四年正月十一日之御證文ニ而横目頭ヲ大御目附ト唱候様ニ江戸より申来候、取次伊集院用之助

「年号不詳、
島津安藝守久雄

「上同、
阿多内膳忠栄

「右同、寛文二子（ママ）年より御家老、
町田勘解由久昌 後忠代

「右同、後御談合役、若御年寄、
新納又左衛門久了

御役被仰付候年月不知候得共、横目頭相役勤候儀川上将監同時之由、川上式部方より之書付ニ相見得候、左衛門殿方江相尋候得者、三門右衛門御役被仰付候儀無之候由、式部殿方より之任書付書載候事、

島津三郎右衛門忠朝

寛文八十月より、延宝二刁年より御家老、

島津中務久輝

寛文之比、

伊集院十右衛門久朝

年号不知、貞享二九月より御詰役兼、

島津左衛門忠興

延宝四九月より、同五年二月より御詰役、

北郷宗次郎忠昭

延宝五四月より天和三二月迄、

島津豊前久邦

天和元九月より同三年十二月迄、

桂太郎兵衛久澄

天和二十一月より貞享元七月迄、寺社奉行兼役、元録八二月より二度横目頭、天和二八月より御詰役、

島津主計久年
後帯刀

貞享二三月より元録三年三月迄、同十二三月再役、宝永四年九月より若御年寄、

肝屬左門兼柄
後主殿

元録十二三月より、宝永二十月より若御年寄、

種子嶋弾正伊時

元録十四九月より宝永二十月迄、

入來院主馬重矩

承應三年之比より、

入來院石見重頼

寛文六年ノ比より、御談合役兼、

町田源左衛門久盛
後久英

寛文六七月より御談合役、
イニ七年

肝付主殿久兼

寛文十一年二月より、御詰役兼、延享七より御家老、

種子嶋左近久時
後蔵人

寛文十一年二月より、同九年より御詰役、

島津大学忠守

延宝元年比、

川上将監久将

延宝五三月より、御詰役兼、天和二十一月迄、貞享五三月より寄役、同年九月御免、

新納近江久辰

延宝六年之頃、

椛山權左衛門久清

天和二十一月より、御詰役兼、貞享四八月迄、

伊勢兵部貞顕
初又兵衛

天和二十一月より元録十一十二月迄、御詰役兼、

島津助太夫久文
後内記

貞享五九月より、御詰役兼、元録八正月より御詰役、

新納四郎左衛門久珎
後市正

元録十三正月より、御詰役兼、同十四十月より御家老、

島津大蔵久明

宝永二九月より、同七正月より若御年寄、

桂織部久祐

宝永七正月廿六日より、

鎌田要人政躬

正徳元八月廿一日より、

伊集院十右衛門久矩

正徳五年十月廿一日より、

伊集院織部久冨
初用之助

久守大御目付役被仰付候節家格寄合ニ被仰付、寄合之内御直別無之候ニ付、右京名書之節ハ寄合之頭ニ書記筈諸帳面等可被記置旨、正徳五年未十二月十八日大蔵殿より北郷助大夫を以被仰渡候、享保九年辰正月十一日より御家老、

義岡右京久守

享保七九月廿一日より、同八卯十二月十一日より御家老、

島津大蔵久春
初左仲

享保八十一月十一日より、（イニ十二月）

新納左京久敦

享保九八月九日より、

平田平太左衛門位充

享保十一年二月朔日より、同十六六月六日より若御年寄、

島津市大夫久鼇

享保十九二月二日より、同廿一年正月廿三日より若御年寄、

頴娃左京久周
初長左衛門

享保廿十二月廿二日より、寛保三六月七日より御家老、

島津右平太久郷
後主鈴　久品

宝永二九月より、正徳元八月より若御年寄、

島津内膳久丘

宝永三三月より、同十二月より若御年寄、

島津備前久貫

正徳元卯八月廿一日より大御目付、享保五十一月十二日より御家老、

名越右膳恒渡

正徳二八月十一日より、享保五子五月十二日より若御年寄、

島津彦大夫忠竹
初宇左衛門　後久富

享保二十月十五日御勘定奉行より、同八五月十三日御役内死去、伊作地頭、

菱刈藤馬重之
初孫兵衛

享保三戌二月廿八日より御寄合ニ被仰付、座席嶋津彦大夫次ニ被仰付候、

島津登久置
初十郎左衛門

享保五五月十五日より、同八十二月十一日より若御年寄、八郎大夫事嶋津内蔵弟ト存候而ハ家格之訳モ有之候得共、八郎大夫事平岡之家号被仰付候故由緒家格等モ無之事候ニ付、此節寄合ニ被仰付候条、寄合之場ニ而ハ名越右膳次ニ被仰付候、

平岡八郎大夫之品

享保八卯十二月十一日寺社奉行より、

島津主計久名
初与十郎　後帯刀

享保十一六月廿八日より、元文二五月朔日より若御年寄、家格寄合ニ被仰付、家筋連名之次第平岡内匠次、本ハ寄合并、

北条織部時成

元文二十一月十一日より、寛保三年イニ元
西十一月六日御役御免、
山田新助有従

元文六二月十五日より、同日寄合
ニ被仰付、延享四卯七月廿二日より
御家老、
郷原金大夫久雄
後轉

元文六三月十二日より議御方、寛保
三六月七日御役御免ニ而隠居被仰付、
嫡子平右衛門江家督被仰付候、
鎌田衛衛政興

寛保三六月七日より、延享五正月廿
一日より御家老、
平田新左衛門正輔
初次郎兵衛

延享五正月廿一日より、同日寄合ニ
被仰付、寛延四六月七日若御年寄、
河野八郎左衛門通興

寛延元八月十五日より、宝暦三西七
月十二日より御家老、
新納次郎兵衛久品
後内蔵

寛延二九月朔日より、同日寄合ニ被
仰付、同三十一月十二日より御家老、
市來次郎左衛門政方
後左中

寛延四二月十六日より、家格寄合ニ
被仰付候、
小林左内政一

寶暦二七月朔日より、同四年戌二月
七日御役内死去、
諏訪勘解由邦兼

宝暦五九月九日より、同六年十二月
四日より御家老、
椛山左京久倫

寶暦六十二月四日より、同九卯六月
廿一日より御家老、
菱刈藤馬實詮

寶暦八七月廿八日より、明和二乙酉
七月廿一日より御家老、
島津仲久智

享保十二十二月廿六日、同日寄合ニ
被仰付、席平田平太左衛門次、同廿イニ三日
八月十一日より御家老、
享保廿七月廿五日より、
堀四郎大夫興昌
初甚左衛門

元文二五月朔日より、宝暦五正月十
一日より再役、
伊集院十蔵久達

元文元辰十一月八日、初八御勝手方
添役、元文六正月十一日より、同年
二月十五日御家老、
小笠原郷左衛門長賢

元文六三月十二日より議御方、
鎌田太郎右衛門政置

寛保元十一月六日より、延享五正月
十一日より若御年寄、
相良典禮長次

延享三四月廿五日より、同四七月廿
二日より御家老、
島津弥市郎久富
後矢柄
イニ當

延享四卯七月廿二日より、寛延二巳
八月十四日御役内死去、
鎌田源左衛門政昌

延享五正月十一日より、寛延四閏六
月七日依願御免、
本田作左衛門由親

寛延元六月七日より、同二巳九月朔
日より御家老、
山岡齋宮久柄
隠居名角郎

寛延二九月朔日より、御勝手方添役、
寶暦八七月廿八日より若御年寄、
義岡左平太久中
後弾正

川田与右衛門國福
後伊織

寶暦十六月四日より、明和二九月廿八日より若御年寄、

明和二九月廿八日より、安永二巳五月十五日より若御年寄、

明和六十二月朔日より、同八八月廿八日より御家老、

明和七刁七月廿六日格、安永二巳五月十五日大御目付、安永四未七月廿八日御家老、

安永二五月廿八日、同九子十月十一日若御年寄、御番頭より、

安永七戌正月十一日寺社奉行より、御勝手方添役、天明二刁正月十五日御家老、

木工久峰子、安永八亥十二月朔日寺社奉行より、同九子六月十一日若御年寄、

天明元丑閏五月十五日大御番頭より、御役料三百石、実末川織衛弟、

天明二刁二月朔日御側御用人より、

天明二刁正月十五日大御番頭より御役替、以前當御役ニ而子細有之御役御免ニ而、以後又〻當御役、

天明五巳正月十八日大御番頭より、

河野八郎左衛門通古
初安之右衛門　後外記

島津大進久起
初十太右衛門

山岡齋宮久澄
後市正

赤松造酒則正
初甚右衛門

伊勢兵部貞矩
後伊豆　播广

宮之原甚五大夫通直
後主膳

島津木工久邦
初佐多矢之助

川上久馬久致

川上頼母久品

名越左源太時央
始恒篤　後右膳

赤松造酒則方
初新之丞

寛延四閏六月七日より、寶暦五亥十一月七日より御家老、

寶暦三七月十一日より、同五六月八日より御家老、

椛山久倫同日より、寶暦十辰七月六日御家老、

寶暦七十月朔日より、明和二七月廿一日再役、同四亥四月十三日御家老、

寶暦九六月廿一日より、同十四申二月廿一日御役御免、（ママ）天明元申五月十五日又〻大番頭被仰付候、

明和二酉九月廿八日より、同六十二月朔日より若御年寄、

寶暦十四六月十五日より、明和六丑十二月朔日より御家老、

明和六丑十二月十八日より、安永六酉十二月十二日依願御免、

安永五申十月十一日より御家老、明和七刁七月廿六日格、安永二巳五月十五日當御役被仰付候、

明和八卯二月廿五日御側御用人より、天明二刁三月一日依病御役御断御免、

高橋縫殿種壽
初七郎右衛門　後此面

伊集院十蔵久東
後織部

鎌田隼人正芳
後蔵人

桂織部久中
初太郎兵衛

名越左源太恒篤
後時央

新納波門久侶
初四郎

喜入主馬久福

島津矢柄久籌

二階堂主計行旦

新納内蔵久儔
初次郎四郎

天明四辰十二月十五日より、寺社奉行御側御用人勤より、大御番頭格、代〻寄合家筋ニ被仰付候、　関山糺金暉　初軍兵衛

嶋津備前貴儔人道静山二男、初而立二男家、実嫡子也、安永八亥十二月朔日寺社奉行より、天明元丑閏五月十五日若御年寄ニ御役替、天明六丙午五月十三日御役御免、　末川織衛久救

天明七未四月當番頭より御役替、　二階堂部行充

寛政三年辛亥三月廿一日大番頭より大御目附ニ御役替、席二階堂行充次、職田貳百石、　頴娃左京久喬

安永七戌六月朔日表御用人より、天明二己正月十五日若御年寄、　菱刈孫兵衛實興　後大炊　實祐

天明三十月廿八日大御目付役寺社奉行より、同七年死去、　町田監物久隅　初郷九郎　主計　久張　久連

寛政元己酉十一月朔日より、同二年庚戌五月依願名称安房、同三年亥三月廿一日補若御年寄、　喜入右衛門久量

『△』御使役、後御用人　私記旧名申口役、御使役トモ云、

元龜四年弐月廿一日伊集院右衛門兵衛尉久治・上原長門守常尚・市來民部大輔家諸・新納形(刑)部大輔忠元・喜入攝津介季久・伊集院右衛門大夫忠兼・本田民部左衛門尉忠親・河野備前守清通

右八人使衆誓紙小松家笥蔵、

忠治公御代、　二階堂左馬介　上同、　本田治部左衛門尉

伊集院大和守忠朗子、　伊集院掃部介忠倉　忠倉子、後右衛門大夫、入道幸侃、　伊集院掃部介忠金

後山城守、入道嘉辰、　本田弾正忠親歳　後御家老、　鎌田出雲守政近

後源左衛門尉、天正十一癸未七月八日死去、七十歳、　鎌田尾張守政年　父大炊介、　猿渡大炊介入道休覚

「刑部少輔親知子、　本田因幡守親治　「後出羽守、御家老、　町田伊賀守久倍
「後伊勢守、御家老、　上井神左衛門尉覚兼　「後入道拙齋、　新納武蔵守忠元
「後治部少輔、　本田若狭守親豊　「後下野守、入道抱節、　伊集院右衛門兵衛久治
「半右衛門、高弐千七百五十五石四斗、　伊集院半右衛門久元　」　阿多掃部介忠明
「後肥前守、入道元巣、　伊集院源助久春　「后御家老、　村田右衛門尉經平
「初勘解由左衛門、　伊地知伯耆守重秀　「白濱周防守二男也、　白濱周防守重政
「后入道三省、　本田下野守親貞　」　伊地知雅楽介
「后紀伊守、　比志嶋宮内少輔國貞　「後御家老、　上原長門守尚近（尚常トモ）
「尾張守政年子、　鎌田形（刑）部左衛門尉政廣　「右同、三河守、　本田形（刑）部少輔正親
「後越前守、入道理安、　山田新助有信　初新介、後入道休心、　税所越前守篤和（イニ重）
「小右衛門時興五代之祖、　新納縫殿介久時　「后五郎右衛門、入道遊甫、　新納右衛門佐久饒
「后御家老、　伊勢兵部少輔貞昌　「后相良新右衛門、或ハ長泰、　稲留新助長辰
「右同、　平田太郎左衛門尉増宗　」　猿渡勘左衛門信元

入道秋扇、　宮原左近将監景晴

龍伯様御代高帳ニ御使衆ト有、　猿渡新助信商

后御家老、　山田民部少輔有栄

税所弥右衛門

后入道有閑齋、　柏原周防守公盛

后御家老、　三原諸右衛門尉重種

右同、　新納右衛門佐久詮

右同、　町田勘解由久則

新納加賀守忠清

寛永十年酉四月八日大興寺文書ニ佐多越後守・北条土佐守ト有之、　佐多越後守忠増

初川東、後ニ又号最上、　北条土佐守義時

承應二巳年より、　喜入休右衛門久供

相良主税長廣

三河守經孝四代之孫、　村田雅楽介經宣

后御家老、　鎌田出雲守政統

右同、初掃部助、　比志嶋宮内少輔國隆

宮原伊賀入道・五代右京・新納杢右衛門入道一甫、右三人惟新様御使衆と相見得候へ共、此記ニ不相見得候、仍爰ニ記置之、

后御家老、　川上左近将監久國

右同、　三原左衛門佐重饒

平田狩野介宗弘

初掃部介、　市來八左衛門家友

才右衛門之真四代之祖、大右衛門、　野村大学介之綱（イニ元）

三河守親秋四代之孫、諏方市右衛門先祖、　上井市正兼道

后御家老、　頴娃長左衛門久政

初別府小吉、信濃守景親、後頼尊、
仁礼蔵人頼景
龍伯様御代高帳ニ御使衆ト有、
相良勘解由頼豊

平野丹後友治子、
平野丹後入道政友
初左近将監頼安、
仁礼主計頼充（イニ亮）

后御家老、
鎌田源左衛門政有
壱岐政實四代之孫、
鎌田左京政喬

川上七郎左衛門親芳六代之祖、
川上又左衛門忠通
正保元年為御使役、後御家老、
諏訪杢右衛門兼利

相良杢助長信
一万田太郎兵衛尉景直より十二代之孫也、此方江参候ハ高崎播广守能宗入道有閑齋也、
高崎伊豆能乗

鎌田太郎右衛門政栄
仁礼覚左衛門景治

子孫加治木ニ有之、
新納仲左衛門忠雄
後采女、
五代勝左衛門友喜

元和二年御条書ニ有、
新納雅楽介
丹波守久憲子也、
喜入五郎兵衛久治

縫殿久時之孫也、
新納縫殿久宗
猪右衛門俊村三代之祖、
伊集院猪右衛門忠饒

五郎行綱二十二代之孫、
大山伊豫介廣綱
后御家老、
平田新左衛門宗正

本田六左衛門親武
比志嶋主膳國治

相良權兵衛頼貞（イニ員）
始仁右衛門、
伊東肥後祐昌

承應元辰三月五日より、
平田藤右衛門宗則
村尾三右衛門

右同年同月同日より、雅楽介經宣四代之孫、
村田藤兵衛經固　二階堂安房介

初城之助、
伊東三左衛門祐玄　相良土佐頼元

初惣右衛門、伊豆能乗子、
二階堂与右衛門信行　比志嶋彦右衛門義時

高崎伊豆能延　相良杢之助長貞

三雲氏江戸居付、
伊東次郎右衛門祐之　承應元三月五日より、　堀四郎左衛門興延

三雲太郎左衛門定直　相良主税長清

三河守親秋六代之孫、
諏訪采女兼延　江戸居付、　伊勢平右衛門貞壽

萬治三年十月十八日より、初忠金、入道鉄巖、
桂木工之助忠保入道　寛文九酉九月十七日より、宝永二酉九月廿一日御役御免、　平山次郎右衛門忠知

寛文十年より、
喜入次兵衛久甫　鎌田後藤兵衛政方

初權左衛門、左門、種十、
高橋七郎右衛門種周　野津安右衛門鎮政（鎮栄トモ）

伊与廣綱子、初權左衛門、
伊東五右衛門祐位　寛文九年比より、　諏訪仲左衛門兼郷

大山主馬綱通　鎌田太郎右衛門門政高

犬童美作守子孫也、
相良源五左衛門頼安　源左衛門俊増養祖父也、　黒葛原治部忠通

初周防、
渋谷嘉納右衛門重依
初伊右衛門（イニ伊左衛門）、
村田善大夫經智

初四郎兵衛、
高崎權大夫能冬
中神石見頼周より四代、与五左衛門養父、天和二十二月より、
中神内蔵之丞頼安（イニ貞）

平田清右衛門純音
鉄心、又廣貞共、
野村太左衛門廣貫

福屋助左衛門兼貞
福屋・野村・仁礼・中原同日より、
中原伊兵衛尚昭

仁礼覚左衛門景代（景治共）
仁礼与三左衛門景林

江戸居付、
名越主水時品
后要人、与頭惣役、正徳三年三月晦日要人卜改名、訳有徳嶋遠流、
猿渡喜右衛門信安

悪四郎久顕十代之孫、
新納喜右衛門久盛
上井五郎左衛門朗喜

后政芬、正徳三年与頭兼役寺社奉行、
市來次郎左衛門家賢
冨山九右衛門義明

与頭兼、后勘定奉行、大御目付、御家老、
堀四郎大夫興昌
初新之丞、
赤松次郎右衛門則春

伊地知八右衛門重堅
川村少左衛門秀尊

自忠綱六代、七郎大夫久矩養子、
久明——久矩（隼人）——久兵（十郎大夫）——久冨（多宮）
大野隼人久明
后忠以、伊与久順九代、源左衛門俊増養父、
黒葛原源左衛門忠雄

主馬綱通子、
大山權左衛門綱定
宝永二酉九月廿一日御免、
新納小右衛門久喜

「后權大夫、」相良主左衛門長規　「宝永二酉九月廿一日御免、」村田平右衛門經寧

「元録十四年より、后親村、式部少輔辰久七代之孫、」川上八郎左衛門久清　「后清右衛門賢道、」平田九郎右衛門純旨

「初次郎左衛門、」諏訪市右衛門兼秩　「宝永二酉九月廿一日御免、」家持平八住賢

「宝永二酉九月廿一日御免、」鎌田傳兵衛政真　「后八右衛門俊方、宝永二酉九月廿一日御役被仰付候、」町田孫七忠白

「享保六丑十月九日後御番頭(ママ)ニ而御用人兼、享保十三申二月二日御役御免、」三雲新兵衛定恒　「宝永二酉九月廿一日御免、后十郎大夫、」向井市之丞友貞

「宝永二酉九月廿一日御免、后長英、」相良清兵衛頼庸　「后勘定奉行、」蒲生十郎兵衛清賢

「后孫左衛門、」最上右近義隅　「比志嶋家養子、改隼人範房、后御家老、」米良藤右衛門重年

「宝永三より、同六より御側、正徳元より寺社奉行、后大御目付、后織部、」伊集院用之助久冨　菱刈新五兵衛重格

「入道休得、御側、」弟子丸与次右衛門宗武　「宝永五八月より、与頭兼役、」仁礼仲右衛門頼常

「寶永五年比御側、」市來勘左衛門家貫　「后彦大夫久冨、正徳二年大御目付、若御年寄、三郎左衛門忠朝之二男清大夫久近長子、」島津宇左衛門忠竹

「中務久輝子也、宝永六より、正徳二より御側、后大御目付、后登、」島津十郎左衛門久置　「入道梅翁、御側、」伊勢八右衛門貞庸

「御下屋敷御方、宝永七三月三日より正徳三正月十三日迄、」鎌田十左衛門政常　「御下屋敷御方、享保七八月十一日迄、后源之丞、」山田四郎兵衛有壽

宝永七閏八月十日より享保十九八月廿六日迄、后御勘定奉行、
谷山角大夫忠昶 後純房

后増武、享保十三正月廿一日迄、
中神与五左衛門頼庸

正徳二五月三日より同三年五月廿一日迄、
上村茂兵衛政興

正徳二巳（ママ）八月三日迄、后右京、御家老、
義岡左平太久守

初甚五大夫、実江田五兵衛國重三男、正徳五十二月廿六日より、享保十四正月十一日御勘定奉行、后通貫、
宮之原甚大夫重行

后内匠、大御目付、若御年寄、御家老、
平岡八郎大夫之品

后左京、内膳、御側、大御目付、若御年寄、后御家老、
頴娃長左衛門久周

享保五子（イニ五）正月十五日より、
村田九郎左衛門經武

初廣瀬家号、宝永七三月九日改和田、御勝手方、
和田次兵衛助寅

隅州様御方、
伊地知越右衛門重澄

隅州様御方、享保十三申九月迄、入道嘉翁、
相良仁右衛門聰香

享保十九刁正月十一日迄、后寺社奉行、大御目付、
伊集院十蔵久達

正徳三五月朔日より、后助大夫久弘、
北郷八右衛門（石衛門八カ）久治

正徳三八月廿八日より、后寺社奉行、大御目付、若御年寄、御家老、後北条織部、
種子嶋十左衛門時成

后太郎右衛門政直、正徳五九月九日より、与頭兼、享保廿卯八月十五日迄、後御家老、
鎌田六郎大夫政置

正徳元八月廿二日御役御免、
若松十左衛門久鑑

初權左衛門久賢、正徳六申二月一日より吳國方、
椛山主計久初

享保三戌四月十六日より、同十二巳（ママ）十二月廿一日御役御免、
高橋七郎右衛門種房

初武右衛門、民部、種辰、御勝手方、享保十九刁二月二日迄、御勘定奉行、
高橋外記種長

享保三戌七月五日より、
讃良善助貞伴

享保十五戌七月迄、御側方、后御隠居方、
山口五大夫利信（イニ倍）

礒御方、享保六丑正月十一日より同十四二月十四日迄、
伊集院權右衛門久盛 后盛央

享保八卯十二月十五日より、後十右衛門、
土持權兵衛信秋

享保九辰三月朔日より、
左近允与大夫尚方

享保九辰三月朔日より同十六亥五月廿一日迄、

尾上甚五左衛門信茂

享保八卯四月廿八日迄、

篠崎八右衛門

享保十一午正月十一日より、

諏訪仲右衛門兼品

享保十二未四月十八日より、同十九より御側、御近習役兼、御守殿方公義御用、元文三午六月廿五日より御勝手方、

木脇嘉左衛門祐盛

本名大野、宝永六山沢ト名字拝領、享保十三申十月十八日より、御近習役兼、同十四酉十月廿八日より御守殿方、同十六十月二日御役御免、宝暦五九月九日より御下屋敷御方、

山沢十大夫盛香

初平右衛門、御隠居方、享保十五戌七月廿一日より、寛保元酉三月十二日より大御目付、

鎌田衛衛政興

享保十六亥六月廿一日より、

中野駒右衛門利清

享保十七子正月十一日より、延享三刁於江戸大御目付、後御家老、元文四未八月廿一日より御側方、

鎌田源左衛門政昌（スケ）

後仲、御隠居方、享保十七九月六日より、元文二四月廿七日より若御年寄、

島津權左衛門久道

享保十一午七月四日より同十二未七月五日迄、御近習役兼、

福山平大夫安村

享保十一午七月十日より、同廿卯十二月廿二日大御目付、后御家老、

米良藤右衛門重賢
后則般

享保十一午八月五日より、元文五申正月十八日より御側、延享五辰七月廿一日より御勘定奉行、

島津右平太久品
后主鈴

享保十三申三月十五日より、御近習役兼、同廿卯八月九日御役御免、為大番、

西彦太郎純孚（サネ）

享保十四酉十月廿八日より御守殿方、元文二巳五月朔日より大御目付、

町田八左衛門俊昌

隅州様御方若御年寄、御用筋御家老職同前、寛延四未閏六月七日ニ被仰付候、享保十四酉十一月十二日より、御近習役兼、后大御目付、若御年寄、

小笠原彦八郎長賢

后十郎大夫、享保十三之比より御勝手方、同十六四月廿六日より御側、御近習役兼、享保廿一年辰正月十二日御免、

河野八郎左衛門通興

后典礼、御隠居方、享保六七年ノ比より、后大御目付、

向井四郎右衛門友栄

相良源太夫長以

元文元辰七月朔日より御側、後大御目付、
平田平太左衛門位充

初弥市郎、同日より、元文二十一月十一日より大御目付、イニ享保十九正月十一日より、
山田新助有従

后矢柄久冨、享保十九刁正月十一日より、后大御目付、若御年寄、御家老、
島津弥市郎久純

后（宮脱カ）齋久柄、享保十九刁八月廿六日より、元文三午六月廿五日より御側、后大目付、
山岡權太左衛門久房

享保廿卯八月十五日より、其先江戸浪人也、
戸田平次盛紹

享保廿卯十二月五日より御勝手方、延享四卯七月廿二日より御勘定奉行、
大野清右衛門清賢（イニ堅）

元文二巳四月廿七日より御側、延享元子五月一日より表方、寛延二御勘定奉行、
有川幸右衛門貞利

后平左衛門、元文二七月十一日より、后御勝手方、宝暦四戌四月十一日依願御免、
肥後平右衛門盛房

后新左衛門、元文四未正月十一日より、寛保三亥六月七日大御目付、御家老、
平田次郎兵衛正輔

后弾正、元文五年申正月十一日より、后大御目付、
義岡左平太久中

享保十六四月十一日より、又元文元七月朔日より御側、
小林仲太兵衛政一

元文元辰七月一日より、
森川理右衛門武宣

后左中、享保十九刁九月廿六日より御勝手方、同廿一正月十一日より御側方、公義方、御守殿方、御近習役兼、后大御目付、御家老、
市來次郎左衛門政方

享保廿卯十月十一日より礒御方、元文元辰十一月廿五日依願御免、
名越左源太恒素（モト）

享保廿一辰正月十一日より御勝手方、后大御目付、御家老、
郷原金大夫久雄

元文三六月廿五日より、宝暦四戌十月七日依願御免、
蒲生十郎左衛門清高

元文二巳六月六日より御側、其以後依病氣御役御断、
木村四郎左衛門時央

元文三午十一月十一日御側、同四未十二月九日依願御免、寛保三刁九月死去、（ママ）
尾上甚五左衛門信房

元文五申十一月一日より、寛延四未閏六月七日依願御免、
伊地知千左衛門季伴

礒御方、寛保元酉三月十一日より、
米良藤右衛門則倜（スケ）

〔后久連、儀御方、寛保元酉三月十一日より、延享四卯十二月廿二日依願御免、〕
島津登久亮（アキラ）

〔后伊織、寛保元酉十一月六日より、延享二丑正月十一日御勘定奉行、後大御目付、若御年寄、〕
川田与右衛門國福

〔后文大夫、寛保三亥六月四日より、寛延元八月十五日御側、同四未九月十一日より御勘定奉行、〕
三崎平太久迢

〔延享元十一月廿一日より、宝暦六子七月廿一日依願御役御免、〕
戸田傳五郎盛庸

〔儀御方、寛保四卯（ママ）四月廿一日より、延享四十二月廿六日依願御免、宝暦七正月十一日より表再任、〕
相良源大夫長儀

〔寛保四三月廿一日より、寛延四未正月廿八日寺社奉行、〕
宮之原甚五兵衛通興
初重治

〔延享五三月廿一日より、宝暦十一巳（イ二七月廿一日より）十二月一日依願御免、〕
基太村助左衛門尚香

〔延享五辰七月廿一日より、后此面種寿、寛延四未六月七日大御目付、后御家老、〕
高橋七郎右衛門種敏

〔后十蔵、織部、寛延元辰八月廿七日より、大御目付、后御家老、〕
伊集院十左衛門久東

〔后藤馬、左近同日より、寛延元辰八月廿七日御番頭、御用人兼、同二六月七日より御側、宝暦六子正月寺社奉行、大御目付、〕
菱刈孫兵衛實詮

〔后作左衛門、寛保元酉三月十一日より、同年十一月寺社奉行、大御目付、〕
本田信次郎由親

〔延享元子五月朔日より、寛延二寺社奉行、〕
島津十太右衛門久命

〔延享四七月十一日より、宝暦二申七月十九日退役、〕
川上瀬兵衛親興

〔延享二正月十一日より、寛延二巳十月十三日御側、〕
北郷助大夫久儔

〔寛保四卯（ママ）正月十一日より、后御側、后大御目付、御家老、〕
新納次郎兵衛久品
後内蔵

〔后久米右衛門親芳、延享四七月七日より、同五辰二月廿一日より御側、宝暦十一月廿五日御勘定奉行、〕
本田孫右衛門親房

〔延享五六月十六日より御勝手方、寛延二巳十一月廿九日被召込遠嶋、〕
皆吉九平太續安

〔后将監、寛延元辰八月廿七日より、同二若御年寄、〕
島津左近久起

〔隅州様御方、寛延二九月朔日より御側御近習役、寶暦十一七月廿八日依願御免、〕
関山軍兵衛金麻

〔寛延二巳九月一日御用人格、同三午七月廿一日より御側方、宝暦七丑四月五日於江戸死去、〕
二階堂林左衛門行通

「后勘解由、寛延二巳六月七日より、同三午六月二日御側、宝暦二申七月朔日大御目付、」	諏訪次郎左衛門邦兼
「后仲、寛延二巳十月十三日より、宝暦六子十二月四日寺社奉行、后大御目付、御家老、」（イニ十一）	島津權左衛門久智
「寛延三午十一月十二日より、宝暦二七月九日依願御免、」	北郷八右衛門資矩
「寛延四未六月朔日より、后大御目付、宝暦四戌十月十五日より、同八刁七月廿八日寺社奉行、后大御目付、」	名越左源太恒篤
「寛延四未六月朔日より御勝手方、后寺社奉行、」（イニ七日）	川上弥五大夫久福
「后主計、監物、久連、久隅、宝暦二申二月十一日より、後寺社奉行、」	町田郷九郎久張
「宝暦二八月十五日より、同五亥九月九日大御目付、后御家老、」	椛山左京久倫
「宝暦三酉七月御側、后大御目付、若御年寄、后八郎左衛門、外記、」	河野安之右衛門通古
「后甚五大夫、主膳、宝暦三酉七月より、后寺社奉行、大御目付、御家老、」	宮之原宇右衛門通直
「寛延元十二月廿一日より御側、宝暦八より御下屋敷、明和二酉八月廿三日御勘定奉行、」	財部孫之丞盛興
「宝暦六子七月廿一日より、同九卯八月九日御役内死去、」	中馬源兵衛諸香
「寛延四未正月廿八日より御側方、」	渋谷喜三左衛門貫通
「寛延四未閏六月一日より、明和二酉七月十八日依願御免、」	堀堀右衛門貞矩（イニ紀）
「宝暦二申正月十一日より、明和三戌九月廿八日より御勘定奉行、」	福山平大夫安都
「宝暦二申二月十一日より、同七丑正月十一日より御側、」	諏訪甚兵衛兼方
「右同年八月十五日より、」	堀甚左衛門興貞
「后織部、宝暦三酉七月より、同七丑十月一日大御目付、后御家老、」	桂太郎兵衛久中
「寛延元辰九月廿二日より、」	相良弥一兵衛長主
「宝暦六七月廿一日より御勝手方、后御勘定奉行、」	小林中太兵衛政央
「宝暦七丑正月十一日より、后若御年寄、御家老、后左中、」	島津小平太久金
「宝暦七正月十一日再役、」	相良源大夫長儀
「宝暦八刁正月十一日より、明和元申八月廿一日死去、」	三原源五左衛門經居

宝暦七丑正月十一日より御下屋敷御方、同十一巳七月廿一日依願御免、

石黒戸後左衛門茂矩

伊織國福養子、宝暦七丑正月十一日より、

川田彦七國起

宝暦七十月十八日より、后大御目付、御家老、

喜入主馬久福

后造酒、宝暦八刁七月廿八日より、后大御目付、御家老、

赤松甚右衛門則正

宝暦十辰三月九日御用人格、同十二午六月十五日より表、同十三二月十八日より御勝手方、明和六丑十二月十五日より御側、

岩下佐次右衛門方峯

宝暦十辰六月一日五番与頭より、御用人兼、明和二酉三月廿七日依願御免、

町田源左衛門久亮

宝暦十二正月十一日より御側、后寺社奉行、

伊地知新大夫季周

宝暦十一八月廿五日御下屋敷御側御用人依願御免、同年十一月朔日より御勝手方、同十二酉二月廿一日御役内死去、（ママ）

山田元右衛門有隆

宝暦十三未七月廿一日御側方、后大御目付、明和六丑十二月十七日迄、

島津矢柄久籌

后主計、明和二七月廿一日より御側、御近習役兼、大御目付、后御家老、

二階堂部行旦

右同年九月七日より御側、同十巳七月十九日表、同十三酉十一月十九日御勝手方、（ママ）

迫水善左衛門久芳

后市正、宝暦十辰八月十五日より、同十三七月六日より御側、后大御目付、御家老、

山岡齋宮久澄

宝暦十辰三月九日より御側、后御勘定奉行、

二階堂源大夫行端

宝暦十一十二月十一日より御側方、后御勘定奉行、

仁礼仲右衛門仲古

后九右衛門、宝暦十二午八月十八日より格、明和六丑十二月十五日より御側、安永二正月十一日より表、同五申十一月廿五日死去、

佐久間源大夫盛邦

宝暦十三七月廿八日より、明和二七月十八日依願御免、

木脇伊左衛門祐純

后軍兵衛金暉、明和二七月廿一日より御側、御近習役兼、后御番頭兼、安永九子二月廿八日寺社奉行、后御家老、

関山新左衛門金郷

宝暦十四七月廿一日より、明和四七月五日於江戸死去、

伊集院伊膳久郷

明和四十月十五日より、

中村与大夫種曉

谷山角大夫純庸

明和六丑十二月一日より、

比志嶋要人範章

後内蔵、宝暦十四正月十一日より、明和四九月廿八日より御側、同八卯二月廿五日大御目付、

新納次郎四郎久儔

初權大夫、后隼人、掃部、明和二八月十一日より、后御勝手方、天明二刁二月六日御番頭、勤方本之通、寛政三年亥三月任御勘定奉行、

大野多宮久富

明和五二月廿七日より、后御側方、

村橋左膳久昌

后相馬、主税、右近、明和六十二月朔日より表、安永九子七月廿八日大御番頭、

小松仙十郎清行

后大炊実祐、小松清行同日より表、安永七戌六月朔日大御目付、

菱刈孫兵衛實興

宝暦十二午正月十一日より、明和六六月一日より御側、安永四未三月廿八日御番頭兼、同八亥十月十五日寺社奉行、勤方御側、

島津登久連

明和八九月廿八日より表、后御勝手方、物頭より、

小笠原郷左衛門長舊

安永二七月六日より表、天明六午閏十月廿一日より御番頭へ御役替、后左京、

頴娃波江久喬

明和六於江戸物頭より御側、后御番頭、后恰之助、

西平太純房

御側、后御番頭、明和六丑十二月十五日より御用人、安永三午七月廿一日御番頭御側、

藤野休右衛門良記

明和八卯九月廿八日より表、安永九子七月廿八日寺社奉行、

鎌田典膳政為

明和九辰十一月十三日町奉行より表御用人、

種子嶋十郎大夫時方

初權太左衛門、后右京、雅楽、安永三二月廿一日より御側如前、同九子七月廿八日大御番頭、

山岡齋宮久容

后造酒、安永三七月十一日より御側、前表、同八亥十二月朔日御番頭へ御役替、勤方本之通、

赤松新之丞則方

初桂馬、安永三八月廿三日より御側役、同四十二月十五日御番頭、勤方本之通、寛政二年八月廿四日死去、

村上静馬範村

初彦八、安永五八月廿三日より御側、御近習役兼、天明二刁正月十五日御役御免、寛政三年亥三月三日補寺社奉行、

山田司明遠

初種照、安永六七月六日より表、同九子七月廿八日寺社奉行、

高橋縫殿種央

安永二正月廿七日より御側御用人格、同九子二月廿一日御側、同十丑二月廿四日死、

佐久間九十九村央

山岡齋宮同日より、

平田平太左衛門位就

初兼郷、安永二巳十月十八日より表、同三午十一月十一日御役内死去、

伊集院覚左衛門兼丘

安永三五月十五日より御勝手方、同三卯十二月七日死去、（ママ）

横山權右衛門安澄

初龍衛、安永三九月九日より御側、寄合ニ被仰付候、名頼母ト拜領、天明二ヌ二月一日於江戸大御目付、一往勤方本之通、

川上頼母久品

安永六正月十一日より表御用人格、天明元丑十一月十五日表御用人、同三卯三月廿八日御側、同四辰御番頭、

有川勇馬貞厚

后矢柄、安永七正月十一日より表、物頭より、

島津弥一郎久宅

勘解由同日より、物頭より御役替、

町田幸太郎實裕（ヒロ）

部同日より、勤方等同シ、天明二ヌ於江戸寄合ニ被仰付候、市田喜内貞行養子、天明四大御番頭江御役替、

市田勘解由貞央

后政弼、天明五巳正月十八日物頭より、

市來次郎左衛門政為

安永七七月十九日より表、同八十二月四日寺社奉行、同九子七月廿八日大御番頭、

川上久馬久致

初盛大夫、久馬同日より、同御使番より、天明元十一月十五日御側、

大島休左衛門久皐

初權五郎、安永九子正月十一日物頭より、

島津主水久兼

初源六、后式部、主馬、十太右衛門同日より、兼役御番頭より、天明五巳正月十八日より御側、

町田勘解由久輔

久馬同日より、同無役より、天明二ヌ二月九日より御側、同十一月九日死去、

桂木工右衛門久連

久馬同日より、町奉行より、天明四辰十二月十五日より御側、寛政三年亥正月十一日御勘定奉行ニ御役替、

築崎蔵太左衛門仲泰

安永九子七月廿八日御番頭より、兼役、天明六午五月十三日御役御免、

島津十太右衛門久大

安永十丑正月十一日於江戸御近習役御役替、勤方本之通、天明六午十二月廿六日當番頭江御役替、

二階堂部行充

初牧多、天明二ヌ正月十五日御納戸奉行より表御用人、后御勝手方、

鹿嶋邊國富

天明四辰正月十一日より、物頭より、寛政二年庚戌十一月六日御役之内死去、

伊地知嘉右衛門季置

天明五巳正月十一日物頭より、　種子嶋雲治時庸

同年正月十八日物頭より、　北郷助大夫久風

初清右衛門、天明六午六月一日於江戸御側役より御側御用人江、御側役兼、名拝領、　矢野男吏清香

佐次右衛門同日於江戸御側役より御側御用人江、　面高善右衛門俊直

天明六巳（ママ）十二月廿六日町奉行より御側御用人、御側役兼、此以前御役御免ニ而、又〻此節被仰付候、　山田司明遠

天明八年申正月十一日より、　喜入休右衛門誉央

天明八年申正月十一日より、　伊集院隼衛兼當

天明八年申十月廿五日より、寛政元年酉八月十三日御役御免、　石原龍助「近喬」

寛政元己酉十一月朔日より表御用人、同二年庚戌八月廿三日御側御用人ト成ル、　西恰之介純以

寛政元年己酉十一月朔日より表御用人、同三年辛亥三月轉任御勝手方、同月廿一日より大番頭ニ御役替、　新納次郎四郎久邦

寛政二年庚戌八月廿三日より為御側御用人、　村田為左衛門經中

天明四辰四月廿八日御側役より御側御用人江、勤方本之通、　鎌田愛大夫政詮

天明五巳三月於江戸御側役より表江、　岸喜右衛門章雄

天明六午十二月十三日於江戸御側役より御役替、御側役兼、同八年申十月廿五日より、　岩下佐次右衛門方恭

佐次右衛門同日より於江戸御納戸奉行より御側御用人江、天明八年申十月廿五日より御勝手方、　松崎次左衛門貞儔（トモ）

佐次右衛門同日より於江戸御留守居より御側御用人格へ御役替、勤方本之通、　渋谷五郎右衛門

寛政元己酉十一月朔日より御側御用人、　北郷八右衛門資甫

寛政元酉十一月朔日より御側御用人、　山田弥九郎有貞

寛政元年酉四月十二日於大坂御用人、　伊集院弥平左衛門俊常

寛政元年己酉十一月朔日より表御用人、　堀四郎大夫興長

寛政二年庚戌三月廿八日より表御用人、　伊集院四郎俊興

寛政三年辛亥三月三日より、　島津九十九久美

〔寛政三辛亥三月三日より、

迫水善左衛門久具

寛政三年辛亥十月廿二日御側御用人、

大重五郎左衛門

〔寛政三年辛亥三月三日より、

梅田九左衛門盛香

寛政四年壬子正月為御側御用人、

本城源七郎「輝承」

（〕ハ朱書ナリ）

御役人帳

（表紙）

御役人帳

御役人小役人御賦方并勤方大概

目録

一御談合役・御詰役・若年寄
一大御目附
一御勘定奉行
一御用人
一御兵具奉行
一諸御役人・小役人御賦方并勤方大概

1 御談合役・御詰役・若年寄・横目頭・大御目附御役等之人数覺寫

御談合役・御詰役・若年寄

越前有信嫡子
『家久公御代』　山田民部少輔有栄

右、寛永十二年之比御家（ハリ紙）「本ノマヽ」座御詰役、

備中重種嫡子
『右同』　三原左衛門重饒
後重庸

右、同比御詰役、

蔵人政富嫡子
『右同』　鎌田出雲守政統

右、同比御詰役、

出雲政統後嗣
『光久公御代』　鎌田筑後正信
後蔵人

右、慶安四年五月より明暦二年二月迄御家老座詰、

民部少輔有栄嫡子
『光久公御代』　山田民部有隆

右、寛文元年秋之比より御談合役、横目頭兼役、

勘解由久則嫡子
『右同』　町田勘解由久昌

右、寛文二年之比御談合役ニて御物座詰、

豊後久賀二男
『右同』　島津清太夫久共
後久元

※

右、寛文三年九月より御詰役、

※（行間）
「寛文四年九月十一日御談合役被仰付候而、同廿一日より評定所へ相詰候、
与力東郷半右衛門被仰付候、同六年六月十四日大口地頭被仰付候、同年
八月七日加判役被仰付、役分地弐千石、改主計、同十三日改帯刀、十一
月十三日御物座」

右衛門佐久詮嫡子
『右同』　新納又左衛門久仁

右、御談合役ニ而御物座詰、年号月日不詳、

圖書久通嫡子
『右同』　島津又五郎久胤
後出雲

右、寛文六年七月十三日より同十二年九月十六日迄御詰役、

伴兵衛兼屋嫡子
『右同』　肝付半三郎兼方

右、同年同日より御詰役、

勘解由久昌嫡子
『右同』　町田源左衛門久盛
後久英

右、同年同日より御詰役、横目頭兼役、

中務久茂嫡子
『右同』　嶋津新八郎久賢

右、寛文七年十一月朔日より御談合役、同八年正月廿三日より
御詰役、

市正忠廣嫡子
『光久公御代』　島津大学忠守

右、寛文九年正月より御詰役、

左近忠時嫡子
『右同』　種子島左近久時
後蔵人

右、寛文九年二月廿二日より御詰役、横目頭兼役、

狩野介宗弘嫡子
『右同』　平田新左衛門宗正

右、寛文九年十月十五日より御談合役、

作左衛門忠精嫡子
『右同』　北郷宗次郎忠昭

右、延寶五年二月三日より御詰役、

三郎左衛門忠朝嫡子
『右同』　嶋津丹波忠興

右、御詰役横目頭兼役ニ被仰付候、年号月日不詳、

近江忠影嫡子
『右同』　新納四郎左衛門久辰
後近江

右、延寶五年三月十九日より御詰役、横目頭兼役、元禄十一年
十一月廿七日御家老座詰御免、

中務久茂三男、
『右同』　新八郎久賢養子
島津助太夫久文
後内記

右、天和二年八月廿一日より御詰役、同年十一月廿七日より横
目頭兼役、

兵部貞昭嫡子
『右同』　伊勢兵部貞顕

右、天和二年八月廿一日より御詰役、十一月廿四日より横目頭
兼役、

帯刀久元嫡子
『従光久公御代
至綱貴公』　嶋津主計久年

右、天和二年八月廿一日より御詰役、同年十一月廿四日横目頭
兼役、貞享四年十二月廿五日御物座詰、

又六久岑後嗣
『光久公御代』　嶋津伊賀久寛

右、貞享元年七月二日より御詰役、同三年七月廿四日迄、
光久公之十男、始而立家、準御二男家、
『綱貴公御代』　嶋津大蔵久明

右、貞享三年閏三月十五日より御詰役、
圖書久竹嫡子　島津又五郎久雅
『従光久公御代　至綱貴公』　後久英　久洪　下野圖書

右、貞享三年閏三月十五日より元禄十年閏二月十四日迄御詰役、
近江久辰嫡子　新納四郎左衛門久珎
『従光久公御代　至綱貴公』

右、貞享三年閏三月十六日より御詰役、横目頭兼役、元禄八年正月廿五日より御國遣座御詰役、
又左衛門久仁養子　新納五郎右衛門久仲
『光久公御代』　後民部

右、同年同日より御詰役、
十右衛門忠朗二男　伊集院越中久照
『綱貴公御代』　後遠江

右、貞享五年より御詰役、元禄二年より　光久公御隠居方御詰役、
右近重永嫡子　祢寝八郎右衛門清雄
『綱貴公御代』　後孫左衛門

右、元禄元年十二月十六日より同五年十一月九日迄御物座御詰役、
将監久将嫡子　川上式部久重
『綱貴公御代』

右、元禄十二年五月十日より同十四年十月十日迄御國遣座御詰役、
蔵人久時嫡子　種子嶋弾正伊時
『吉貴公御治世』

右、寶永二年十月十日より同七年六月廿八日迄若年寄御役、
中務久輝養子　島津備前久貫
『吉貴公御治世』

右、寶永三年十二月三日より同七年四月十四日迄若年寄御役、
主殿久兼嫡子　肝付主殿兼柄
『右同』

右、寶永四年九月十一日より同六年十一月十三日若年寄御役、
太郎兵衛忠澄養子　桂織部久祐
『吉貴公御治世』

右、寶永七年正月廿二日より正徳元年六月廿七日迄若年寄御役、
豊前久邦養子　嶋津内膳久兵
『右同』

右、正徳元年八月廿一日より若年寄御役、
孫太郎義頼後嗣　比志嶋隼人範房
『右同』

右、同年同日より若年寄御役、

横目頭并大御目附

中務忠栄養子　嶋津安藝久雄
『光久公御代』

右、御役被仰付候年号月日不詳、
長壽院（盛脱カ）淳嫡子　阿多内膳忠栄
『右同』

右、年号月日不詳、
勘解由久則嫡子
『右同』　町田勘解由久昌
右、御役被仰付年号月日不詳、
右衛門佐久詮嫡子
『右同』　新納又左衛門久仁
右、御役被仰付候年号月日不詳、
又六重通嫡子
『光久公御代』　入來院石見重頼
右、承應三年之比、
勘解由久昌嫡子
『右同』　町田源左衛門久盛
後久英
右、寛文六年之比、
伴兵衛兼屋嫡子
『右同』　肝屬半三郎兼方
右、寛文七年二月より、
安藝久雄嫡子
『右同』　嶋津中務久輝
右、寛文八年十月四日より延寶二年迄、
左近忠時嫡子
『右同』　種子嶋左近久時
後蔵人
右、寛文十一年二月より延寶七年四月九日迄、
遠江久族養子
『右同』　伊集院十右衛門久朝
右、寛文年間之比、
市正忠廣嫡子
『右同』　島津大學忠守

右、寛文十一年二月より、
三郎右衛門忠朝嫡子
『右同』　島津丹波忠興
右、御役被仰付候年号月日不相知、貞享二年九月迄、
因幡久國嫡子
『光久公御代』　川上将監久将
右、延寶元年之比、
作左衛門忠精嫡子
『右同』　北郷宗次郎忠昭
右、延寶四年九月廿日より、
近江忠影嫡子
『右同』　新納四郎左衛門久辰
後近江
右、延寶五年三月十九日より天和二年十一月廿七日迄、貞享五年三月八日寄御役被仰付、同年九月廿三日御免、
豊後久賀嫡子
『右同』　嶋津豊前久邦
右、延寶五年四月より、天和三年二月御免、
諸右衛門久廣嫡子
『右同』　樺山權左衛門久清
右、延寶六年之比、
弥三郎忠康養子
『右同』　桂太郎兵衛久澄
右、天和元年九月より同三年十二月廿七日迄、
兵部貞昭嫡子
『從光久公御代
至綱貴公』　伊勢兵部貞顯
右、天和二年十一月廿四日より貞享四年八月十四日迄、

帯刀久元嫡子
『従光久公御代　至綱貴公・吉貴公御治世』　島津主計久年
後帯刀忠雄

右、天和二年十一月廿四日より、貞享元年七月九日より寺社奉行兼役、元禄八年二月廿一日二度横目頭、

新八郎久賢養子
『従光久公御代　至綱貴公』　島津助太夫久文
後内記

右、天和二年十一月廿七日より、元禄十一年十二月十七日御免、

主殿久兼嫡子
『従光久公御代　至綱貴公・吉貴公』　肝付左門兼柄
後帯刀典膳主殿

右、貞享二年三月三日より元禄三年三月三日迄、同十二年三月四日御役再任被仰付、寶永四年九月十日迄、

近江久辰嫡子
『綱貴公御代』　新納四郎左衛門久珎

右、貞享五年九月廿三日より元禄八年正月廿四日迄、

蔵人久時嫡子
『従綱貴公御代　至吉貴公』　種子嶋弾正伊時

右、元禄十二年三月二日より寶永二年十月九日迄、

光久公十男、初而立家、準御二男家、
『綱貴公御代』　島津大蔵久明

右、元禄十三年正月十日より同十四年十月十日迄、

又兵衛規重後嗣
『従綱貴公御代　至吉貴公御治世』　入來院主馬重矩

右、元禄十四年九月廿二日より寶永二年十月廿一日迄、

豊前久邦養子
『吉貴公御治世』　島津内膳久兵

右、寶永二年九月十一日より正徳元年八月廿日迄、

太郎兵衛久澄養子
『右同』　桂宇右衛門久祐
後織部

右、寶永二年九月廿一日より同七年正月廿一日迄、

中務久輝養子
『右同』　島津備前久貫

右、寶永三年三月十一日より同年十二月二日迄、

惣次郎忠昭養子
『右同』　北郷作左衛門久嘉

右、寶永四年九月廿一日より、

備前久達嫡子
『右同』　佐多内記久武
後李

右、寶永五年三月六日より、正徳元年九月十五日嶋津之御称号拝領、

孫太郎義頼後嗣
『右同』　比志嶋隼人範房

右、寶永六年五月廿三日より大御目附格御側詰、正徳元年八月廿日迄、

源左衛門政恒嫡子
『右同』　鎌田源左衛門政躬
後要人

右、寶永七年正月廿五日より正徳二年八月二日迄、

刑部久弘嫡子
『右同』　伊集院十右衛門忠覚
後蔵人久重

右、正徳元年八月廿一日より、

『右同』　名越右膳恒渡
右、正徳元年八月廿一日より大御目付格御側詰、
三郎右衛門忠朝二男清太夫久近嫡子
『右同』　嶋津彦太夫久富
右、正徳二年八月十一日より、

右者、於當座御役之次第相調可申出旨被仰渡候ニ付、
如此御座候、以上、

御記録所

巳閏五月

『正徳三年』
『寶暦三年癸酉、東都芝邸記録舘而写之、清純』

大番頭　御近習通　安永九年庚子新規御役被相立、寺社奉行格座頭被仰付候、

安永九年庚子七月廿八日寺社奉行ヨリ御役替、天明元丑閏五月十五日大御目附江、　川上久馬久致
久馬同日表御用人ヨリ、天明六年午五月十三日被聞召通赴有之、御役御免ニテ私領江引入、相鎮様被仰付候、　小松主税清行　後右近
久馬同日御側御用人ヨリ、　山岡齊宮（齊カ）久容　後右京　雅楽　市正
天明元丑閏五月十五日無役ヨリ、以前大目附御役御免、又々當役被仰付候、同二寅正月十五日大御目附江、　名越左源太恒篤　後時央　右膳
天明二寅正月十五日御側御用人御番頭兼役より、同五巳正月十八日大御目附江、　赤松造酒則方　初新之丞　後市正
天明四辰、月　日御側御用人ヨリ、勤本之通、同六午十二月十三日御家老江、　市田勘解由貞央
天明五巳正月十八日五番與頭御番頭兼務より、同七未四月十三日若御年寄江、　島津求馬久昶
天明五年巳正月十八日一番与頭御番頭兼ヨリ、依願御免、　北條十左衛門時胤
天明六午閏十月廿一日四番御小姓与番頭當番頭兼ヨリ、寛政元酉　月　日大御目附江、　喜入右衛門久量　後安房
天明六午閏十月廿一日一番与頭表御用人兼務ヨリ、ノチ大目付、　頴娃左京久喬　後信濃
天明七未六月廿八日御小姓与番頭表御用人兼務ヨリ、スチ（ノカ）若年寄、　比志島要人範章
寛政二戌正月十五日御小姓与番頭より、同五年丑五月十九日若御年寄江、　島津左中久美

御勘定奉行

一六年　伊集院左京
一壱年　伊東肥前
一弐年　左衛門重庸之子　三原遠江重時

一弐年　川上将監　一二年　渋谷四郎左衛門
一弐年　新納加賀忠清　一二年　高崎四郎兵衛
一弐年　新納弥七郎久正　後ハ又左衛門ならん、　一三年　相良新助
一四年　喜入舎人　一七年　丹生弥兵衛
一七年　蒲地新助鎮興　一四年　伊東六右衛門
一九年　比志島内記國安　一四年　鎌田次右衛門
一五年　新納四郎左衛門　一一年　相良民部左衛門
一五年　岩切嘉左衛門　一三年　野村大兵衛
一六年　新納縫殿　一一年　村尾源左衛門
一三年　菱刈孫兵衛重敦　一二年　有川弥市郎
一四年　有馬勘左衛門　一五年　村田五郎左衛門
一四年　喜入吉兵衛　一二年　川上五郎右衛門
一四年　平田五右衛門　一二年　伊東刑部左衛門
一一年　相良吉右衛門　一五年　伊地知杢右衛門重倫
一二年　新納仁左衛門　一五年　肝付二郎兵衛
一三年　五代勝左衛門　一二年　上井五郎左衛門
一一年　廣瀬次郎兵衛　一一年　最上伊右衛門　右近義陽欤、
一八年　鎌田後藤兵衛　一二年　大島盛太夫

一三年　甲斐勝左衛門　一五年　川上長左衛門
一七年　志岐藤左衛門　一六年　諏訪次郎左衛門
一七年　東郷十左衛門　一一年　相良十左衛門
一二年　村田平右衛門　一一年　伊東半左衛門
一四年　三原次郎左衛門重儀　五兵衛重英之子欠、　一一年　町田長兵衛
一三年　伊集院長左衛門　一三年　中原甚助
一二年　新納武左衛門　一二年　中江九右衛門
一九年　村田半助　一三年　相良吉右衛門
一二年　新納權左衛門　一十三年　黒葛原主左衛門
一七年　伊集院志賀　一五年　家村平八
一二年　大山平七　一六年　村田喜右衛門
一一年　菱刈權之助　一四年　後醍院杢右衛門
一二年　黒葛原孫太郎　一五年　川上八郎左衛門
一十年　喜入吉兵衛　一四年　美坂太郎右衛門
一二年　町田孫兵衛　一一年　山口甚九郎
一一年　阿多内蔵丞　一十二年　平田九郎右衛門
一八年　中江八右衛門　一二年　中原勘助
一二年　平田九郎右衛門　一三年　和田平七
町田弥市右衛門

一一年　川村四郎左衛門
一七年　中島七左衛門
一二年　中神七左衛門
一五年　川上納右衛門
一壱年　伊集院嘉左衛門
一壱節寄　村田十左衛門
一壱節寄　丹生助右衛門
一一年　伊地知八郎兵衛
一三年　長崎源助
一一年　（ママ）藤左衛門
一一年　町田越右衛門
一四年　島津主水久輔
宝永四年丁亥十二月十六日被仰付候、
宝永七庚寅七月九日御役御免、
一二年　伊集院十右衛門
宝永四年丁亥十二月十六日被仰付候、
宝永五年戊子三月十一日寺社奉行江
御役替、
一四年　鎌田源左衛門
宝永四年丁亥十二月十八日被仰付候、
一十年　菱刈孫兵衛
宝永五年戊子七月二十一日被仰付候、
享保二年丁酉十一月十五日大目附江
御役替被仰付候、
一六年　頴娃長左衛門
宝永六年己丑十一月十八日被仰付候、
御役内被相果候、
一五年　町田宇右衛門
宝永七年庚寅正月二十五日被仰付候、
正徳四年甲午六月九十二（ママ）才にて御役
内被相果候、
一七年　新納左京久敦
正徳三年癸巳八月二十八日被仰付候、
享保四年己亥十一月六日寺社奉行江
御役替、
一九年　島津主計
正徳四年甲午九月二十一日被仰付候、
享保七年壬寅九月二十三日寺社奉行

江御役替、

一十四年　堀甚左衛門興昌

正徳五年乙未十一月九日被仰付候、

享保十二年丁未十二月二十三日大目

附格江御役替、同十三年戊申十二月

二十八日格之字被相除候、

一二年　向井十郎太夫

享保二年丁酉十一月十五日被仰付候、

同三年戊戌七月朔日依願御免、

一十七年　肝付典膳

享保三年戊戌七月二十五日被仰付候、

同十九年甲寅二月二日寺社奉行江御

役替被仰、

一四年　蒲生十郎兵衛

享保四年己亥十一月十一日被仰付候、

同七年壬寅正月十六日依願御役御免

被成、

一八年　相良清兵衛

享保七年壬寅正月二十三日被仰付候、

享保十四年己酉十二月御役内被相果

候、

一十三年　平田新左衛門

享保七年壬寅九月二十一日被仰付候、

享保十九年甲寅八月二十六日御役御

免被成、

一七年　相良權太夫

享保七年壬寅、享保十三年戊申十二

月十三日依願御役御免、

一六年　宮之原甚太夫

享保十四年己酉正月十一日被仰付候、

享保十九甲寅八月二十六日御役御免、

一一年　高橋外記

享保十九年甲寅二月二十八日被仰付

候、享保十九年寅八月廿六日御役御

免被成、

一四年　島津外記　初又七

享保十九年甲寅八月二十六日被仰付、

享保廿一年丙辰五月五日外記と名替、

元文二丁巳正月二十九日暁被相果候、

一四年　谷山角太夫

右同、

元文二丁巳四月廿八日依願御役御免、

一十四年　島津頼母

享保十九年甲寅八月二十六日被仰付　初郷太夫

候、元文三年戊午三月十五日頼母与

名替被仰付候、延享四年丁卯三月六

日死去、

一二年　鎌田太郎右衛門

享保二十年乙卯八月十五日、勤方之

義者此内堀四郎太夫殿被相勤候御勝

手方勤に被仰付候、元文元年丙辰十

一月十八日御勝手方添役ニ御役替、

一日数十九日　伊勢兵部

元文元丙辰八月三日寄御勘定奉行、

同月二十一日迄相勤候事、

一三年　島津弥市郎

元文二年丁巳四月二十七日被仰付候、

元文四年己未正月十一日寺社奉行江

御役替、

一五年　伊勢兵部

元文四年己未正月十一日被仰付候、

寛保三年癸亥十二月十五日若御年寄

江御役替、

一三年　河野八郎左衛門

寛保三年癸亥六月二十四日被仰付候、

延享二年乙丑十一月十六日　薩州様

御方御側詰江御役替、

一五年　川田與右衛門

延享二年乙丑正月十一日被仰付候、

寛延二年己巳九月朔日御大目附御勝

手方添役ニ御役替、

一一年　小林仲太兵衛

延享四年丁卯四月二十七日被仰付候、

同五年戊辰正月十一日寺社奉行江御

役替、

一二年　大野清右衛門

延享四年丁卯七月二十二日被仰付候、
但御勝手方勤、同五年戊辰四月二十
五日御役御免、

一六年　比志島隼人　初彦五郎
延享五戊辰正月十一日被仰付候、同
十五日隼人与名替被仰付候、寛延三
年庚午正月十一日御小姓組番頭兼務
被仰付、宝暦三年癸酉六月廿八日死
去、

一三年　西彦太郎
延享五年戊辰七月二十一日被仰付、
寛延三庚午正月十一日依願御免、

一三年　喜入主膳
寛延二己巳九月十一日被仰付候、同
四年辛未四月六日依願御免、

一七年　有川幸右衛門
寛延二年己巳九月朔日御役替被仰付
候、調方勤、宝暦四年甲戌正月十七
日調方御引取ニ付御勘定所江相勤、
同五年乙亥九月十六日依願御役御免、

一十三年　島津求馬
寛延三庚午歳二月二十五日御勘定奉
行寄被仰付候、同年十月十一日御勘
定奉行、宝暦十二年壬午五月九日若
御年寄江御役替、

一二年　祢寝孫左衛門
寛延三年庚午十月十一日御勘定奉行
寄、同四年辛未九月十一日寄被差免、
本之通與頭御番被仰付候、

一十一年　島津大蔵　初三崎文太夫
寛延四年辛未九月十一日被仰付候、
宝暦六年丙子三月十四日島津大蔵家
跡ニ被仰付候、大蔵者拜領名、同十
一年十一月十八日寺社奉行江御役替、

一前後二十三日寄　頴娃内膳
宝暦五年乙亥十二月八日寄被仰付候、
同月廿日寄被差免、本之通與頭御番
頭、同六丙子歳正月十五日御勘定奉

行寄被仰付、同月廿四日寄被差免、
本之通與頭御番頭、
一前後三ケ月位寄　新納四郎
宝暦六丙子歳二月十五日寄被仰付、
同三月三日寄被差免、本之與頭番頭、
宝暦十一年辛巳四月二十六日御勘定
奉行寄、同六月廿九日御免、
一一ケ月餘　島津助之丞
宝暦六年丙子四月二十二日御勘定奉
行寄、同五月二十七日寄御免、本之
通與頭番頭、
一前後百日計　右同人
宝暦八年戊寅八月十五日御勘定奉行
寄、同十月六日寄被差免、本之通與
頭番頭、又宝暦十年庚辰正月七日御
勘定奉行寄、同二月廿七日寄被差免、
本之通與頭番頭、同十年庚辰十月十
八日寄、同十一月廿六日寄御免、本
之通與頭番頭、

一八十日位　肝付弾正
宝暦九年己卯二月廿二日御勘定奉行
寄、同五月十二日御免、本之通與頭
番、（頭脱カ）
一三年　本田久米右衛門
宝暦十年庚辰十一月二十五日被仰付、
同十二年壬午三月十日死、
一日数八日位　島津助之丞
宝暦十一年辛巳七月廿八日御勘定奉
行寄、同年八月五日寄御免、本之通
與頭番頭、
一八年　渋谷喜三左衛門
宝暦十一年辛巳八月四日被仰付候、
明和五年戊子十一月朔日依願御免、
一　新納四郎
宝暦十二年壬午二月十四日御勘定奉
行寄被仰付、
一三年　新納四郎
宝暦十二年壬午四月九日被仰付候、

同十四年丁亥（甲申カ）三月十五日寺社奉行江
御役替、
一日数四十三日位　島津直江
宝暦十二壬午歳五月十七日御勘定奉
行寄被仰付、同年六月九日御免、本
之通與頭番頭、
一二十一年　鎌田太郎右衛門
宝暦十二年壬午十一月朔日被仰付候、
天明二年壬寅二月寺社奉行江御役替、
一日数四日位　島津助之丞
明和元年甲申七月廿三日御勘定奉行
寄被仰付候、同月廿六日寄御免、本
之通、
一九年　島津右膳
明和二年乙酉八月十一日被仰付候、
安永二年癸巳十月十六日死去、
一八年　財部孫之丞
明和二年乙酉八月廿三日被仰付候、
同九年壬辰二月十三日依願御役御免、
一八年　福山平太夫
明和三年丙戌九月廿八日被仰付候、
安永二年癸巳五月廿七日依願御役御
免、
一十五年　仁禮仲右衛門
明和七年庚寅正月十五日被仰付候、
天明四年甲辰正廿一日病死、
一十五年　二階堂源太夫
明和九年壬辰八月廿五日被仰付候、
天明六年丙午三月十三日寺社奉行江
御役替、
一十四年　小林仲太兵衛
安永三年甲午正月十一日被仰付候、
天明七年丁未六月二十八日寺社奉行
江御役替、
一十五年　島津内記
天明二年壬寅二月六日被仰付候、寛
政八年丙辰正月十一日大番頭江御役
替、

一十年　島津内膳
天明二年壬寅二月六日被仰付候、寛
政三年辛亥三月三日寺社奉行江御役
替、
一二十年　町田主馬
天明六年丙午十二月十五日被仰付候、
文化二年乙丑六月十五日寺社奉行江
御役替、
一五年　山田司有儀
天明七年丁未六月十七日被仰付候、
寛政三年辛亥三月三日寺社奉行江御
役替、
一十五年　新納五郎右衛門
寛政二年庚戌正月十一日被仰付候、
享保(和)四年甲子正月廿二日大番頭御役
替、
一二年　築崎蔵太左衛門
寛政三年辛亥正月十一日被仰付候、
同四年壬子五月十九日病死、

一九年　大野隼人
寛政三年辛亥三月九日被仰付候、同
十一年己未十二月六日依願御役御免、
一八年　鎌田蔵人
寛政五年癸丑正月十九日被仰付候、
同十二年庚申六月二十五日病死、
一十三年　鎌田愛太夫
寛政五年癸丑七月二十八日御勘定奉
行にて御側役詰被仰付候、文化二年
丁丑(乙)二月廿五日大御目附格被仰付候、
一十年　本城源七郎
寛政七年乙卯二月六日江戸ニおひて
被仰付候、文化元年甲子六月廿四日
病死、
一十八年　北郷權五郎
寛政八年丙辰正月十五日御小姓與番
頭より被仰付、無御扶持、文化十年
癸酉正月二十一日病死、

一八年　梅田九左衛門　後号梅秀
寛政九年丁巳三月四日御用人より被
仰付候、文化元年甲子六月晦日依願
御役御免被成、

一九年　島津内匠
寛政十二年庚申八月十五日御小姓與
番頭より被仰付候、文化五年戊辰九
月廿七日被　聞召通趣有之御役御免
被成、寺入、

一四年　伊集院四郎
享和元年辛酉八月十六日御勝手方御
用人より被仰付候、文化元年甲子十
一月三日依願御免、

一　川上九戸
文化元年甲子十一月二十一日御勝手
方御用人より被仰付候、

一四年　島津相馬　久謙
文化二年乙丑九月十九日御小姓與番
頭より被仰付候、同五年戊辰九月二
十九日若年寄江御役替、

一　市田壬生　義直
文化五年戊辰九月廿九日無役より被
仰付候、

一四年　名越右膳　盛尚
文化五年戊辰十二月二十四日御小姓
與番頭より被仰付候、同八年辛未十
二月七日病死、

一四ヶ月　関山軍兵衛　金言
文化九年壬申正月二十五日御小姓與
番頭より御勘定奉行寄、同年四月廿
八日寄御免被成、本之通御小姓與番
頭、

一　右同人
文化十年癸酉正月二十五日御小姓與
番頭より被仰付候、

一七年　伊集院蔵主
文化十二年乙亥十二月十九日御小姓
與番頭より被仰付、天保二年迄、

一　桂太郎兵衛　久郷
文化十二年乙亥十二月十九日御小姓
與番頭より被仰付候、

一　島津登　久備

御使役記　古ハ申口役、御使衆、當分御用人、

一忠治公御代、　二階堂左馬助
一右同、　本田治部左衛門尉
忠朗子
伊集院掃部助忠倉
忠倉子
伊集院掃部助忠金
天正七年卯十月廿九日於帖佐死、　本田山城守親歳　初ハ弾正　入道嘉辰
今御小姓與
慶長十年（巳カ）九月朔日死、六十一、　鎌田出雲守政近
一自伊集院久治至河野清通、元亀四年四月二十一日八人衆誓紙在小松家なり、　伊集院右衛門兵衛久治　後下野守　入道抱節
上原長門守常尚
市來民部太輔家諸　今霧田士欣
新納刑部太輔忠元　後武蔵守
喜入攝津守季久
伊集院右衛門太夫忠兼
本田民部左衛門忠親　今小番
河野備前守清通　今難考
鎌田尾張守政年　後源左衛門
町田出羽守久倍　初加賀守（伊カ）
猿渡大炊助入道休覚　今小番
本田因幡守親治
阿多掃部助忠辰　今小番
上井神左衛門覺兼
伊集院半右衛門尉久元
本田若狭守親豊　後治部少輔

伊集院肥前守久春入道
玄巣　初源介
村田右衞門尉經平
今御小姓與
白濱周防守重政
今小番
伊地知伯耆守入道
重秀　増也　今小番
初勘解由左衞門尉
平野丹後入道政友
今小番
吉田美作守清孝
今小番
伊地知雅楽助重信
今難考
本田下野守親貞
入道三省　今小番
比志島宮内少輔
國貞　今小番
本田刑部少輔正親
今小番
鎌田刑部左衞門尉
政廣　今小番
税所越前守篤信
初新助　入道休屋

寛永六年死、

山田新助有信
入道理安
新納右衞門佐久饒
後五郎右衞門
入道遊甫
新納縫殿助久時
今小番
稲留新助長辰
後相良新右衞門
日向守長泰　今小番
猿渡勘左衞門信元
今小番
伊勢兵部少輔
貞昌
平田太郎左衞門増宗
跡なし
村田雅楽助經宣
入道壽仙　今小番
宮原左近将監景清
入道秋扇　今小番
宮原伊賀入道
今小番
五代右京亮
今小番

右三人武庫様御使衆与有之、此冊ニ相洩候ニ付補入之、

新納杢右衛門入道
一甫　今小番
鎌田出雲守政統
今寄合
猿渡新助信商
今小番
比志島宮内少輔
國隆　今小番
山田民部少輔有栄
税所弥右衛門篤信
今小番
伊集院半右衛門久光
今小番
柏原周防守公盛
未考得
三原諸右衛門重種
今小番
新納右衛門佐久詮
三原左衛門佐重庸
今小番
町田勘解由久則
今寄合
新納加賀守忠清
市來八左衛門家友

承應二巳七月十六日死、

明暦四年戊三月廿四日死、七十二才、

大興寺文書寛永十年酉四月八日御使衆と有、

右同、

系圖ニ承知(応カ)二年より、

正保三年丙戌正月十三日江戸おひて死、六十七才、

寛永二十年未五月晦日病死、四十才、

初掃部介　今小番
平田狩野介宗弘
後休甫
川上左近将監久國
佐多越前守忠増
初宮内少輔　今小番
北條土佐守時弘
後ハ最上土佐守義時
今小番
野村大学助元綱
今小番
喜入久右衛門久供
今小番
上井市正兼通
相良主税長廣
頴娃長左衛門久政
仁禮蔵人頼景
相良勘解由頼豊
今小番
鎌田源左衛門政有
頼景之子
仁禮主計頼充
今寄合

御引付留ニ、寛永二十年八月二日、御使役分として高弐百石被賜候間可有支配旨、山田民部少輔・頴娃左馬頭等四人之御引付あり、正保三年戊十一月四日御役内江戸におひ死去、（て脱カ）

寛文二年壬寅九月十四日死去、七十四才、

寛永十四年丑四月十九日死去、

旅庵智養子、實ハ川上左近将監久辰二男なり、

縫殿久時孫なり、

一加治木比志島久右衛門文書に先年拙者御使役被仰付云々、

一加治木古郷氏文書に元和二年御條書に見ゆ、

伊地知杢右衛門重政
今小番

川上又左衛門久道
今小番

鎌田左京政喬

相良杢助長信
初玄蕃

諏訪杢右衛門兼利
今小番

鎌田太郎右衛門政栄
今小番

高崎伊豆守能乗
今小番

新納仲左衛門忠雄
入道所印　今小番

新納縫殿久宗
今小番

比志島掃部助國詮
加治木士

新納雅楽助
加治木士

仁禮覺左衛門景治
今小番

大山伊豫守廣綱
今小番

比志島監物範員
今小番

五代少左衛門友喜
今小番

本田六左衛門親武
今小番

喜入五郎兵衛久治
今小番

喜入休右衛門庶流にて、大炊助久正二男丹波守久憲子なり、明暦元年より、

相良權兵衛頼貞
今小番

季彬補之、

池田圓右衛門文書に、休右衛門事大口へ罷移り居候処、新納刑部との御使役御當り候間、與力役相勤云々、

新納刑部忠秀

伊集院猪右衛門忠饒
今小番

平田藤右衛門宗則
今小番

川上久國御家老之節与力にて段々被召仕候、承應元年三月十五日より御使役被仰付候、

元禄十二年卯閏九月朔日死去、七十一才なり、

雅楽助經宣四代之孫、承應元年三月五日より、

平田新左衛門宗正
初式部　次郎兵衛

村田藤兵衛經固
今小番

比志島主膳國治
今小番

村尾源左衛門重候
後三左衛門　今小番

伊東肥後守祐昌
初仁右衛門　今小番

相良土佐守頼元
今小番

伊東三左衛門祐玄
今小番

比志島彦右衛門義時
不知

貞享三年比見ゆ、

諸家大概に、安房(其カ)も養子與右衛門両代共御使役と有之、

二階堂安房
今小番

二階堂與右衛門信行
今小番　初城之介

延寶三年卯三月十三(衍カ)日死去、六十三才、

長信子
相良杢之助長貞
新右衛門長治

能乗之子、貞享五年辰七月五日死去、

高崎伊豆守能延
今小番　初惣右衛門

イニ承應明暦元年三月、寛文十三年七月二十九日依願御免、

堀四郎左衛門興延
入道宗勲

江戸居付、

伊東次郎右衛門祐之
今小番

江戸居付、

相良主税長清
今小番

三雲太郎左衛門定直
今小番

伊勢平左衛門貞壽
系圖ニ貞寄と有之、
今小番

平山七兵衛子、寛文九年九月十七日より、寶永二年酉九月廿一日依願御免、

諏訪采女兼延
今小番

平山次郎右衛門忠知
今小番

忠昉二男太郎兵衛忠増子、

桂杢助忠保
入道鉄嚴　初如金(忠カ)

寛文三四年名寄帳ニ被仰付候事出候、寶永二年酉九月廿一日御役御免、

新納弥兵衛忠尊
初伊地知主膳重頼

鎌田後藤兵衛政房
今小番

寛文十二年子二月十二日より、寶永四年亥四月九日六番與頭被仰付候、

高橋七郎右衛門種周
初權左衛門

寛文十年より、

喜入次兵衛久甫
今小番

野津安右衛門鎮政
今小番

伊東五右衛門祐定
今小番

諏訪仲左衛門兼郷
今小番　初兼時

寛文九年より、

廣綱子
大山主馬綱道
初權左衛門　今小番

鎌田太郎右衛門政高
初次右衛門　今小番

相良源五左衛門頼安
今小番

黒葛原治部忠通
今小番

渋谷嘉納右衛門重依
初周防　今小番

能延之子
高崎權太夫能冬
初四郎兵衛　今小番

村田善太夫經智
初伊左衛門　今小番

平田清右衛門純音
今小番

右四人同日被仰付候、

江戸居付、

與頭、有故徳之島遠島、

與頭兼務、其後寺社奉行、

中神蔵之丞頼安
今小番

福屋助左衛門兼貞
今小番

野村太左衛門廣貫
今小番

仁禮覺左衛門景代
今小番

中原伊兵衛尚昭
今小番

仁禮與三左衛門景林
今小番

名越主膳時品
今小番

新納喜右衛門久盛
今小番

猿渡要人信安
初喜右衛門
今跡なし

市來次郎左衛門政芳
初家賢

上井五郎左衛門朗喜
今小番

與頭兼役、

元禄十四年辛巳十一月六日願之通御用人役御免之よし、横山日記にあり、

寶永二年酉九月二十一日御役御免、

元禄十四年より、

堀四郎左衛門興昌
初甚左衛門
四郎太夫

富山九右衛門義明
蔵賢とも　今小番

伊地知八右衛門重堅
今小番

赤松次郎右衛門則春
初新之丞

大野隼人久明

川村少左衛門秀高
今小番

綱通之子
大山權左衛門綱定
今小番

忠通之子
黒葛原源左衛門忠雄
初忠□

相良權太夫長規
初金左衛門　今小番

新納小右衛門久喜
今小番

川上八郎左衛門親村
初久清　今小番

寶永二年乙酉九月廿一日御役御免、元禄十四年辛巳十一月朔日村田平右衛門義御用人役にて初て之月番にて候事、

元禄十五年壬午二月十四日被仰付候事、横山日記ニ見ゆ、

右同日被仰付候、

寶永二年（乙）酉九月二十一日御免、

右同日御免、

享保六年辛丑七月九日御番頭被仰付、御用人兼役、同十三年戊申二月無調法故御役御免、同年六月朔日隱居閑入、

寶永二年（乙）酉九月任御用人役、賜二百石、且被補大根占地頭職、御側、

村田平右衛門經寧
今小番

兼延之子
諏訪市右衛門兼秩
初次郎右衛門
今小番

平田清右衛門純旨
初九郎右衛門
後賢道　今小番

五太夫子
鎌田傳兵衛政眞
今小番

家村平八住賢
今小番

三雲新兵衛定恒
今小番

町田八右衛門俊方
初孫七忠白　今小番

相良清兵衛長英
初頼庸　今小番

向井十郎太夫友貞
初市之丞　今小番

最上孫左衛門義陽
後右近　今小番

寶永三戊年より、組頭兼役ハ御免、正徳元年（ママ）より御側、寺社奉行、大目付、
御勘定奉行、
御側御用人、宝永四年丁亥九月九日三人同様被仰付候、
右同、
右同、
右同、
宝永五年戊子八月より、組頭兼役、
宝永六年己丑より表、正徳二年壬辰より御側、
宝永七年庚寅八月より正徳三年癸巳正月十三日まで御下屋敷方、
宝永七年庚寅三月二十七日より御側御用人、弐百五十石拝領、
正徳二年壬辰九月十八日依願御役御免、十月十七日梅翁と名替、

伊集院用之助久富
後織部
蒲生十郎兵衛清堅
今小番
米良藤右衛門重年
後比志島隼人　今小番
弟子丸與次右衛門宗武
今小番
菱刈新五兵衛重格
今小番
市來勘左衛門家貫
今小番
仁禮仲右衛門頼常
今小番
島津十郎左衛門久置
島津宇左衛門忠竹
後彦太夫
鎌田十左衛門政常
今小番
伊勢八右衛門貞庸
今小番

宝永七年庚寅八月十日より享保十年乙巳八月二十三日まで、其後御勘定奉行相勤、
享保七年壬寅八月十八日迄御下屋敷方、
享保十三年戊申五月二十一日まで、
正徳三年癸巳五月朔日より、
正徳二年壬辰五月三日より同三年癸巳五月二十八日迄、
正徳三年癸巳八月二十八日より御側、後ハ寺社奉行、大目付、
正徳二年壬辰八月二日より、
正徳五年乙未九月九日より、組頭にて兼役、享保二年乙卯八月十日まで、後ハ御勘定奉行、
正徳五年乙未十二月二十六日より、組頭兼役、享保十四年己酉正月十一日轉御勘定奉行、
正徳元年辛卯八月二十二日御免、小普請、
御側、

谷山角太夫純房
初忠昶　今小番
山田四郎兵衛有儔
後源之丞　今小番
頼安之子
中神与五左衛門
初頼房　今小番
北郷右衛門八久治
後助太夫　今小番
上村茂兵衛政興
今小番
種子島十左衛門時成
後北條織部
義岡左平太久守
初源右衛門忠守
鎌田六郎太夫政直
後太郎右衛門
宮之原甚太夫重行
初甚五太夫
若松十左衛門久鑑
今小番
平岡八郎太夫之品
後内匠　今小番

一正徳六年（丙）申二月朔日より吳國方奏者番、
一御側、後ハ寺社奉行、
享保三年戊戌四月十六日より、同十年乙巳十二月二十一日有故御役御免、小普請、後遠流、
享保五年庚子五月十五日まて、
御勝手方、享保十九年庚寅（甲）二月二日まて、後ハ御勘定奉行勤仕、
享保五年庚子五月十日まて、
享保三年戊戌七月、
隅州様御方、
享保十五年庚戌七月まて、御側、御隠居様御方附、
享保十三年戊申九月迄　隅州様御方附、
享保六年辛丑正月十一日より同十四年己酉二月八日迄、

樺山權左衛門久堅
初主計久初（後カ）
頴娃長左衛門久周
今寄合
高橋七郎右衛門種房
村田九郎左衛門經武
今小番
高橋外記種長
和田次兵衛助演
今小番
讃良善助貞伴
今小番　初權左衛門
伊地知越右衛門重澄
今小番
山口五太夫利倍
今小番
相良仁右衛門聰香
今小番　隠居嘉翁
伊集院權右衛門久盛
盛央とも　今小番

享保八年癸卯十二月十一日より、組頭兼役、同十九年甲寅正月十一日轉寺社奉行、
享保九年甲辰三月朔日より同十六年辛亥五月二十一日まて、
享保九年甲辰三月朔日より、
享保八年癸卯四月二十八日より、
享保十年乙巳五月九日より、
享保十一年丙午正月十一日より、
享保十一年丙午七月四日より同十三年戊申七月五日迄、御近習役兼役、
一享保十一年丙午七月十八日より、同二十年乙卯十二月二十二日轉大目附、
一享保十一年丙午八月六日より、元文五庚申正月十八日より御側、延享五年戊辰七月二十一日轉御勘定奉行、

伊集院十蔵久達
土持十右衛門信秋
今小番
尾上甚五左衛門信茂
今小番
左近充與太夫尚方
今小番
篠崎八左衛門
今小番
福山平太夫安村
今小番
諏訪仲右衛門兼品
今小番
米良藤右衛門則般
今小番　初重堅
島津右平太久品
西彦太郎純孚
今小番

一享保十二年丁未四月十八日より、同十五年庚戌九月御側、御近習役、御主殿方（守カ）、元文三年戊午六月廿五日より御勝手方御用人、宝永六年己丑十月山沢氏拜領、本名八大野、享保十三年戊申十月十八日より、御近習役兼役、同十四年己酉十月二十日より御主殿方（守カ）、同十六年辛亥三月十一日御役御免、小普請、宝暦五年乙亥九月九日御下屋敷方、同八年戊寅六月二十一日御役内死去、

木脇嘉左衛門祐盛
今小番

一享保十三年戊申三月十五日より御近習役、享保二十年乙卯八月九日御免、大番頭被仰付候、

山澤十太夫盛香
今小番

一享保十五年庚戌七月二十一日より御隠居様御方、寛保元年辛酉三月二十一日轉大目附、

町田八左衛門俊昌
今小番

一享保十四年己酉十月二十八日より御主殿方（守カ）、後轉大御目附、

鎌田平右衛門政興

享保十六年辛亥六月二十八日より、

小笠原彦八郎長賢
後郷左衛門

享保十四年己酉十一月十三日より御近習役、

中野駒右衛門利清
今小番

享保十七年壬子正月十一日より、元文四年己未八月十一日より御側、延享三丙寅於江戸轉大目附、

河野八郎左衛門通興
今寄合并

鎌田源左衛門政昌
後典膳

一享保十一年十二年比御勝手方、同十六辛亥四月二十六日御側、御近習役兼務、御主殿方（守カ）、公義御内證方、同二十一年丙辰正月十二日御役御免、

向井十郎太夫友栄
今小番
初四郎右衛門

一享保十七年壬子九月六日より御隠居様御方、元文二丁巳四月二十七日轉若御年寄、

島津權左衛門久道
後仲　隠居号久隣

一享保六七年比より御隠居様御方、

相良典禮長次以欽
初源太夫

一享保十六年辛亥四月二十一日より、元文元年丙辰七月朔日より御側、

平田平太左衛門位充
今小番

享保十九年甲寅三月十一日より、

小林仲太兵衛政一

享保十九年甲寅八月二十一日より、元文三年戊午六月廿五日御側、

島津弥市郎久純
後矢柄久當

享保十九年甲寅正月十一日より、元文二年丁巳十一月十一日轉大目附、

森川理右衛門武宣
今小番

山岡權太左衛門久房
後齋宮久柄

山田新助有従

一享保二十年乙卯八月十五日より、
本膳所浪人
戸田平次盛紹
今小番

一享保十九年甲寅九月二十六日より御勝手方、同二十一年丙辰正月十一日御側方、公義方、御内證方、御主殿方（守カ）、御近習役兼務、
市來次郎左衛門政方
後左中

一享保二十年乙卯十二月五日より御勝手方、延享四年丁卯七月二十八日轉御勘定奉行、
大野清右衛門清堅
今小番

享保二十年乙卯十一月十一日より、元文元年丙辰十一月二十五日依願御役御免被成候、
名越左源太恒素

元文二年丁巳四月二十七日より表、御（衍カ）御側、御勝手方、段々被召替、寛延二己巳（九）月（朔）日轉御勘定奉行、
有川幸右衛門貞利
今小番

享保二十一年丙辰正月十一日より御勝手方、
郷原金太夫久雄

元文三年戊午六月二十五日より、宝暦四年甲戌正月七日依願御役御免、
蒲生十郎左衛門清高
今小番

元文二年丁巳七月十一日より、宝暦四年甲戌四月十一日依願御免、御勝手方、
肥後平左衛門盛房
今小番　初平右衛門

一元文四年己未正月十一日より、寛保三年癸亥六月七日轉大目附、
平田次郎兵衛正輔

元文二年丁巳六月六日より御側、其後病身依御断表御用人被仰付、御機嫌伺等是迄之通、
木村四郎左衛門時英（央カ）
今小番

一元文五年庚申正月十一日より、
義岡左平太久中
後相馬　弾正

一元文三年戊午十一月十一日より御側御用人於江戸被仰付候、同四年己未三月九日病体依願御役御免被成候、
尾上甚五左衛門信房
今御小姓与

寛保元年辛酉三月十一日より、延享四年丁卯十二月二十二日依願御役御免、宝暦十二年壬午十二月十一日より再任礒御方、安永八年己亥寺社奉行如本、
島津登久運（連カ）
初久亮

元文五庚申歳二月朔日より、寛延四年甲戌閏六月七日依願御役御免、（辛未）
伊地知千左衛門季伴
今小番

一寛保元年辛酉十一月六日より、延享二年乙丑正月十一日轉御勘定奉行、
川田與右衛門國富

一寛保元年辛酉十一三日より礒御方（江）、
米良藤右衛門則倜
今小番

一寛保三年癸亥六月四日より、寛延元年戊辰八月十五日より御側御用人、同四年辛未九月十一日轉御勘定奉行、
三崎平太夫久迢
文太夫　今小番

一寛保元年辛酉三月十一日より、同年十二月轉寺社奉行、
本田作左衛門由親
初新次郎

（寛カ）享保四年甲子正月十一日江戸お
ひて被仰付候、延享四年丁卯十
二月二十六日依願御免、御用人
格にて三次郎殿江被召附候、宝
暦七年丁丑正月十一日再任、

一寛保四年甲子正月十一日より、
延享五年戊辰三月七日御側御用
人、同年八月七日轉大目附、

寛保四年甲子三月二十一日より、
寛延四年辛未正月二十八日為寺
社奉行、

一延享元年甲子五月朔日より、寛
延二年己巳為寺社奉行、

一延享元年甲子十一月二十一日よ
り、宝暦六年丙子七月二十八日
依願御免、

延享二年乙丑正月十一日より、
寛延二年己巳十月三日御側、

一延享四年丁卯七月十一日より、
宝暦二年壬申七月十五日退役、

一延享五年戊辰二月二十一日より、
宝暦十一年辛巳十二月依願御免、

一延享五年戊辰六月六日より御勝
手方、寛延二年己巳十一月二十
九日被召込、

一延享五年戊辰七月二十一日より、
寛延四年辛未五月七日為大目附、

相良源太夫長儀

新納次郎兵衛久品

宮之原甚五兵衛通興
隠居冬山

島津十太右衛門久命

戸田傳五郎盛庸
今小番

北郷助太夫久儔
後七郎左衛門

川上瀬兵衛親興
今小番

基多村助左衛門尚香
今小番

皆吉九平太續安
今小番欠

高橋七郎右衛（門脱カ）種敏

一寛延元年戊辰八月廿七日より、

一寛延元年戊辰八月二十七日より、
同二年己巳為若年寄、

一寛延元年戊辰八月二十七日より、
同二年己巳六月七日御側、宝暦
六年丙子二月為寺社奉行、

一寛延元年戊辰九月廿一日より、

寛延元年戊辰十二月二十一日よ
り御側、宝暦八年戊寅より御下
屋敷方江被差分、隅州様御逝
去後如本、明和二年乙酉八月廿
三日為御勘定奉行、

一寛延二年己巳六月七日より、宝
暦二年壬申七月朔日為大御目附、

寛延二年己巳九月朔日より隅
州様御側、宝暦十一年辛巳七月
二十八日依願御免、

一寛延二年己巳九月朔日より御側
御用人格、同三年庚午七月廿一
日御側、宝暦七年丁丑四月二日
於江戸変死、

伊集院十左衛門久東
後十蔵　織部

島津左近久起
後将監

菱刈孫兵衛實詮
後藤馬

相良弥一兵衛長主
今小番

財部孫之丞盛興
今小番

諏訪次郎左衛門邦兼
後勘解由　今小番

関山軍兵衛金麻
今小番

二階堂林左衛門行通
今小番

島津權左衛門久智
後仲

北郷八右衛門資矩
今小番

寛延四年辛未正月二十八日より
御側御用人、後御勘定奉行、明
和五年戊子十一月朔日依願御免、
明和八年辛卯代〻寄合被仰付候、

宝暦九年比欠、

渋谷喜三左衛門貫通
今小番

名越左源太恒篤
寄合欠

堀堀右衛門貞矩
後貞紀　今小番

川上弥五太夫久福
寄合

福山平太夫友都（安カ）
今小番

町田主計久張

諏訪甚兵衛兼方
今小番

樺山左京久倫
初權兵衛

堀四郎太夫興貞
初甚左衛門

河野安之右衛門通古
後八郎左衛門　寄合

桂太郎兵衛久中

宮之原甚五太夫通直
後主膳

宝暦十年庚辰三月九日御用人格
にて江戸御留守居如本、同十二
年壬午六月十五日表御用人、同
十三年癸未　月十八日御勝手方、
明和六年己丑十二月十五日御側
御用人、明和九年壬辰二月死去、

一宝暦六年丙子七月二十一日より、
同九年己卯八月九日御役内病死、

一宝暦六年丙子七月二十一日より、
安永三年甲午正月十一日轉御勘
定奉行、

一宝暦七年丁丑正月十一日より御
下屋敷方、同十一年辛巳七月二
十八日依願御免、明和四年丁亥
十月再任、同八年病死、

一宝暦七年丁丑正月十一日より、

一宝暦七年丁丑正月十一日より御
番頭にて御用人勤、安永五年丙
申八月廿三日御役内病死、

宝暦七年丁丑十月十八日より、

宝暦八年戊寅七月二十八日より、
同十一年辛巳十月十九日御側、
明和七年庚寅閏六月廿八日江戸
おひ大目附格寄合被仰付候、
（て脱カ）

一宝暦八年戊寅正月十一日より、
明和元年甲申八月二十一日病死、

岩下佐次右衛門方峯

中馬源兵衛諸香
今小番

小林仲太兵衛政英（央カ）

石原戸（黒カ）後左衛門茂矩
今小番

島津小平太久金
後左中

川田彦七國起

喜入主馬久福
初安次郎

赤松造酒則正
初甚左衛門　寄合

三原源五左衛（門脱カ）經居
今小番

一宝暦八年戊寅九月七日より御側、同十一年辛巳七月十九日表、同十三癸未十一月十九日御勝手方、依願御免、

一宝暦十庚辰八月十五日より、同十三年癸未七月六日（ママ）宝暦十年庚辰三月九日より御側、明和九年壬辰八月二十四日轉御勘定奉行、

一宝暦十庚辰六月朔日より表御用人、與頭如本、明和二年乙酉三月廿七日依願御免被成候、

一宝暦十一年辛巳八月二十五日御下屋敷御側御用人依願御免、同年十二月朔日より御勝手方、

一宝暦十二年壬午八月十八日御用人格にて御用人座江可相勤被仰渡候、

一宝暦十三年癸未七月廿一日より御側、

宝暦十三年癸未七月二十八日より、明和二年乙酉七月十八日依願御免、

一明和二年乙酉七月二十一日より、勤方御近習役、同七年庚寅（丁丑）閏六月二十八日御側、於江戸大目附寄合被仰付候、

迫水善左衛門久芳
今小番

山岡齋宮久澄
初權左衛門　後市正

二階堂源太夫行端

町田源左衛門久亮

山田元右衛門有隆
今小番

佐久間源太夫
九右衛門欠　今小番

島津矢柄久籌
初矢一郎

木脇伊左衛門祐純
今小番

二階堂部行亘（旦）
後主計

一明和二年乙酉七月二十一日より、勤方御近習役、御番頭、

宝暦十四年甲申正月十一日より、明和四年丁亥九月二十八日より御側、

一宝暦十四年甲申正月十一日より、明和四年丁亥七月五日於江戸病死、

明和二年乙酉八月十一日より、寛政三年辛亥三月九日より御勘定奉行、

明和年比、

明和年比、

関山新左衛門金郷
今小番　後軍兵衛

新納次郎四郎久儔
後内蔵

伊集院伊膳久郷
寄合

大野多宮久富
今寄合

谷山角太夫純庸
今小番

仁禮仲右衛門
今小番

村橋左膳久昌
今寄合

島津求馬
今寄合

西平太純房
後恰之介　今寄合

比志島要人範章
今寄合

菱刈孫兵衛實祐
後大炊　下総

小松仙十郎清行

明和六年己丑十二月十五日より御側、安永三年甲午七月廿五日御番頭、

後右近
藤野休右衛門良記
今小番
政昌之子
鎌田典膳政為
初杢之丞
小笠原郷左衛門長舊
今小番

明和八年辛卯十一月八日より御側、

中村與太夫種暁
今小番
種子島十郎太夫時方
今小番

明和九年壬辰十一月十三日より、

頴娃波江久喬
後信濃
平田平太左衛門位就
跡不知
山岡權左衛門久容
後市正
赤松新之丞則方
今寄合
横山權右衛門
今小番
山田司有儀
初彦八郎　後伯耆

御勝手方、

安永五年丙申八月二十三日より、御近習役兼務、天明七年丁未六月十七日御勘定奉行、

安永七年戊戌七月より、同八年己亥十二月轉寺社奉行、

一安永七年戊戌七月十八日より、天明元年辛丑十一月十五日於江戸御側、寛政三年辛亥六月江戸におひて死去、

一安永七年戊戌七月より、後御側、寛政三年辛亥正月十一日轉御勘定奉行、

天明元年辛丑十一月十五日江戸におひて被仰付候、

一安永九年庚子七月二十八日より、

一安永九年庚子七月二十八日より、

天明二年壬寅正月十五日御勝手方、

此面種壽之子
高橋縫殿種央
今寄合
島津弥市郎久宅
後矢柄
桂杢右衛門久連
今寄合
川上久馬久致
大島休左衛門久皐
今小番
篠崎蔵太左衛門仲泰
今小番
有川勇馬貞厚
今小番
島津主水久兼
初（ママ）
島津十太右衛門久大
後帯刀
町田式部久輔
初源左衛門　後主馬
町田幸太郎實裕
今小番

天明六年丙午江戸におひて御側御用人、後御勝手方、寛政七年乙卯四月廿六日病死、

一寛政二年庚戌正月より御側、同六年甲寅六月當番頭、表御用人、

天明六年丙午、

天明四年甲辰正月十一日表、

天明七年比、

鹿嶋邊國富
今小番
初傳五左衞門

鎌田愛太夫政詮
今小番

市來次郎左衞門政弼
今小番

北郷助太夫久風
今小番

松崎次左衞門貞儔
今小番

谷村孫右衞門純章
今小番

岩下佐次右衞門方泰
今寄合

面高善右衞門俊直
今小番

種子島雲治
今小番

伊地知嘉右衞門季直
今小番

山田弥九郎有貞
今寄合

伊集院伊膳久備
今寄合

天明八年戊申正月十一日より、

天明八年戊申正月十一日より、寛政三年辛亥三月十八日御側、

一天明七年比、

天明八年戊申正月十一日より、寛政元年己酉十一月朔日御側、寛政五年癸丑於江戸病死、

天明八年戊申八月より、寛政元年己酉八月御免、寛政十一年己未五月廿五日再任、

寛政二年庚戌四月二十八日町奉行より、

寛政二年庚戌八月二十三日御船奉行にて御藥園掛より、

喜入休右衞門譽央
今小番

伊集院隼衞兼當
今寄合

島津主水

北郷八右衞門資甫
今小番

伊集院織部
今寄合

郡山權蔵長矩
今小番

石原龍助近喬
今小番

堀四郎太夫興長
今寄合

西恰之介純以
今寄合

新納次郎四郎久起
今寄合

伊集院四郎兼芳
今小番

村田為右衞門經韜
今小番

寛政三年辛亥三月三日町奉行より、
寛政三年辛亥三月三日町奉行より、同九年丁巳三月四日御勘定奉行江、
寛政三年辛亥十月より御側、
寛政三年辛亥より御側江、
一寛政九年丁巳十一月廿一日御側より、
一寛政元年己酉　月より御留守居勤、同九年丁巳正月より御用人勤、
一寛政五年癸丑八月二十一日御用人格教授勤、
寛政五年癸丑八月十一日より御側、
寛政五年癸丑八月十一日より御側、

迫水善左衛門
今小番
梅田九左衛門盛香
今小番
島津九十九久徴
仲久美コト欠
大重五郎左衛門兼寛
今小番欠
河野外記通護
今寄合欠
本城源七郎輝承
今小番
相良兎毛
今小番
伊集院弥平左衛門俊常
今小番
山本傳蔵正誼
今小番
本田助之丞親就
今御小姓與欠
鷲頭喜兵衛永詮
今小番
名越左源太盛尚
後右膳

御側、
御勝手方、
寛政八年丙辰御側より、
寛政五年癸丑八月物頭より、
寛政七年乙卯四月物頭より、享和二年壬戌十二月十三日依願御免、
一寛政八年丙辰五月より表、
寛政九年丁巳三月朔日町奉行より御側、
寛政九年丁巳六月二十三日物頭にて御使番より御勝手方、御勘定奉行、

藥丸猪右衛門兼陣
今小番
島津仁十郎久芳
一所持　市成郷領主
鎌田源左衛門政輿
今寄合
吉井新太夫
今小番
西覺兵衛長照
今小番欠
倉山作太夫季武
初藤覺　今小番
三崎治部
今小番
樺山助之進資孫
今小番　後物（ママ）
田畑武右衛門常直
今小番
石黒戸後左衛門
今小番
岡元千右衛門定好
今御小姓與
川上九戸親賢
今小番

一寛政九年丁巳三月二十一日町奉行より、文化四年丁卯五月御免、
寛政九年丁巳五月物頭より、
享和元年辛酉三月二十一日御鉄炮奉行より、
享和三年癸亥正月二十三日御隠居様御方、御納戸奉行より、
文化三年丙寅正月十一日町奉行より、

高田猛太夫利公
今小番
有川恰
今小番
相良此右衛門長祐
長純とも　今小番
比志島隼人
今寄合
諏訪甚太夫
今寄合
町田監物久視
今寄合
伊集院平
今小番
川上右近久芳
今一所持
市來蔀廣容
今寄合
伊東仙太夫祐喜
後祐貞　今小番
樺山權左衛門久言
今寄合
二階堂蔀行孝
今寄合

寛政十一年己未正月より、
寛政十二年庚申十月より、
御側、
文化五年戊辰七月被聞召通趣有之慎被仰付、九月廿七日寺領、
一寛政十年戊午五月八日より、御留守居勤、
享和二年壬戌正月より、御留守居勤、
寛政十二年庚申八二十七日より、
一文化四年丁卯十一月十九日道奉行より、當番頭にて御用人勤、
一文化四年丁卯十一月十九日道奉行より、後御側、
一文化五年戊辰　月より御側、

桂太郎兵衛久郷
今寄（ママ）
富山逸見末崔
今小番
山田權右衛門有琟
今小番
日高次左衛門
今小番
島津右平太久美
西郷八郎次房紹
今小番
倉欠
桑山作太夫
今小番
大山宗之丞綱道
今小番
秩父太郎季保
無跡
清水源左衛門盛之
御小姓組
勝部軍記興意
無跡
島津藤次郎久長
一所持　領黒木郷

文化五年戊辰五月、

島津杢久典
一所知覽郷領主

島津小平太久方
後縫殿
一所佐志郷領主

讃良善助
今小番

岩切賀藤次信芳
今小番

吉井七郎右衛門泰香
今小番

伊勢雅楽貞皎
末吉郷岩川村持切

赤松造酒則敏
今寄合

種子島次右衛門
今小番

田中藤右衛門
今小番

島津條馬久敬
今小番

川田伊織佐模
今寄合

伊集院蔵主久彬
今寄合

菱刈杢之助隆觀
今寄合

末川将監久満
今寄合

宮之原甚五兵衛通救
今寄合

平島平八
今小番

上村笑之丞行孝
今小番

長崎甚七義護
今小番

島津直江久尊

島津亘久方
今寄合

黒田才之丞清熙
今小番

鹿嶋傳五左衛門富親
今小番

村田孝右衛門純容
後功右衛門　今小番

上野善兵衛
後帯刀　今寄合欠

文化十三年丙子五月朔日江戸におひて病死、

文化十三年丙子八月二十八日病死、文化十二年乙亥十一月十四日物頭より、

文化十二年乙亥十二月十九日御使番より、

文化十四年丁丑十月九日病死、

文化十三年丙子七月十一日御納戸奉行より御勝手方、同十四年丁丑正月十一日御側御用人江轉勤、

文化十二年乙亥三月十七日物頭より、

文化十四年丁丑十一月十八日御側役より御側御用人、御趣法掛、

一文化十四年丁丑六月十九日表御用人、御趣法掛、イニ

文政五年壬午八月廿五日、

文政元年戊寅六月二十八日江戸におひて御廣敷御用人より御勝手方江、

一文政二年己卯正月十一日より表江、同七年甲申五月二十一日御用人より御勝手方江、

一文政二年己卯五月九日江戸におひて御留守居より、

一文化十四年丁丑十二月二十五日大御隠居様御附御小納戸頭取より御用人、御趣法方掛、

一文政二年己卯二月十五日當番頭より御用人勤、同年十二月十六日御小姓組番頭にて兼務、

文政二年己卯十一月十五日御小姓與番頭兼務被仰付候、

鷲頭喜兵衛永肇
後主水　今小番

伊集院亘久峯
今寄合

坂元平左衛門直高
今小番

志岐休之進親方
今小番

大窪源五郎知紀
今小番

吉井笑八郎友護
今小番

早川安積兼備
今小番

伊集院備久匡
今寄合

新納次郎四郎久敬

高橋轉胤賢

一文政二年己卯六月十六日より、

文政二年己卯八月二十三日御鉄炮奉行より、

一文政二年己卯九月三日御小姓與番頭にて御用人兼務被仰付候、

一文政三年庚辰六月廿五日、

一文政二年己卯十二月二十三日御鉄炮奉行より御趣法方掛、

一文政三年庚辰八月二十四日御小姓與番頭より御用人兼務被仰付候、

文政三年庚辰十月十四日甑島移地頭より御用人格教授勤、

一文政五年壬午正月二十五日當番頭より御用人勤、

一文政五年壬午八月十一日町奉行より御趣法方掛、

一文政五年壬午八月二十六日御鉄炮奉行より表御用人江、

一文政六年癸未十一月二十五日町奉行格御使番勤より御側御用人、

文政六年癸未十二月二十九日町奉行より御趣法方掛り、同十年丁亥正月二十八日表、

大山清太夫綱扶
今小番

島津矢市郎久計
後矢柄

町田勝兵衛久要
後少兵衛　今小番

二階堂八太夫行佐
今小番

岩下長左衛門方睡
今寄合

川上東馬久封

橋口權蔵璉
今小番

喜入相馬久通
後多門　一所鹿篭領主

樺山休太夫資俊
今小番

吉利右平太久照
後主馬

伊集院戸右衛門俊識
今小番

長束一郎右衛門正澄
今小番